

佐藤 郁 考古画譜Ⅰ



弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター

佐藤 郁 考古画譜Ⅰ



弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター

はじめに

弘前大学は、平成21年7月、青森市の成田恵子氏より、成田彦栄氏が収集した5000点を超す考古遺物と考古学・郷土史関係の図書約2200点、彦栄氏の調査記録類などの寄贈を受け、それらを保存・活用するため、人文学部附属亀ヶ岡文化研究センターに専用の収蔵展示室を新設した。

成田氏の収集品は、青森県の考古学のパイオニアである佐藤蒨が集めた遺物と、彦栄氏自身が調査・収集した遺物からなり、ともに津軽地方の資料を主体とする。成田氏の収集品は、青森県立郷土館が所蔵する風韻堂（大高）コレクションや八戸市是川遺跡出土品（泉山コレクション）とともに、縄文時代の遺物を中心とした個人コレクションでは、質・量ともに国内有数の資料といえる。

成田氏の収集品のなかには、明治から戦前にかけて青森県を代表する考古学研究者であり、植物学をはじめとして多方面で活躍した佐藤蒨のスケッチが多数含まれている。寄贈資料には佐藤蒨が文化財を描いたスケッチが約560枚あるが、そのうちの約8割以上を考古資料が占めている。

佐藤蒨が描いた考古資料の大半は縄文時代の遺物だが、須恵器や珠洲焼・古瀬戸など古代から中世の遺物も含まれている。スケッチに添えられた出土地や所蔵者に関する記述から、描かれた遺物の大部分は青森県内の出土品であり、佐藤蒨が精力的に県内各所に所蔵者を訪ね、考古資料を観察していたことが判る。スケッチの対象には、重要文化財に指定されている亀ヶ岡遺跡出土の遮光器土偶（東京国立博物館蔵）をはじめ、古くから知られた優品が多く選ばれており、その後、県外に流出し、現在は各地の博物館や大学の所蔵となっているものも少なくない。佐藤蒨のスケッチは、そうした遺物の出土場所や旧蔵者を特定する上で重要な役割を果たすとともに、黎明期の日本考古学界の人的ネットワークに関する情報を内包していることから、今年度より整理を開始し、整理の終わったものから図録として刊行することとした。本図録は、その第1分冊であり、主に土偶・土製品と後期以前の縄文土器を描いたもの120枚を選び掲載した。

寄贈者の成田家に感謝申し上げるとともに、本図録を通して、黎明期の日本考古学に大きく貢献した青森県内の遺跡、遺物、研究者・文化人に関心が寄せられることを望むものである。

平成21年12月

人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター長 関根 達人



目 次

はじめに	1
目次・例言	2
1. 佐藤蒨考古画譜について	3
2. 遺物解説	
(1) 土偶・土製品	7
(2) 前期・中期の縄文土器	10
(3) 後期の縄文土器	10
遺物リスト	12
写真図版	23

例 言

1. この図録は、平成21年度に青森市の成田恵子氏から弘前大学に寄贈された成田彦栄氏考古資料に含まれる、佐藤蒨が描いた考古・歴史・民俗資料に関する約560枚の絵画のなかから、主に土偶・土製品、後期以前の縄文土器が描かれたもの120枚を選び、掲載した。
2. 図版の縮尺は原画の2/3を基本とし、それ以外の縮尺のものは図版にスケールを入れた。
3. 本図録の執筆ならびに遺物リストの作成は、関根達人（人文学部准教授）と立花晃一（大学院人文社会科学研究科1年）が行った。執筆分担は次の通りである。

関根：1、2-(1)・(2) 立花：2-(3)

4. 図版の版組は、平成20年度の考古学実習として行った。実習の参加者は次の通りである。
葛西早津紀、菅野七瀬、菊地咲江、櫻田智恵、奈良美穂、本間大揮、三浦倫子、渡辺信彦
(以上8名、人文学部4年)
5. 本図録の編集は、関根が行った。
6. 本図録作成に関わる費用は、平成21年度弘前大学機関研究補助金から支出した。
7. 本図録の作成に関し、次の方々・機関の協力を得た（順不同・敬称略）。

成田恵子・成田容子・成田滋彦・市川健夫・遠藤正夫・太田原慶子・上條信彦・昆政明・
佐野忠史・福田友之・藤沼邦彦・村越潔
青森県立郷土館・長母寺

1. 佐藤蓐考古画譜について

(1) 佐藤蓐の画業と考古学

佐藤蓐（1852～1944）は、嘉永5年（1852）、和算家にして藩校稽古館の教官であった佐藤常蔵正行の長男として弘前城下亀甲町に生まれた。父母ともに浮世絵の筆法を好み、精巧細密な人物画に長けていたという（薄田1944）。蓐が弘前出身の国学者にして画人の平尾魯仙（1808～1880）の門下に入ったのは、17歳の時とも22歳の時ともされ、定かでない（註1）。また、18歳の頃、当時、弘前の旧士族の生活再建を指揮していた佐藤弥六（1842～1923）と出会い、弥六のもとで丸ペンによる製図をてがけたという（中村編1929）。仙之と号した蓐は、後に、三上仙年（1835～1900）、工藤仙乙（1839～1895）、山上魯山（はじめ仙室と号す、1853～1929）とともに、魯仙の高弟「四仙」の一人に数えられた。明治9年（1876）に行われた明治天皇の第1次東北巡幸の際、蓐が筆を執った弘前仲町のネプタ絵が天覧を受けたと伝えられる（『月刊東奥』44）。明治23年に青森大林区（大正13年に青森営林局に改称）勤務するようになって以降、植物採集をライフワークとしたこともあり、佐藤蓐の画業は、植物画が知られ、死後、彼の描いた植物画を集めた展示会が開かれている（註2）。

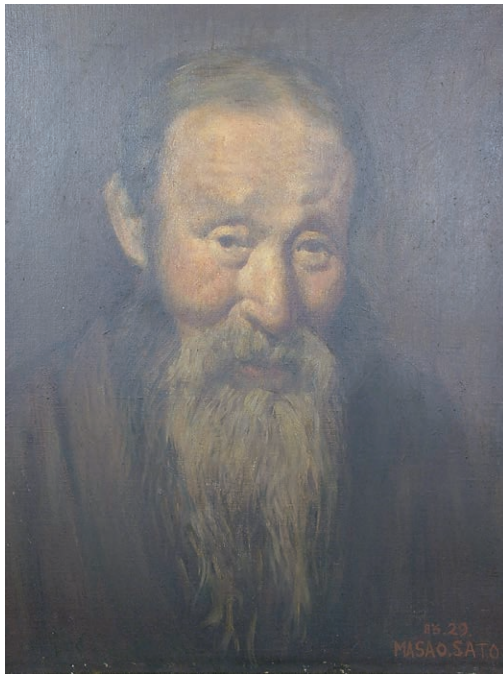
蓐と考古学との出会いは画業より遅れ、明治12年3月、蓐27歳の時である。親戚から贈られた亀ヶ岡遺跡出土の土器片に魅せられた蓐は、早速、現地へ買い集めに出向いたがなかなか手に入らなかったという（『東奥日報』1928年11月15日掲載「蒐集漫談（9）」）。明治19年、蓐は、東京人類学会に入会、明治20年代には、東京人類学会初代会長の神田孝平（1838～98）、帝国大学理科大学人類学教室の若林勝邦（1862～1904）、同じく地質学教室の佐藤傳蔵（1870～1928）など中央の学者と交流を持つとともに、東京人類学会雑誌にあいついで報文を発表するなど精力的な活動を展開する（関根・上條編2009）。その一方で、蓐は、放浪の画人として知られる土岐蓑虫（1836～1900）とも考古遺物を介して交わり、彼と同じように、自ら考古遺物を蒐集するとともに、所蔵家を訪ねては遺物のスケッチを重ねた。

蓐と蓑虫はお互いの所蔵品を見せ合う仲であり、二人が同じ遺物を描いたものも散見されるが、その画風は全く異なる。蓑虫が描いた遺物画の多くはデフォルメされており、時に実物との対比が困難なほどに著しい創作がみられるのに対して、蓐の絵はあくまで写実に徹している。これは、師について本格的に日本画を学んだ蓐と独自に画風を確立した蓑虫（太田1986）という違い以上に、二人の考古遺物に対する姿勢そのものの違いに拠るところが大きいのではなかろうか。すなわち、「蓑虫の考古学は懷古趣味の域を脱しえず、学問以前の段階に留まっていた」（杉山1967）のに対して、蓐には考古遺物を介してそれを生み出した人々を知ろうとする姿勢、すなわち近代的な考古学が身に付いていた。

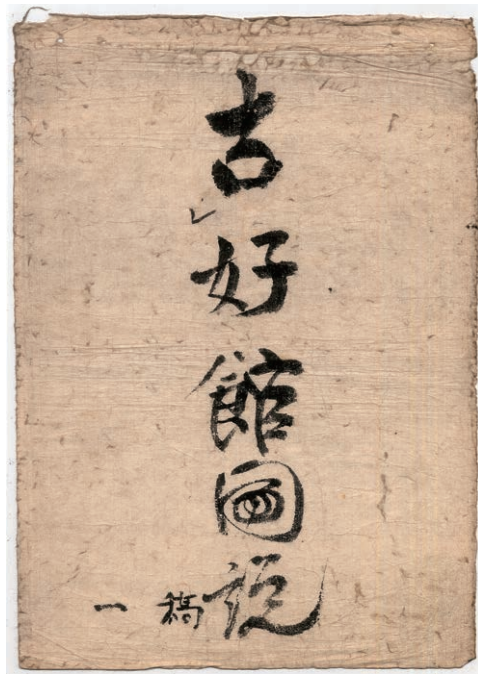
大正8年（1919）、大病に冒され足が腫れた蓐は、所蔵する土器や石器の優品を大阪の久原房之助に9千数百円（現在の価値にして約2000万円）で売却する（註3）。これが今日東北大学にある久原コレクションである（東北大学文学部1982、須藤編2007）。その後、病の癒えた蓐は遺物の蒐集を再開し、久原への売却から10年後には、収集品の数は千点近くに達していた（註4）。

(2) 考古画譜の概要

佐藤蓐が考古遺物を描いた絵は454枚あり、土器・土製品を描いたものと石器を描いたものがほぼ同数となっている。土器の絵には、1枚の紙に1ないし数点をいろいろな角度から丁寧に描いたものと、10点以上の土器を1枚の紙のなかに詰め込んだものがあり、両者で描かれる土器は重複する場合が多い。前者には出土地や所蔵者、作画日などの情報がしばしば書き込まれているのに対して、後者に



晩年の佐藤部を描いた油絵（個人蔵）



「好古館図説」（弘前大学蔵）

はそうした情報はない。後者は「目次」ないし「索引」に相当する可能性が高い。スケッチの大部分は、30cm×40cm前後の大きさに揃えられており、それらに混じって同じ大きさの「好古館図説 一稿」の題字のみ書かれた紙が1枚ある。絵は基本的に全て和紙に墨で実物大に描かれており、しばしば拓本を併用している。彩色されたものや原画と思われるラフなタッチの作品もあるが、数は少ない。

本学が寄贈を受けた段階でこれらのスケッチは、成田氏から収集品の管理を任されていた田中忠三郎氏により、既に種類毎に分類が行われていたため、もともと何らかの順番が存在していたとしてもそれを確認し、復元することはできなかった（註5）。土器や土偶のなかには角度を変えて複数枚に描き分けられたものがあり、それらには「其壺」「其式」「其参」などのように番号が付される場合があるが、式や参があるのに壺がないなど、必ずしも完全なセットが維持されているわけではない。

スケッチの大部分には遺物の各部の寸法が尺貫法で表記されているほか、出土地や所蔵者、作画日などの情報がしばしば書き込まれている。出土地は青森県津軽地方の遺跡が圧倒的に多く、他に南部・下北地方や北海道・秋田県・宮城県など県外が僅かながら認められる。海外の資料は南洋サイパン島出土の石器が唯一である。

454枚中、64枚が作画年を特定できる。それによれば、スケッチは、親戚から亀ヶ岡遺跡出土の土器片を贈られた翌年の明治13年（1880）に始まり、全体の約7割にあたる44枚が1880年代に描かれている。その後、1906年頃までは断続的ながらスケッチは継続されるが、1907年以降の作品は、1918年に描かれた西目屋村川原平出土の青龍刀形石器と、1927年に描かれたサイパン島出土の石器しか確認できない。部が熱心に考古遺物を写生した時期は、ちょうど彼が中央の学者と交流を深め、『東京人類学会報告』やそれに続く『東京人類学会雑誌』に報文を寄せていた時期と重なる。

考古遺物の所蔵者として名前が明記された事例75件のうち4件は寺社で、残る71件が個人である。黒石市山形袋にある村社では、ご神体として祀られている石棒が描かれている。寺院の所蔵品はいずれも寺宝となっているもので、碓ヶ関村古懸の国上寺の石剣、弘前市百沢の百澤寺の石櫃、法恩寺（報恩寺の誤記か）の石棒である。

部本人を除き所蔵者として個人名が挙げられている71名のうち、県外の人は、東京の神田孝平と若林勝邦、放浪の画家土岐蓑虫、秋田の土器・石器収集家として知られ、東京人類学会の会員でもあっ

た真崎勇助の4名だけで、それ以外の人は確認できるかぎり全て県内在住者である（註6）。地域的には、津軽地方の在住者が圧倒的に多く、津軽以外の県内在住者は、八戸の2名、川内と野辺地に各1名の計4名のみである。これら県内在住の考古遺物所蔵者は、蒨と同じような立場の考古学研究者、考古遺物収集家、その他に大別できよう。

考古学研究者としては、下澤保躬、角田猛彦、外崎覚、工藤祐龍の4名が挙げられる。下澤と角田の収集品の一部は後に佐藤蒨の手に渡っており、この2人は蒨と親交がより深かったと思われる。

弘前藩の微禄の家に生まれた下澤保躬（1838～96）は、平田門下で国学を学んだ国学者で、歌人としてその名が知られる一方、神田孝平と親交があり、考古学・人類学・民俗学にも造詣が深かった（福田2009）。

青森市細越小学校の初代校長を務めた角田猛彦（1852～1925）は、地元の大野村内にあった種元（現在の青森市細越遺跡）と内長沢（同内長沢遺跡）の発掘調査を手がけ、その成果を「陸奥國東津軽郡石器時代遺跡の遺跡探求報告」として『東京人類学会雑誌』6-64に発表している（青森市編集委員会2006）。

弘前藩の著名な儒学者工藤他山の子として生まれた外崎覚（初め覚蔵、1859～1932）は、漢学に造詣が深く、文部省維新資料取調員を経て宮内省に入り、『陵墓誌』の編纂に従事した。郷土史・考古学に関心があった外崎は、青森県内では佐藤蒨、安田勇吉（弘前の古物商）、廣澤安任（元斗南藩小参事・三沢で英国式牧場を経営）に次いで東京人類学会に入会している。

元弘前藩士で、田舎館村で小学校町や村長を歴任した枝川の工藤彦一郎（1851～1904）は、祐龍と号し、土器・石器・古銭の収集家として中央の学会にもその名が知られており、自らも東京人類学会の会員でもあった。工藤祐龍のコレクションの一部は現在、兵庫県西宮市にある辰馬考古資料館に所蔵されている（辰馬考古資料館1988）。

蒨は、考古遺物に関心があるが自ら研究を行うことはない、平野清助、熊沢慶次郎、山田亀治といった収集家の所蔵品も描いている。明治13年の補欠選挙で県会議員となった浪岡の平野清助（1830～1901）は、土岐蓑虫と親交があり、同家には蓑虫が考古遺物を描いた屏風絵や現在県重宝となっている亀ヶ岡遺跡出土の土器が所蔵されている。下山形（現在の黒石市山形）の旧家に生まれた熊沢慶次郎もまた、土岐蓑虫を自宅に滞在させており、蓑虫から考古遺物を描いた屏風絵を贈られている。三厩の旧本陣に生まれ、三厩の郵便局長を務めた山田亀治（1844～1923）は、土器・石器・古銭の収集家として知られていた。

さらに蒨のスケッチのなかには、近藤喜衛、浅田祇年、村本喜四郎といった、考古学と特に接点を見いだすことが難しい政治家や実業家の収蔵品も含まれている。八戸で小学校長や県会議長、八戸市長を務めた近藤喜衛（1871～1961）は、奥南新報を創刊し、晩年には根城南部氏の研究など文化人でもあった。青森市で菓子舗「甘精堂」を経営していた浅田祇年（1811～96）は、俳句宗匠として知られ、故実に明るかったとされる。同じく青森市で醸造業・製材業を営んでいた村本喜四郎（1844～1907）は商業知識普及のため私立青森商業補習夜学校の経営に協力するなど、社会事業に貢献した人物として知られる。

佐藤蒨が、考古学に関心を持ち始めると同時に1880年代に精力的に描いた考古遺物画は、写実性において1879年にE.S.モースによって著された『大森介墟古物編』の精巧な図面をも凌駕しており、拓本を併用している点を含めて、今日的にみても非常に高く評価できる。蒨が遺した多くの考古遺物画は、彼が、自分と同じ立場の研究者は勿論、津軽地方を中心に収集家の所蔵品から寺社の宝物となっている遺物まで、極めて熱心に県内出土の考古資料を探索し、それらに精通していたことを物語っている。得意とする写生の技術を十分に発揮できた考古遺物画は、蒨にとって考古学という学問の基盤であり、出発点であったといえるのではなかろうか。

【註】

1. 『月刊東奥』44に掲載された「至人 佐藤蓓翁の横顔」では17歳で平尾魯仙に入門したとするが、中村良之進の『平尾魯仙翁』では入門時の年齢が22歳となっている。
2. 「佐藤蓓画 青森県植物図譜展」(青森県立図書館1969年6月12日～17日)
「特別展佐藤蓓植物図譜」(青森県立郷土館1974年6月1日～7月14日)
「花の肖像画」(青森県立郷土館2007年9月22日～10月21日)
3. 昭和15年(1940)5月28日に佐藤蓓を訪ねた際、蓓自身が語ったことを記録した成田彦栄のメモ(弘前大学所蔵「先史考古覚書」巻1)による。なお、久原への売却については、これより前、1928年11月17日の東奥日報夕刊に連載された「蒐集漫談(11)」でも触れられており、記事は「雪櫃で5台分」の遺物に対して、北海道帝国大学の宮部金吾博士が3万円代(現在の価値にして約7500万円)の価値があると評価したと伝えている。
4. 上記、東奥日報の記事による。
5. スケッチの1枚に「以下収蔵主之記載ナキハ皆予カ収蔵ニカカル」と記載されていることから、本来はきちんと所蔵者別に順序だてられていた可能性が高い。
6. 神田孝平所蔵品は、その後、福沢諭吉を介して毎日新聞社の社長を務めた本山彦一(松蔭)の手に渡し、現在は関西大学博物館に本山コレクションとして収蔵されている(関西大学博物館1998)。

【引用・参考文献】

- 青森県立郷土館1984『蓑虫山人』青森県立郷土館特別展図録
- 青森県立郷土館2007『花の肖像画—植物を描いた青森の人々—』平成19年度青森県立郷土館企画展展示図録
- 青森県立郷土館2008『蓑虫山人と青森—放浪の画家が描いた明治の青森—』平成20年度青森県立郷土館企画展展示図録
- 青森市史編集委員会2006『青森市史』資料編1 考古
- 太田和夫1986「蓑虫山人の作画の様式と態度」『秋田県立博物館研究報告』11 93～100頁
- 角田猛彦「陸奥國東津軽郡石器時代遺跡の遺跡探求報告」『東京人類学会雑誌』6-64
- 関西大学博物館1998『博物館資料図録』
- 杉山莊平1967「蓑虫山人小伝」『物質文化』10 22～32頁
- 薄田斬雲1942「大我の満足に生きる佐藤蓓翁」『月刊東奥』44 35～37頁
- 須藤隆編2007『東日本縄文・弥生時代集落の発展と地域性』平成17～18年度科学研究費補助金基盤研究(C)(1)研究成果報告書
- 関根達人・上條信彦編2009『成田コレクション考古資料図録』弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター
- 辰馬考古資料館1988『考古資料図録』
- 東北大学文学部1982『考古学資料図録』1・2
- 中村良之進編1929『平尾魯仙翁』
- 成田彦栄1944「青森縣の至寶 故佐藤翁」『月刊東奥』6-8 30～32頁
- 東奥日報社1969『青森県人名大辞典』
- 福田友之2009「下澤保躬の考古学—『東京人類學會報告・雑誌』の記事を中心として—」『青森県考古学』7 79～94頁
- 若林勝邦1889「陸奥亀岡探求記」『東洋学芸雑誌』97 1～4頁

2. 遺物解説

(1) 土偶・土製品

本図録に掲載した120枚の考古画譜には、土偶63点と土製品16点の図がある。

土偶は、縄文中期末・後期初頭のもの2点（4・5）、後期前葉十腰内Ⅰ式に伴うもの1点（22b）を除き、残りは全て晩期のものである（註1）。晩期の土偶では、前半のものは比較的少なく、後半の資料が多い。出土地が判明する土偶は26点ある。遺跡別では、つがる市亀ヶ岡遺跡が15点で最も多く、弘前市十腰内（1）遺跡が6点でこれに次ぎ、青森市三内丸山遺跡、弘前市独孤七面山遺跡、五所川原市高野地区、鱒ヶ沢町建石地区、宮城県内のものが各1点ある。

【亀ヶ岡遺跡出土の土偶】（3・13・14a・15a・18・20a・21a・22c・23f・25a・26・27・30・35・41a）

後期末・晩期初頭（15a）や晩期前葉（30）のものは少なく、晩期中葉のもの（3・13・14a・18・20a・21a・22c・23f・27）が最も多く、後葉～末葉のもの（25a・26・35・41a）がこれに次ぐ。

重要文化財に指定されている3の大型遮光器土偶（東京国立博物館蔵）は、佐藤葦の描いた図（「瓦偶人之図」）が『東京人類学会報告』3巻21号に掲載され、翌号で淡厓こと神田孝平が解説を加えた（淡厓1887）。掲載された石版画は、実物とは異なり左右が反転してしまっているが、石版画の原画の可能性が高い3は、実物通りである。なお、3の所蔵者としてスケッチに記されている「加藤氏」とは、東京国立博物館が所蔵する前の持ち主である旧館岡村の越後谷氏の屋号である「カド（ノ家）」のことと思われる（つがる市教育委員会佐野忠史氏のご教示による）。

13と21aは、明治22年（1889）7月に若林勝邦が亀山地区で行った発掘調査の出土品であり、現在は東京大学総合研究博物館に所蔵されている（若林1889、磯前順一・赤沢威1996）。

現在東北大学の久原コレクション（東北大学文学部1982）にある土偶（14a・18・20a・22c・23f・25a・35）は、いずれも佐藤葦の旧蔵品であり、スケッチの註記から、それ以前には14aは館岡村（現つがる市）の野呂（忠吉）氏、18は高杉村（現弘前市）の山谷（藤四郎）氏が所蔵していたことが判明する。18の土偶頭部は、土岐蓑虫も「山人写画（絵日記）」では中高杉村山谷藤四郎の所蔵品として、「陸奥全国神代石古陶之図」では佐藤葦の所蔵品として描いている（藤沼・深見・工藤2008、青森県立郷土館2008）。蓑虫の「山人写画（絵日記）」の青森編は明治15年から18年頃に描かれたとみられる。一方、「陸奥全国神代石古陶之図」は、それを所蔵する浪岡の平野家や阿部家に蓑虫が立ち寄った明治20年前後に製作された可能性が高い（青森県立郷土館太田原慶子氏のご教示による）。葦が18の土偶を描いたのは明治15年4月21日であり、それから明治20年頃までの間に葦はこの土偶を手に入れたと考えられよう。なお、22cの土偶も蓑虫の「陸奥全国神代石古陶之図」に佐藤葦の所蔵品として描かれている。

辰馬考古資料館に所蔵されている15aと41aは、枝川村（現田舎館村）の工藤祐龍の旧蔵品である（辰馬考古資料館1988）。旧重要美術品の41aは現在完全な形に復元されているが、41aのスケッチから右脚と左側の頭部突起を欠損していることが判る。

【十腰内（1）遺跡出土の土偶】（1・6・9c・31・32・38）

6点全て晩期に属する。

1の土偶は、スケッチにある註記から、中津軽郡裾野村大字十腰内字猿沢（現在の弘前市十腰内（1）遺跡）出土品であり、明治34年（1901）10月19日に描かれたことが判る。この土偶は、昭和41年（1966）に東京の古美術商壺中居を介して東京国立博物館に売却され、現在は同館に亀ヶ岡遺跡の出土品として所蔵されている（東京国立博物館1996）。出土地の訂正が必要であろう。

【三内丸山遺跡の土偶】(4)

青森市の今泉清氏の所蔵品と記された4の土偶は、後頭部に突起を有する十字形土偶で、中期末から後期初頭に位置づけられる。右腕の付け根には腕を縦方向に貫く孔らしきものが描かれている。

【独狐七面山遺跡出土の土偶】(5)

独狐村（現弘前市独狐）山畑より出土し、高杉村の小枝氏の所蔵品として描かれた5の土偶は、目と口を窪みで、乳房と腹部を膨らみで表した十字形土偶で、下腹部には沈線により股部らしきものが表現されている。

【五所川原市高野地区出土の土偶】(7a)

久原房之助が佐藤部から購入した土偶で、現在は東北大学に所蔵されている。頭部・左腕・左脚を欠損する。晩期初頭の中実土偶で、背中と臀部に入組文を施す。

【鰯ヶ沢町建石地区出土の土偶】(2)

晩期中葉、大洞C2式後半期に位置づけられる土偶で、頭部の突起部分と腰部に渦文を施す。正面には垂れ下がった乳房の下に逆三角形の表現がみられるが、背中は無文である。

【宮城県内出土の土偶】(12)

晩期中葉、大洞C1式に伴うと考えられる12の遮光器土偶は、土岐蓑虫の所蔵品である。この土偶は、蓑虫本人も「蓑虫山人絵日記」（名古屋市東区長母寺蔵）で描いており、それには、「陸前国本吉郡気仙掘出ス所ノ土偶今蓑蟲ノ所蔵品ナリ」という文言とともに、「理科大学八木樊三郎」による土偶の「遮光器」や性別についての解説文が付されている（註2）。八木樊三郎（1866～1942）は、明治24年（1891）東京帝国大学理科大学人類学教室の標本取扱の傭いを経て、98年に正規の雇員となり、1902年に台湾総督府嘱託として理科大学から転出していることから、八木が解説文を書いたのは、1891年～1902年の間と推測できる。八木が所属していた人類学教室の教授である坪井正五郎（1863～1913）が『東京人類学会雑誌』6-62に「雪中遮光器」を発表したのは1891年であり、八木は坪井の説に従い、蓑虫の絵に「遮光器」の説明を記したといえる。

明治10年（1877）、蓑虫は、宮城県本吉郡大谷村で個人が所蔵していたこの土偶を見てあまりの見事さに請いて譲りうけ、そのことが考古遺物に興味を持つきっかけになったという（青森県立郷土館1984）。蓑虫は本吉郡大谷村の岩村章九郎と親交があり、「絵日記」でも岩村家の「金華園落成」を描いていることから、土偶が本吉町内の出土品であり、岩村家の所蔵品であった可能性が指摘されている（気仙沼市史編さん委員会1988）。

【出土地不明の土偶】

出土地が特定できない土偶のなかで、「館岡村野呂忠吉之蔵」と記されている28a・28bは、断定はできないが、館岡村にある亀ヶ岡遺跡から出土した可能性が高い。このうち28aの結髪形土偶は、頭部に刺突列を施し、顔はやや上を向く。体部は逆三角形に近く、腕は極度に矮小化している。正面には正中線が表され、肩と乳房を繋いだ隆帯に沿って沈線が施される。左右の脇腹から乳房の方向にも3条の平行沈線が延びている。この土偶は、その後、神田孝平、本山彦一を経て、現在は関西大学に所蔵されている（関西大学博物館1998）。なお、この土偶は、「陸奥全国神代石古陶之図」で「亀ヶ岡（瓶ヶ岡）所獲蓑虫山人（蔵）」と記した土偶に酷似しており、蓑虫が亀ヶ岡遺跡で発掘したものである可能性がある。

34aは、遮光器土偶のなかでは最も後出のタイプに分類され、大洞C2式に伴うと考えられる。この土偶は現在京都国立博物館の所蔵品となっている。

【土製仮面】

亀ヶ岡遺跡出土品（22a）と出土地不明のもの（49b）がある。22aは若林勝邦が東京人類学雑誌で紹介した資料で、神田孝平、本山彦一を経て、現在は関西大学に所蔵されている（関西大学博物館前掲）。49bは農林業の専門家で、古河鉦山を経てマレーシアでゴム園を経営した鈴木審三の旧蔵品で、現在

は東北大学に所蔵されている（東北大学文学部前掲）。いずれも大洞C2式～A式に伴うと考えられよう（藤沼邦彦・佐布環貴・萩坂華恵2002）。

【鐸形土製品】

青森市浪岡地区から出土したもの（46a・46b）と出土地不明のもの（47b）がある。47bは佐藤部、成田彦栄を経て、現在は弘前大学が所蔵する（関根・上條編2009）。いずれも十腰内Ⅰ式に伴う。

【その他の土製品】

ミニチュア土器（16b・28d・28e）、スタンプ型土製品（17c）、土版（45c・50）、三角柱土製品（47a）、三角形土製品（48a）、耳飾（48b）がある。

16bのミニチュア土器は外崎覚蔵の旧蔵品で、弘前市相馬湯口地区の出土品である。同じ二ノ下り山から出土する遺物からみて、16bも晩期前半頃と考えられる。「館岡村野呂忠吉之蔵」と記されている28d・28eは晩期のものと考えられ、館岡村にある亀ヶ岡遺跡から出土した可能性が高い。

17cのスタンプ型土製品は、後期中葉～後葉頃のものであろう。

【註】

1. 晩期の土偶には、贋作ないし模倣品の可能性のあるもの（31～33・37・39・40・44a）も含まれているが、現物が所在不明のため真贋を確認できていない。
2. 八木が12の土偶を描いた蓑虫の絵に記した解説文は次のとおり。

「此図ハ身軀ノ有様ヲ推シ得ル科ニシテ衣服ヲ着ケタル工明ニ知ラルルナリ眼部ノ大ナルハ遮光器トテ氷雪ノ甚シキ地方ニ住スル人民が光線ノ反射ニ因リテ眼ヲ患ンコトヲ恐レ皮又ハ木ニテ覆ヲ造ルヲ目鏡ノ如ク掛ル風アル其物ナラントノ説ナリ胸部ノ左右見ユルハ乳房ノ凸起セルモノナレバ或ハ婦人ナラン」

【引用文献】

青森県立郷土館1984『蓑虫山人』青森県立郷土館特別展図録

青森県立郷土館2008『蓑虫山人と青森—放浪の画家が描いた明治の青森—』平成20年度青森県立郷土館企画展展示図録

磯前順一・赤沢威1996『東京大学総合研究博物館所蔵縄文時代土偶・その他土製品カタログ増訂版』言叢社

江坂輝彌1960『土偶』校倉書房

江坂輝彌1990『日本の土偶』六興出版

関西大学博物館1998『博物館資料図録』

気仙沼市史編さん委員会1988『気仙沼市史』Ⅱ（先史・古代・中世編）

サントリー美術館1969『土偶と土面』1969春の特別展図録

清水潤三1959『亀ヶ岡遺跡』三田史学会 有隣堂出版

鈴木克彦編1978『青森県の土偶』故音喜多富寿先生追悼記念出版会

関根達人・上條信彦編2009『成田コレクション考古資料図録』弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター

辰馬考古資料館1988『考古資料図録』

淡厓1887「瓶ヶ岡土偶図解、前号石版図の解」『東京人類学会報告』3-22 78・79頁

東京国立博物館1996『東京国立博物館図版目録（縄文遺物編：土偶・土製品）』中央公論美術出版

東北大学文学部1982『考古学資料図録』1・2

東北歴史資料館1996『東北地方の土偶』

『土偶とその情報』研究会1996『東北・北海道の土偶Ⅱ—亀ヶ岡文化の土偶—』土偶シンポジウム5

土偶研究会2004～2009『土偶研究会発表資料』1～6

藤沼邦彦1997『歴史発掘3 縄文の土偶』講談社

藤沼邦彦・佐布環貴・萩坂華恵2002「青森県における縄文時代の土製仮面について」『青森県史研究』
6 108～139頁 青森県

藤沼邦彦・深見嶺・工藤清泰2008「蜚虫山人の「陸奥全国神代石古陶之図」と青森新聞の「第二回弘
前博覧会縦覧の記」について」『亀ヶ岡文化雑考集』79～104頁 弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研
究センター

若林勝邦1889「陸奥亀岡探求記」『東洋学芸雑誌』97 1～4頁

■ (2) 前期・中期の縄文土器

佐藤薮が描いた縄文土器で最も型式的に古いのは、網目状撚糸文が施された前期の円筒下層b式(52a)の体部破片である。中期以前の土器を描いたものは、後晩期の土器を描いたものに比べ、極端に少ない。これは薮の関心が主として後晩期の遺物にあったことの現れであろう。

中期の土器は、51を除き全て破片を描いており、拓本を併用したものが多い。円筒上層式はa式からe式まで各時期のものが認められる。出土地が判るものには、八戸市西長根遺跡(51)、青森市三内丸山遺跡(55)、弘前市独狐七面山遺跡(62a・b・c)がある。63aと63dは榎林式である。

■ (3) 後期の縄文土器

今回掲載した120枚の画譜の中で描かれている土器のうち縄文後期に属するものは、60点を数える。その中で型式が特定できるものは、十腰内Ⅰ式のものが15点、十腰内Ⅱ式が1点、十腰内Ⅲ式が6点、十腰内Ⅳ式が7点、十腰内Ⅴ式が26点である。佐藤薮によって描かれた後期の土器は、出土地が分かっているものに限れば、全て青森県内の出土品である。その中でも、弘前市十腰内(2)遺跡(註1)出土のものが23点、青森市細越外長沢地区出土のものが4点と、津軽地方から出土したものが多い。描かれている土器の時期は十腰内Ⅰ式と十腰内Ⅴ式に比定されるものが多く、中間に位置する時期のものは少ない。

十腰内Ⅰ式に比定される土器は15点で、うち13点(24Ab・77a・77b・78b・79b・80a・80b・81a・81b・82・84・85・86a)は壺形の土器であり、装飾性に富む優品も含まれている。出土地が判明したものには、青森市源常平遺跡・細越外長沢地区・野辺地町大平下遺跡からの出土品がある。十腰内Ⅰ式の土器は時期幅があり、古い時期のもの(77a)から十腰内Ⅱ式直前と思われるもの(86)までが含まれる。57dは後期初頭の甕棺の破片である。この土器は隆帯によって円形の文様と横位区画文が施されており、このような特徴を持つ土器は青森市蜚沢遺跡などに類例が見られる(青森市蜚沢遺跡発掘調査団1979)。十腰内Ⅰ式の壺形の注口土器(83)は出土例の少ない珍品である。体部の器形や文様から十腰内Ⅰ式の新しい部分に位置づけられ、弘前市十腰内(2)遺跡に似た特徴のものと見られる(今井・磯崎1968)。壺形の体部に注口部のつくものは既に大木8b式期に出現していることが知られる。

十腰内Ⅱ式に比定されるものは、87eの一点のみで出土地は不明である。深鉢の口縁部で、大振りな突起と沈線に沿って走る列点が特徴である。五戸町次郎左衛門長根遺跡ではこれと似た特徴を持つ土器が出土している(三浦・鈴木1984)。

十腰内Ⅲ式の土器(24Bb・88・89a・90・91・93)で、出土地の判明しているものは、90のつがる市亀ヶ岡遺跡のものと93の黒石市下山形地区のものがある(註2)。89aは後期中葉以降に多く見られる頸部が上に長く立ちあがる壺で、さらにこれは頸部が2段に括れている。93は肩の張る注口土器で頸部が括れる。口縁部と頸部には刻み目が施され、体部には磨消技法による連結木葉状文が施され、注口部の下部には大きな突起が張り付けられる。

十腰内Ⅳ式の土器（64c・64j・65a・66f・94a・94b・95）は、66fのみ弘前市十腰内（2）遺跡と出土地が判明している。94a・94b・95の注口土器には正面を意識した突起が施されるようになり、突起を基点に文様が展開していく。

十腰内Ⅴ式の土器（64a・64b・64d・64e・64f・64g・64h・64i・65b・65d・65e・65f・66c・66d・66e・66h・69b・69d・71a・71b・96・97・98a・98b・99・100）は後期の土器の中で一番数が多く優品も多い。優品は出土場所がすべて弘前市十腰内（2）遺跡であり、東北大学文学部の所蔵である。十腰内（2）遺跡以外で出土地が判明しているものには、黒石市袋地区から出土した香炉形土器（99）がある。この時期の土器には各部に小突起が施され、より装飾的な土器がつくられるようになる。十腰内（2）遺跡から出土した環状の注口土器（71a）は十腰内Ⅴ式に位置づけられる。この土器に類する環状の注口土器は、中期の太田8b式期に出現し、北東北においては後期中葉から後葉に類例が比較的多く、晩期にも希に知られる（註3）。

【註】

1. 東北大学文学部『考古学資料図録』において、「十面沢」と記載されているものは、現在の弘前市十腰内（2）遺跡を指すと考えられる。
2. 十腰内Ⅲ式の注口土器（93）は、辰馬考古資料館所蔵品で、同館の『考古資料図録』によると出土地は亀ヶ岡とされてきた。佐藤蒨が描いたこの土器の絵には出土地の記載はないが、所蔵者は「枝川村工藤氏」と書かれている。枝川村の工藤氏とは現在の田舎館村の初代村長で人類学会の会員であった工藤彦一郎（祐龍）のことであると考えられる。一方で蓑虫山人も『陸奥全国神代石并古陶之図』で「枝川村工藤彦一郎」として同一の土器を描いている。そして、蓑虫の絵には所蔵者と並んで「南津軽郡下山形村」と出土地が記されており、このことから、93の注口土器の出土地は亀ヶ岡遺跡ではなく南津軽郡下山形村であることが判明した。
3. 後期中葉に位置づけられる環状の注口土器は、福島県郡山市町B遺跡（郡山市教育委員会2005）や北海道恵庭市ユカンボシE8遺跡（恵庭市教育委員会1992）、小樽市忍路土場遺跡（北海道埋蔵文化財センター1989）などが知られる。十腰内Ⅴ式の例としては、重要文化財に指定されている秋田県潟上市狐森遺跡出土の人面付注口土器のほか、同北秋田市高森岱遺跡例、亀ヶ岡遺跡例（致道博物館蔵）がある。晩期の環状注口土器は、風韻堂コレクションにある青森市宮田遺跡例が挙げられる。

【引用・参考文献】

- 青森県立郷土館1999『至高の縄文祭祀芸術―注口土器と土偶―』
- 青森市蜷沢遺跡発掘調査団1979『蜷沢遺跡』
- 今井富士雄・磯崎正彦1968「十腰内遺跡」『岩木山』第10節316頁～388頁
- 恵庭市教育委員会1992『ユカンボシE3遺跡A地点・ユカンボシE8遺跡B地点』
- 青森県立郷土館2008『蓑虫山人と青森―放浪の画家が描いた明治の青森―』平成20年度青森県立郷土館企画展展示図録
- 葛西勲2002『再葬土器棺墓の研究』
- 郡山市教育委員会2005『阿武隈川築堤関連 町B遺跡』
- 鈴木克彦2001『北日本の縄文後期土器編年の研究』雄山閣
- 鈴木克彦2007『注口土器の集成研究』雄山閣
- 辰馬考古資料館1988『考古資料図録』
- 東北大学文学部1982『考古学資料図録』1・2
- 芹沢長介ほか1981『縄文土器大成』3後期、講談社
- 北海道埋蔵文化財センター1989『忍路土場遺跡・忍路5遺跡』北埋調報53
- 三浦栄一郎・鈴木克彦1984「五戸町次郎左衛門長根の十腰内Ⅱ式土器」『青森県考古学』1頁～22頁

表1 遺物リスト1

図 番号	種類	時期	型式	出土場所	遺跡名	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日	備考
						高	幅 (口径)	厚 (最大径)			
1	土偶	縄文晩期	大洞C2式 ～A式	中津軽郡裾 野村大字十 腰内字猿沢	弘前市十腰 内(1)遺跡	32.7	16.8	5.8		1901.10.19	其壺～参赤彩 東京国 立博物館蔵(同館図版目 録縄文遺物編土偶・土 製品NO22)正面・背面・ 左側面・左側面の下書き
2	土偶	縄文晩期 中葉		西津軽郡鳴 沢村大字建 石	(鯨ヶ沢町 大字建石地 区)	25.4	15.4	6			其壺～参の三枚正面・ 背面・左側面
3	土偶	縄文晩期	大洞C1式	西津軽郡 瓶ヶ岡ノ瓶 山	亀ヶ岡遺跡	46.6	24.8	10.6	館岡村 加 藤氏		1887.4出土東京国立博 物館所蔵重要文化財正 面・背面・左側面
4	土偶	縄文中期 末～後期 初頭		三内	青森市三内 丸山遺跡	6	残4.1	2.3	青森 今泉 清氏		正面・背面・右側面
5	土偶	縄文中期	円筒上層 d・e式	獨孤山畑	弘前市独狐 七面山遺跡	残11.9	残7.4	3.2	高杉村 小 枝氏		正面・背面・左右側面・ 上面?・下面
6	土偶	縄文晩期	大洞C1式	中津軽郡裾 野村大字十 腰内字猿沢	弘前市十腰 内(1)遺跡	残28.1	15.6	7.7			正面・右側面
7a	土偶	縄文晩期	大洞B式	七和村大字 高野字伏館	(五所川原市 高野地区)	残10.0	残6.9	2.4	久原房之助 (佐藤 薮旧 蔵)		東北大学文学部蔵『考 古学資料図録』J448 (K449) 正面 (P8)・背 面・右側面
7b	壺	縄文晩期		ネムロ	(北海道根 室市)	残11.7	残7.6	10.4			
8a	壺	縄文晩期	大洞C2式	七和村大字 高野字伏館	(五所川原市 高野地区)	10	4.8	11.8			
9a	土器	縄文晩期	大洞C1式			11.5	6	6.7			
9b	土製 品	縄文晩期				4	5.8	1.2			上面・側面
9c	土偶	縄文晩期	大洞BC式		(弘前市十 腰内(1)遺 跡)	14.7	7.9	3.1	久原房之助 (佐藤 薮旧 蔵)		東北大学文学部蔵『考 古学資料図録』J742 (K438) 正面・背面・左 側面
10a	石皿			駒籠字月見 野	(青森市駒 込字月見野 地区)	6					
10b	土偶	縄文晩期	大洞BC式 ～C1式	駒籠字月見 野	(青森市駒 込字月見野 地区)	残3.1	残5.1	残2.7	佐藤 薮旧蔵		弘前大学蔵(成田コレ クション)頭部正面・裏 面・側面
10c	土偶	縄文晩期	大洞BC式	駒籠字月見 野	(青森市駒 込字月見野 地区)	残5.3	残5	残2			頭部正面・背面・左右側 面
11	土偶	縄文晩期	大洞BC式			残12.0	12	4.1			体部正面・左側面
12	土偶	縄文晩期	大洞C1式	宮城縣	(宮城県内)	残18.6	残17.9	残7.9	土岐氏		『蓑虫山人絵日記』(長 丹寺所蔵)に掲載され ており「陸前国本吉郡 気仙沼堀出ス所ノ土偶 今蓑虫ノ所蔵品ナリ」 と説明される 正面・背 面・左側面・下面
13	土偶	縄文晩期	大洞C2式		(つがる市 亀ヶ岡遺跡)	残11.8	残3.5	残5			東京大学総合研究博物 館蔵(標本番号251)
14a	土偶	縄文晩期	大洞C1式		(つがる市 亀ヶ岡遺跡)	残4.2	残6.9		館岡村 野 呂氏		東北大学文学部『考古 学資料図録』J760(K424) 頭部正面・背面(拓本)・ 斜面
14b	注口 土器	縄文晩期	大洞B式			4.2	5.8	7.6	館岡村 野 呂氏		側面・底面
14c	壺					4.5	2.2	3.4	館岡村 野 呂氏		
14d	浅鉢	縄文晩期				3	11.8	11.8	館岡村 野 呂氏		

- ・法量の欄の朱字で書かれた数値は、図から推定した大きさであり、計測値ではない。
- ・所蔵者(旧蔵者)の欄の朱字で書かれた人名は、薮のスケッチには註記されていないが、他の資料から判明した所蔵者(旧蔵者)である。

表2 遺物リスト2

図 番号	種類	時期	型式	出土場所	遺跡名	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日	備考
						高	幅 (口径)	厚 (最大径)			
15a	土偶	縄文後期 末～晩期 初頭		瓶ヶ岡	(つがる市 亀ヶ岡遺跡)	残13.3	残8.2		枝川工藤氏 (工藤彦一 郎・祐龍)		辰馬考古資料館蔵『考 古資料図録』19正面・背 面・左側面(図42に掲載)
15b	土偶	縄文晩期	大洞BC式 ～C1式			残11.3	残11.9	残5.9			正面・左側面
15c	土偶	縄文晩期	大洞A'式			残8.9	残7.8				正面・背面(拓本)
16a	石製 品	縄文晩期		相馬村大字 湯口字二ノ 下り山	弘前市相馬 湯口地区	3.9	4.2	2.9	外崎氏(覚 蔵)		上面・下面・側面
16b	ミニ チュア 土器	縄文晩期		相馬村大字 湯口字二ノ 下り山	弘前市相馬 湯口地区	1	3.5	1.4	外崎氏(覚 蔵)		上面・側面
16c	土偶	縄文晩期		相馬村大字 湯口字二ノ 下り山	弘前市相馬 湯口地区	残4.5	残4.4	残2.5	外崎氏(覚 蔵)		腕部正面・背面・左側面
16d	石製 品			相馬村大字 湯口字二ノ 下り山	弘前市相馬 湯口地区	2.2	3.1		外崎氏(覚 蔵)		上面・側面
17a	土偶	縄文晩期 中葉				8.4	5.5	2			正面・背面・左側面
17b	石鏃					2.3	5.8				表面・裏面
17c	スタ ンプ 型土 製品	縄文後期 後葉				8.6	4.6	4.3			正面・側面
18	土偶	縄文時代 晩期中葉		亀ヶ岡	つがる市 亀ヶ岡遺跡	残8.9	残9.4	残4.2	佐藤 薊(高 杉村山谷氏 旧蔵)	1882.04.21	「光沢あり」『蓑虫山人 写真』東北大学文学部 蔵『考古学資料図録』 J761(K416)正頭部面・ 背面・左側面
19a	注口 土器	縄文晩期	大洞B式			5.8	7	16.2			正面・底面・底面拓本
19b	土偶	縄文晩期	大洞C1式			残5.9	残8.4	残4.1			頭部正面・背面・左側 面・正面拓本・背面拓本
20a	土偶	縄文晩期 中葉			(つがる市 亀ヶ岡遺跡)	残6	残4.7	残4.7	久原房之助 (佐藤 薊旧 蔵)		東北大学文学部『考古 学資料図録』J762 (K432)「大サ如図原形 色ウス黒」頭部正面・背 面・左側面
20b	土偶	縄文晩期 中葉				残4.0	残6.9	残3.5			「原形色茶光沢アリ」頭 部正面・背面・左側面・ 上面
21a	土偶	縄文晩期	大洞C2式		(つがる市 亀ヶ岡遺跡)	残13.4	残7.3	残1.9			東京大学総合研究博物 館蔵(標本番号241)正 面・左側面
21b	土偶	縄文晩期				残6.6	残6.1	残2.9			頭部正面・右側面
21c	土偶	縄文晩期				残5.5	残5.4	残3.9			頭部正面・左側面
22a	土製 仮面	縄文晩期	大洞C2式		(つがる市 亀ヶ岡遺跡)	7.1	6.9		神田孝平		若林勝邦1891「貝塚土 偶に就行」『東京人類学 雑誌』6-61掲載 関西 大学蔵本山コレクショ ン正面・側面・裏面拓本
22b	土偶	縄文後期	十腰内1 式			残5.5	残3.8	残4.3			頭部正面・背面・左側面
22c	土偶	縄文晩期	大洞C2式		(つがる市 亀ヶ岡遺跡)	11.2	7.8		久原房之助 (佐藤 薊旧 蔵)		東北大学文学部蔵『考 古学資料図録』J764 (K419)背面・左側面
23a	土偶	縄文晩期	大洞A式 ～A'式			残4.6	残7.4	残6.2			頭部正面・背面・左側面
23b	土偶	縄文晩期 後半	大洞C1～ C2式			残8.0	残7.5	4			正面・背面・右側面・右 側面下書き
23c	土偶	縄文晩期	大洞C1式			残4.0	残5.7				正面・背面
23d	土偶	縄文晩期	大洞C2式			5.9	4.7	1.7			正面・背面・左側面
23e	土偶	縄文晩期	大洞A'式			残7.2	6.2	2.1			正面・背面・左側面

表3 遺物リスト3

図 番号	種類	時期	型式	出土場所	遺跡名	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日	備考
						高	幅 (口径)	厚 (最大径)			
23f	土偶	縄文晩期	大洞C2式		(つがる市 亀ヶ岡遺跡)	残6.4	6.2	1.2	久原房之助 (佐藤 蒔旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J764 (K422) 正面・背面・左側面
24Aa, Ba	土偶	縄文晩期	大洞C2式			残6.5	残8.3	4.2		1885.01.12	頭部正面・背面・右側面・正面拓本・背面拓本
24Ab	壺	縄文後期	十腰内1式	中野村	青森市浪岡崎(2)	残7.6	4.2	8.2		1885.01.12	
24Bb	深鉢突起部	縄文後期	十腰内3式			残4.8		残2			拓本正面・右側面
25a	土偶	縄文晩期	大洞A式 ～A'式	瓶ヶ岡	つがる市 亀ヶ岡遺跡	残5.9	残5.6	5	佐藤 蒔		『東京人類学会雑誌』138号掲載東北大学文学部蔵J763下 頭部正面・背面・左側面
25b	土偶	縄文晩期	大洞A式 ～A'式			残9.1	残8.2	3.6			正面・背面・右側面
26	土偶	縄文晩期	大洞A式 ～A'式	瓶ヶ岡	つがる市 亀ヶ岡遺跡	残7.8	残6.8	残6.8	枝川工藤氏 (工藤彦一郎・祐龍)		頭部正面・左側面・上面・下面
27	土偶	縄文晩期	大洞C2式	瓶ヶ岡	つがる市 亀ヶ岡遺跡	残9.8	残12.3	7.2	浪岡平野清助氏		頭部正面・背面・背面下書き・左側面
28a	土偶	縄文晩期	大洞A式 ～A'式			残11.7		残5.8	館岡村 野呂忠吉氏	1881.101	関西大学博物館蔵『博物館資料図録』P 25b 左側面
28b	土偶	縄文晩期	大洞A式 ～A'式			残5	残5.1		館岡村 野呂忠吉氏	1881.101	頭部正面・背面・左側面
28c	石皿					残18.3	残9.6		館岡村 野呂忠吉氏	1881.101	「矢の根石質硯ニ似タル石器石色黒シ」
28d	ミニチュア土器	縄文晩期				3	1.7	2.8	館岡村 野呂忠吉氏	1881.101	
28e	ミニチュア土器	縄文晩期				4.5	2.6	3.6	館岡村 野呂忠吉氏	1881.101	
29a	土偶	縄文晩期	大洞A式 ～A'式			残13.0	残10.1	残3.0			背面・右側面、正面(図42)
29b	土偶	縄文晩期	大洞C1式 ～C2式			残9.8	残8.1	残2.7			額欠けている頬の部分に穴あり頭部正面・背面・右側面
29c	土偶	縄文晩期	大洞C1式			残3.1	残3.0	残1.1			正面・左側面
30	土偶	縄文晩期	大洞BC式	瓶ヶ岡	つがる市 亀ヶ岡遺跡	残20.1	16.5	7	野呂武左衛門氏	1887.4	「図実大色薄黒シ」「此れ後ノ欠タル体其際二間斗リワキ方ヨリ掘出シタリシガ横様ノニタル物ニ付之ニ合セテ見タルニ是カ同体ナリト云」正面・背面(拓本)・左側面
31	土偶	縄文晩期	大洞BC式	中津軽郡裾野村大字十腰内字大平	弘前市十腰内(1)遺跡	17.5	11.7	4.4			正面・背面・左側面
32	土偶	縄文晩期	大洞C2式 ～A'式	中津軽郡裾野村	弘前市十腰内(1)遺跡?	12.3	7.9	3.8		1901.11.30	正面・背面・左側面
33	土偶	縄文晩期後葉				8	5.5	2			正面・背面・左側面
34a	土偶	縄文晩期	大洞C2式			残10.7	残12.6	残6.6			正面・背面・左側面両耳、後頭部(?)に穴あり京都国立博物館(台帳番号丁甲278-10)
34b	土偶	縄文晩期	大洞C2式			残11.6	残12.1				正面
35	土偶	縄文晩期	大洞A式 ～A'式		(つがる市 亀ヶ岡遺跡)	19.7	13.9	5.1	久原房之助 (佐藤 蒔旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J763上・J765正面・背面・左側面
36	土偶	縄文晩期	大洞C2式			残9.8	残9.2	残4.4	浪岡平野家		正面・背面・左側面
37	土偶	縄文晩期	大洞C2式			13.7	10.6	4.2			正面・背面・右側面

表4 遺物リスト4

図 番号	種類	時期	型式	出土場所	遺跡名	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日	備考
						高	幅 (口径)	厚 (最大径)			
38	土偶	縄文晩期	大洞A式 ～A'式	中津軽郡裾 野村大字十 腰内字猿沢	弘前市十腰 内(1)遺跡	残15.2	残8.9				出土地のほかに「西津 軽郡鳴沢村大字建石」 とも書いている正面
39	土偶	縄文晩期	大洞C2式			16.4	11.2	3.8			正面・背面・右側面
40	土偶	縄文晩期	大洞C2式			15.7	9.9	3.8			「●ハ鼻穴ナリ」正面・ 背面・左側面
41a	土偶	縄文晩期	大洞C2式 ～A'式		(つがる市 亀ヶ岡遺跡)	16.7	11.8	4.6	工藤彦一郎		辰馬考古資料館蔵「考 古資料図録」(No20)旧 重要美術品正面・背面・ 左側面
41b	土偶	縄文晩期 後葉				残8.7	残4.3	残2.5			正面・背面・左側面
43	土偶	縄文晩期	大洞A式 ～A'式			残16.2	残12.2	残6.0			正面・背面(一部拓本)・ 左側面
44a	土偶	縄文晩期 中葉				27.8	14.2	4.1			正面・左側面
44b	土偶	縄文晩期				6.7	4.4	0.9	佐藤部旧蔵		弘前大学蔵(成田コレ クション)正面・背面
45a	土偶	縄文晩期	大洞A式 ～A'式			残6.5	残7.0	残4.2			「人形の破片色淡白光 (ツ)ヤアリ」正面・背 面・左側面
45b	土偶	縄文晩期	大洞A式 ～A'式			残5.6	残8.1	残4.3			「同物ナリ黒色ニテ光 沢アリ」正面・背面・左 側面
45c	土版										
46a	鐸形 土製 品	縄文後期	十腰内1式	浪岡村字館 山	青森市浪岡 地区	4.7	3.9	3.9		?.0901	正面
46b	鐸形 土製 品	縄文後期	十腰内1式	浪岡村字館 山	青森市浪岡 地区	5.8	4.4	2.6		?.0901	
47a	三角 柱土 製品	縄文後期	十腰内1式			5	8.2	2.8		1890.12.14	正面・裏面・下面・側面
47b	鐸形 土製 品	縄文後期	十腰内1式			7.1	5.1	3.1	佐藤部旧蔵		弘前大学蔵成田コレ クション(図録185)正面・ 背面・下面
48a	三角 形土 製品	縄文晩期				2.8	3.8				
48b	耳飾	縄文晩期				5.6	9.3	2.6			「正面朱ヲ以テヌル」正 面・下面
49a	土製 品					1.6	1.6				
49b	土製 仮面	縄文	大洞C2式 ～A'式			4.9			鈴木審蔵		東北大学文学部蔵「考 古学資料図録」J769 (K769)正面・背面・側面
50	土版	縄文				6.9	6.1	1.1	棟方(覚爾?) 氏		拓本

表5 遺物リスト5

図 番号	種類	時期	型式	出土場所	遺跡名	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日	備考
						高	幅 (口径)	厚 (最大径)			
51	深鉢	縄文中期	円筒上層 d・e式	三戸郡大館 村大字十日 市字登り坂	八戸市西長 根遺跡	残19.7			笠森清定氏	1893.04	久慈道開鑿之際ニ出土 一部拓本
52a	深鉢	縄文前期	円筒下層 b式								厚さ0.6cm拓本
52b	深鉢	縄文中期	円筒上層 a式								厚さ1.8cm
52c	深鉢	縄文中期	円筒上層 a式								厚さ1.2cm拓本
52d	瓦質 土器 風炉	15・16世 紀									
52e	深鉢	縄文中期	円筒上層 a式								厚さ1.2cm拓本
53a	深鉢	縄文中期	円筒上層 e式								厚さ0.7cm一部拓本
53b	深鉢	縄文中期	円筒上層 a式								厚さ0.8cm、「黄赤色」
54a	深鉢	縄文中期	円筒上層 e式								把手内面の図有り
54b	深鉢	縄文中期	円筒上層 c式								
54c	深鉢	縄文中期	円筒上層 d式								
54d	深鉢	縄文中期	円筒上層 c式								
55	深鉢	縄文中期	円筒上層 c式		青森市三内 丸山遺跡						厚さ2.1cm
56	深鉢	縄文中期	円筒上層 b式						高杉村加茂 神社の宝物	1880.05.29	「瓶器の破片耳の図なり 色淡白光潤なし」厚 さ1.2cm
57a	壺	縄文晩期	大洞C1式			8.2	2.1	9.4		1876.112	
57b	深鉢 破片	縄文中期	円筒上層 c式							1876.11	「淡白」厚さ0.8cm
57c	深鉢 破片	縄文中期	円筒上層 c式							1876.11	「浅黒、ボカシ」厚さ1.4cm
57d	縄文 土器 甕棺 破片	縄文後期	十腰内1式							1876.113	厚さ0.9cm
58a	深鉢 破片	縄文中期	円筒上層 d式								
58b	深鉢 破片	縄文中期	円筒上層 d式								
58c	深鉢 破片	縄文中期	円筒上層 e式								
58d	深鉢 破片	縄文後期 中葉	円筒上層 e式								
59a	深鉢 破片	縄文中期	円筒上層 d式								
59b	深鉢 破片	縄文中期	円筒上層 b式								
60a	深鉢 破片	縄文中期	円筒上層 e式					1.6cm			
60b	深鉢 破片	縄文中期	円筒上層 d式								厚さ1.4cm
61	深鉢 破片	縄文中期	円筒上層 e式								厚さ0.9cm一部拓本
62a	深鉢 破片	縄文中期	円筒上層 e式	独狐村山畑	弘前市独狐 七面山遺跡						
62b	深鉢 破片	縄文中期	円筒上層 e式	独狐村山畑	弘前市独狐 七面山遺跡						厚さ0.6cm
62c	深鉢 破片	縄文中期	円筒上層 e式	独狐村山畑	弘前市独狐 七面山遺跡						
63a	深鉢 破片	縄文中期	榎林式								厚さ0.8cm一部拓本

表6 遺物リスト6

図 番号	種類	時期	型式	出土場所	遺跡名	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日	備考
						高	幅 (口径)	厚 (最大径)			
63b	深鉢 破片	縄文中期	円筒上層 e式								厚さ1.2cm拓本
63c	深鉢 破片	縄文中期	円筒上層 d式								厚さ1.2cm拓本
63d	深鉢 破片	縄文中期	榎林式								厚さ0.9cm拓本
64a	壺	縄文後期	十腰内5式		弘前市十腰 内(2)遺跡	20.6	10	14.5			東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J088 (K228)
64b	壺	縄文後期	十腰内5式		弘前市十腰 内(2)遺跡	13.9	6.4	10	久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J089 (K234)
64c	壺	縄文後期	十腰内4式		弘前市十腰 内(2)遺跡	11.5	5.2	8.2	久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J087 (K236)
64d	壺	縄文後期	十腰内5式		弘前市十腰 内(2)遺跡	13	4.5	9.1	久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J093 (K235)
64e	鉢	縄文後期	十腰内5式		弘前市十腰 内(2)遺跡	5.8	10	10	久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J111 (K256)
64f	壺	縄文後期	十腰内5式			12.1	4.5	10			
64g	壺	縄文後期	十腰内5式			10.9	6.4	10			
64h	壺	縄文後期	十腰内5式		弘前市十腰 内(2)遺跡	9.1	3.9		久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J103 (K242)
64i	壺	縄文後期	十腰内5式		弘前市十腰 内(2)遺跡	3.8	2.1	7	久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J102 (K243) 高さ一寸二ト五厘口径九寸とあるが分の間違いと思われる
64j	台付 浅鉢	縄文後期	十腰内4式		弘前市十腰 内(2)遺跡	4.8	8.5	8.5	久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J099 (K250)
64k	壺	縄文後期 後半			弘前市十腰 内(2)遺跡	4.5	8.8	8.8	久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J109 (K247)
65a	壺	縄文後期	十腰内4式			20.6	5.2	13			
65b	壺か 注口	縄文後期	十腰内5式		弘前市十腰 内(2)遺跡	18.8	5.8	14.8	久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J098 (K221)
65c	壺	縄文後期 後半			弘前市十腰 内(2)遺跡	17.3	6.4	13.3	久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J094 (K225)
65d	注口	縄文後期	十腰内5式		弘前市十腰 内(2)遺跡	10	6.1	10.6	久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J095 (K225) 注口部欠損
65e	壺	縄文後期	十腰内5式			7	7.9	8.8	久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J110
65f	香炉 型	縄文後期	十腰内5式		弘前市十腰 内(2)遺跡	3.9	3.8	7.6	久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J104 (K244)
65g	壺	縄文晩期	大洞B式			13.332	4.5	10.3			赤彩
65h	壺	縄文晩期				9.3	4.5	8.8			「底ハケタリ」
65i	壺	縄文晩期				10.3	8.8	10.6			「無紋丸底」
65j	壺	縄文晩期				10.3	6.7	9.1			
65k	壺	縄文晩期				10.3	5.8	8.9			底径5.5cm
66a	壺	縄文晩期	大洞C1式			17.3	4.5	9.3			底径9.4cm
66b	壺	縄文晩期 中葉	大洞C2式		弘前市十腰 内(1)遺跡	14.7	10.6	15.5	久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J442 (K266) 赤彩
66c	壺	縄文後期	十腰内5式		弘前市十腰 内(2)遺跡	14.7	5.8	9.7	久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J090 (K238)

表7 遺物リスト7

図番号	種類	時期	型式	出土場所	遺跡名	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日	備考
						高	幅 (口径)	厚 (最大径)			
66d	壺	縄文後期	十腰内5式		弘前市十腰内(2)遺跡	16.7	6.7		久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J085(K229)
66e	香炉型	縄文後期	十腰内5式		弘前市十腰内(2)遺跡	7.9	3.6	7.6	久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J107(K252)
66f	壺	縄文後期	十腰内4式		弘前市十腰内(2)遺跡	14.2	6.4	10	久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J086(K233)
66g	壺	縄文中期	榎林式		弘前市十腰内(2)遺跡	9.3	6.3	8.4	久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J108(K245)
66h	注口	縄文後期	十腰内5式		弘前市十腰内(2)遺跡	17	7	15.2	久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J097(K222)注口部欠損
67a	壺	縄文晩期	大洞C1式		弘前市十腰内(1)遺跡	11.2	7.6	12.1	久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J430(K301)
67b	壺	縄文晩期	大洞C1式			13.6	7.6	15.2			赤彩
67c	壺	縄文晩期前葉				10	4.5	10.9			赤彩
67d	壺	縄文晩期中葉				12.1	8.2	12.4			
67e	壺	縄文晩期中葉				8.2	7	10			
67f	壺	縄文晩期中葉				11.8	7.9	12.4			
67g	壺	縄文晩期中葉				10	7.9	12.1			底径5.8cm
67h	壺	縄文晩期中葉				12.1	8.8	12.7			底径4.8cm
67i	壺	縄文晩期中葉				7	5.5	8.8			底径3cm「灰色」
67j	壺	縄文晩期中葉				10.3	6.7	11.5			底径5.2cm
67k	壺	縄文晩期中葉				13.4	4.8	8.9			底径5.2cm
68a	壺	縄文晩期中葉				9.4	6.1	8.2			黒光澤アリ底径4.8cm
68b	壺	縄文晩期中葉				7.6	6.1	8.8			「光澤アリ丸底」
68c	壺	縄文晩期中葉				10	6.1	9.1			底径4.8cm
68d	壺	縄文晩期中葉				8.2	5.8	8.2			底径4.5cm
68e	壺	縄文晩期中葉				10.9	7.3	11.5			底径6.7cm
68f	壺	縄文晩期中葉				7.6	5.5	8.8			底径4.5cm
68g	注口	縄文晩期後葉				12.1	7.9	12.1			底径4.8cm
68h	壺	縄文晩期中葉				17.9	6.1	9.4			底径4.5cm
68i	壺	縄文晩期中葉				14.8	10.6	15.5			底径4.8cm66bと同じか？赤彩
68j	壺	縄文晩期中葉				9.4	7.6	11.2			底径5.4cm赤彩
69a	注口	縄文晩期	大洞BC式		弘前市十腰内(1)遺跡	12.7	14.2	17.9	久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J460(K341)
69b	注口	縄文後期	十腰内5式	蓬田村大字広瀬	蓬田村滝沢遺跡	19.7	8.8	15.2	久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J080(K200)
69c	台付鉢	縄文晩期	大洞C2式			8.8	12.4				底径8.2cm

表8 遺物リスト8

図 番号	種類	時期	型式	出土場所	遺跡名	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日	備考
						高	幅 (口径)	厚 (最大径)			
69d	壺	縄文晩期	十腰内5式		弘前市十腰内(2)遺跡	残10.6		10	久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J091(K237)
69e	壺	縄文晩期	大洞C1式		つがる市 亀ヶ岡遺跡	残7.6		10.6	久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J510(K88)底径6.4cm
69f	壺	縄文晩期 中葉				残16.1		15.8			底径8.2cm
70a	注口	縄文晩期	大洞C1式	中津軽郡裾野村大字十腰内字猿澤秣場	弘前市十腰内(1)遺跡						
70b	壺	縄文晩期 中葉		西津軽郡鳴澤村大字建石秣場	鯉ヶ沢町建石地区						
70c	壺	縄文晩期 中葉		館岡村大字瓶ヶ岡字瓶コ山	つがる市 亀ヶ岡遺跡						
70d	壺	縄文晩期	大洞C1式	十面澤村字湯ヶ森	弘前市湯ヶ森(2)(5)遺跡		2.4				
70e	皿	縄文晩期 中葉		館岡村大字瓶ヶ岡字瓶コ山	つがる市 亀ヶ岡遺跡						
71a	異形 注口	縄文後期	十腰内5式		弘前市十腰内(2)遺跡	11.1			久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J106(K253)
71b	注口	縄文後期	十腰内5式		弘前市十腰内(2)遺跡	18.8	8.5	16.1	久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J096
71c	注口	縄文晩期	大洞C2式		つがる市 亀ヶ岡遺跡	7.9	7.9	9.6	久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J554(K150)
72a	注口	縄文晩期	大洞C1式		弘前市十腰内(1)遺跡	8.2	9.2	15.6	久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J461(K344)赤彩
72b	注口	縄文晩期	大洞C1式			6.7	11.8	15.8			弘前大学蔵『成田コレクション考古資料図録』(図録141)赤彩
72c	注口	縄文晩期	大洞C1式			7.9	11	19.9			弘前大学蔵『成田コレクション考古資料図録』(図録87)
72d	皿	縄文晩期	大洞C1式			3.6	16.1	16.1			赤彩
72e	皿	縄文晩期	大洞C1式			4.8	16.1	16.1			赤彩
72f	皿	縄文晩期	大洞C1式			5.2	20.3	20.3			
72g	浅鉢	縄文晩期	大洞C1式			5.5	17.3	17.3			
72h	浅鉢	縄文晩期	大洞C1式		弘前市十腰内(1)遺跡	6.4	18.5	24	久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J436(K327)
72i	浅鉢	縄文晩期	大洞C1式			6	15	15			
72j	浅鉢	縄文晩期	大洞C1式			4.5	10	10.8			
72k	浅鉢	縄文晩期 中葉				3.9	11.2	11.2			赤彩
72l	浅鉢	縄文晩期 中葉				3.3	7.9	9.2			
72m	鉢	縄文晩期	大洞BC式			5.2	8.5	9.3			
72n	浅鉢	縄文晩期	大洞C1式			3	13	13			赤彩
72o	壺	縄文晩期 前葉				3.9	6.7	7.2			赤彩
72p	壺	縄文晩期 前葉				4.2	9.1	6.8			
72q	壺	縄文晩期	大洞BC式		弘前市十腰内(1)遺跡	8.5	9.4	10.5	久原房之助 (佐藤蒨旧蔵)		東北大学文学部蔵『考古学資料図録』J465(K324)
72r	台付 鉢	縄文晩期	大洞C1式			7	9.7	11.7			

表9 遺物リスト9

図 番号	種類	時期	型式	出土場所	遺跡名	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日	備考
						高	幅 (口径)	厚 (最大径)			
72s	台付 皿	縄文晩期	大洞C1式			3.3	7.6	7.6			
73a	壺	縄文晩期	大洞C1式			15.1	7	7.6			
73b	台付 鉢	縄文晩期 中葉				9.1	7.6	8.5			
73c	浅鉢	縄文晩期	大洞B式			7.6	12.1	12.1			
73d	注口	縄文晩期 後葉	大洞A式			7.6	7	8.9			
73e	浅鉢	縄文晩期	大洞B式			4.5	8.5	8.8			
73f	台付 鉢	縄文晩期 後葉				10.6	15.2	17.9			
73g	壺	縄文晩期	大洞C1式			15.2	5.6	14.5			赤彩
73h	台付 鉢	縄文晩期	大洞C1式			9.1	10.6	12.8			胴部クロ色
73i	壺	縄文晩期				6.1	2.3	4.2			赤彩
73j	壺	縄文晩期	大洞BC式			15.1	8.2	13.9			
73k	土偶	縄文晩期 中葉				残12.1	残2.5				正面
73l	土偶	縄文晩期 中葉				残12.1	残3	残2			正面・左側面
74a	台付 鉢	縄文晩期 中葉				6.1	12.7	12.7			赤彩
74b	鉢	縄文晩期	大洞C2式			6.1	8.7	9.8			
74c	壺	縄文晩期	大洞C1式		弘前市十腰 内(1)遺跡	10.6	10	10.6	久原房之助 (佐藤薔旧 蔵)		東北大学文学部蔵『考 古学資料図録』J427 (K300)
74d	壺	縄文晩期	大洞C1式			12.6	6.4	7.3			
74e	片口 鉢	縄文晩期	大洞C1式			6.7	9.1	9.1			
74f	壺	縄文後期 中葉				7.6	6.4	7.6			「光沢」
74g	浅鉢	縄文晩期	大洞BC式		弘前市十腰 内(1)遺跡	4.5	15.2	12.1	久原房之助 (佐藤薔旧 蔵)		東北大学文学部蔵『考 古学資料図録』J474 (K326)
75a	台付 鉢	縄文晩期	大洞BC式			7.9	6.7	7.3			
75b	壺	縄文晩期	大洞C2式			8.4	7.8	11.9			
75c	鉢	縄文晩期	大洞BC式			9.5	8.2	9.2			
75d	壺	縄文晩期	大洞C1式			9.1	3.8	12.5			底部に2.4cmのくぼみ あり
76a	鹿角 製品					9.25	10	7			
76b	磨製 石斧					8.2	1.8	1.2			
76c	磨製 石斧					10.3	2.8	1.6			
76d	壺	縄文晩期	大洞C1式			12.8	5.8	12.8			
76e	香炉	縄文晩期	大洞C1式		(つがる市 亀ヶ岡遺跡)	12.5		10.5			東北大学文学部蔵『考 古学資料図録』J506
76f	岩版 or土 版	縄文時代 晩期				残7.3	残4.5	残1.5			
76g	注口 土器	縄文晩期	大洞C1式		(つがる市 亀ヶ岡遺跡)	6.8	9.3	12.5			東北大学文学部蔵『考 古学資料図録』J555 (K343)と同一個体
77a	壺	縄文後期	十腰内I式	浪岡町御廟 館	青森市源常 平遺跡						直径15.2cmの円形、大 二枚小七枚低一ツ、灰 ニ萌黄ヲ帯フ
77b	壺	縄文後期	十腰内I式			残22.1	残21.1			1880. 05.9	
78a	青龍 刀			是川村堀田	八戸市是川 堀田遺跡	残17	13.9	3.2			
78b	壺	縄文後期	十腰内I式			27.1	11.3	20.9	白井氏		
78c	石斧					39.1	6.7	3.3	近藤喜衛氏		近藤喜衛は初代八戸市 長

表10 遺物リスト10

図 番号	種類	時期	型式	出土場所	遺跡名	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日	備考
						高	幅 (口径)	厚 (最大径)			
78d	鞍					34.6	43.3				
78e	青龍 刀			中津軽郡東 目屋村大字 川原平	西目屋村川 原平遺跡	33.4	17.6		白出氏	1918.06.12	
78f	青龍 刀					残17.7	6.6				
79a	深鉢	縄文中期	円筒上層 a式	馬門	野辺地町大 平下遺跡	18.1		11.2			底径5.5cm
79b	壺	縄文後期	十腰内1式	馬門	野辺地町大 平下遺跡	15.6	4.5	12.2			
80a	壺	縄文後期	十腰内1式	細越村字竹 松沢	青森市細越 字外長沢	残15.0		10.7	佐藤 郁		弘前大学蔵『成田コレ クション考古資料図 録』(図録15) 遺物に外 長沢と注記あり
80b	壺	縄文後期	十腰内1式	細越村字竹 松沢	青森市細越 字外長沢	残14.7		10.3	佐藤 郁		弘前大学蔵成田コレク ション
81a	壺	縄文後期	十腰内1式	細越村字外 長沢	青森市細越 字外長沢	9.5		9.5			
81b	壺	縄文後期	十腰内1式	細越村字外 長沢	青森市細越 字外長沢	7.7	4.9	8.9	佐藤 郁		弘前大学蔵『成田コレ クション考古資料図 録』(図録2) 正面・拓本
82	壺	縄文後期	十腰内1式			残23.9	残8.3	23.7			
83	注口 土器	縄文後期	十腰内1式			残13.9		10.5			
84	壺	縄文後期	十腰内1式			残10.3	3.3	11.9		1884.10.04	厚さ0.5cm
85	壺	縄文後期	十腰内1式			12	7.5	9.1	東津軽郡油 川村中林氏		「黒斑アリ」
86a	壺	縄文後期	十腰内1式			残13.5		10.1			
86b	土器 台部	縄文後期									厚さ0.9cm
87a	石斧					11.6	2.3	1.6			表面・側面
87b	管玉					1.6	0.7				表面・上面
87c	玉					1.1	1.1				表面・側面
87d	玉					1.1	1				表面・側面
87e	深鉢	縄文後期	十腰内2式								外面・内面・上面
88	浅鉢	縄文後期	十腰内3式			3.4	7.9	7.9	瀧氏	1889.06.15	一部拓本
89a	壺	縄文後期	十腰内3式			15.2	6.6	11.5		1885.01.12	底径4.5cm一部拓本
89b	壺	縄文晩期	大洞C1～ C2式			9.1	5.7	8.5			底径4.8cm
90	注口	縄文後期	十腰内3式	亀ヶ岡壙	つがる市 亀ヶ岡遺跡	8.2	5.1	11.5	下澤氏	1881.05.19	
91	注口	縄文後期	十腰内3式			残9.5		13.5			
92	壺					12.6	4.1	10.6			
93	注口	縄文後期	十腰内3式		黒石市下山 形地区	24.5	6.4	24.5	枝川村工藤 氏	1883.11.02	辰馬考古資料館蔵考古 資料図録出土場所につ いては亀ヶ岡遺跡とさ れてきたが(辰馬考古 資料館、1988『考古資料 図録』) 養虫山人筆『陸 奥全国神代石并古陶之 図』から南津軽郡下山 形村からの出土品と判 明した
94a	注口	縄文後期	十腰内4式			残4.8		9			
94b	注口	縄文後期	十腰内4式			残8.1		12.7			
95	注口	縄文後期	十腰内4式			10.6	6.1	11.4			一部拓本
96	壺	縄文後期	十腰内5式			残7		8.4	高館大平氏		「質堅クシテ色黒シ」
97	注口	縄文後期	十腰内5式			残8		9.7	笹森氏	1885.012	「色淡白ニシテ少□光 澤アリ」
98a	注口 部?	縄文後期	十腰内5式								
98b	注口	縄文後期	十腰内5式			残15.6		11.7			

表11 遺物リスト11

図 番号	種類	時期	型式	出土場所	遺跡名	法量(cm)			所蔵者 (旧蔵者)	作画日	備考
						高	幅 (口径)	厚 (最大径)			
98c	香炉 形土 器	縄文後期	十腰内5式			残7.6		8.7			
99	香炉 形土 器	縄文後期	十腰内5式	山形村大字 袋畑	黒石市袋地 区	12.5		8.5	下山形村 熊沢氏		熊沢慶次郎
100	注口 土器	縄文後期	十腰内5式			6.9	5.7	8.9			

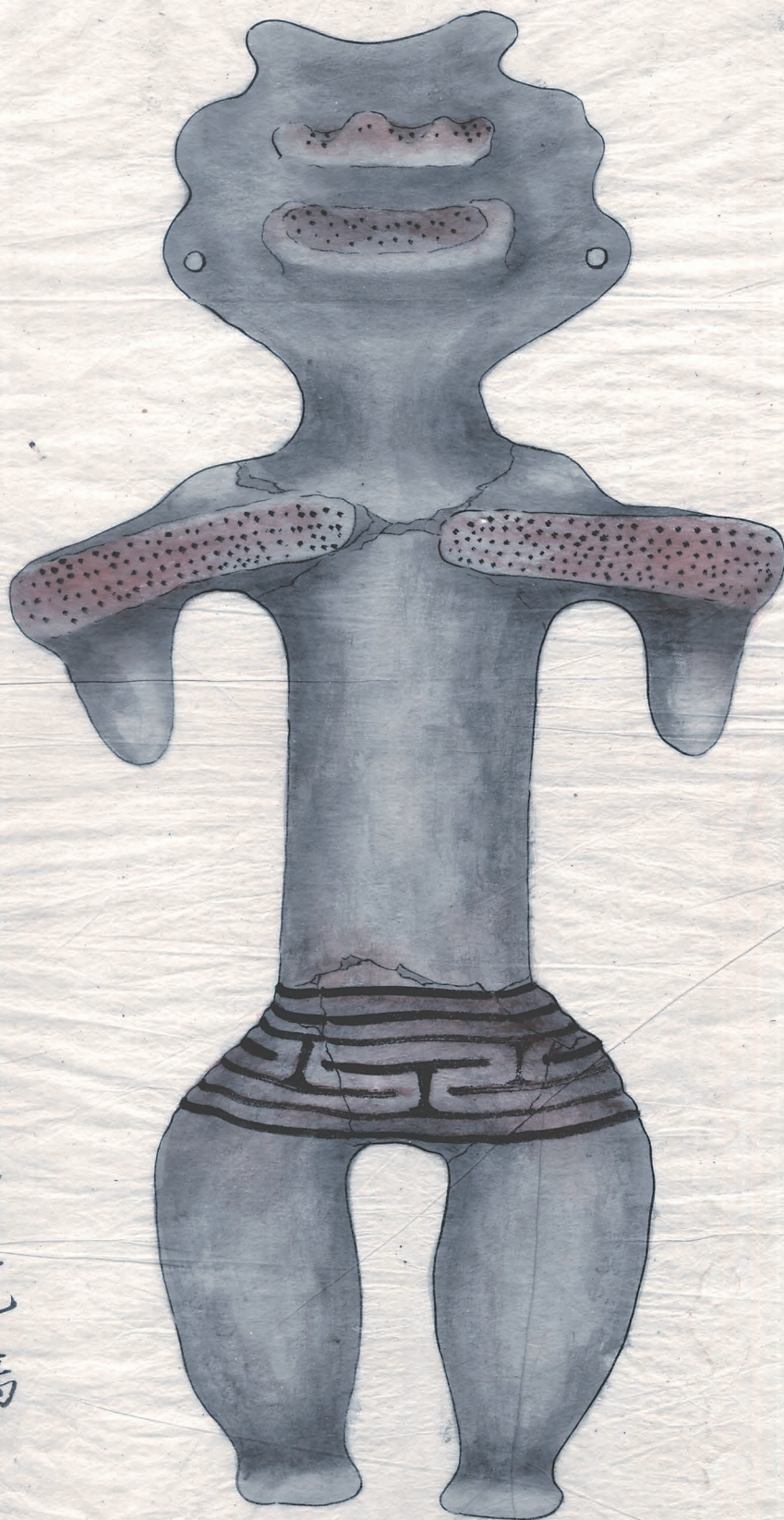


1A

中津輕郡裾野村大字十腰内字猿沃弓得掘

其貳

明治三十四年十月十九日寫



背面

1B

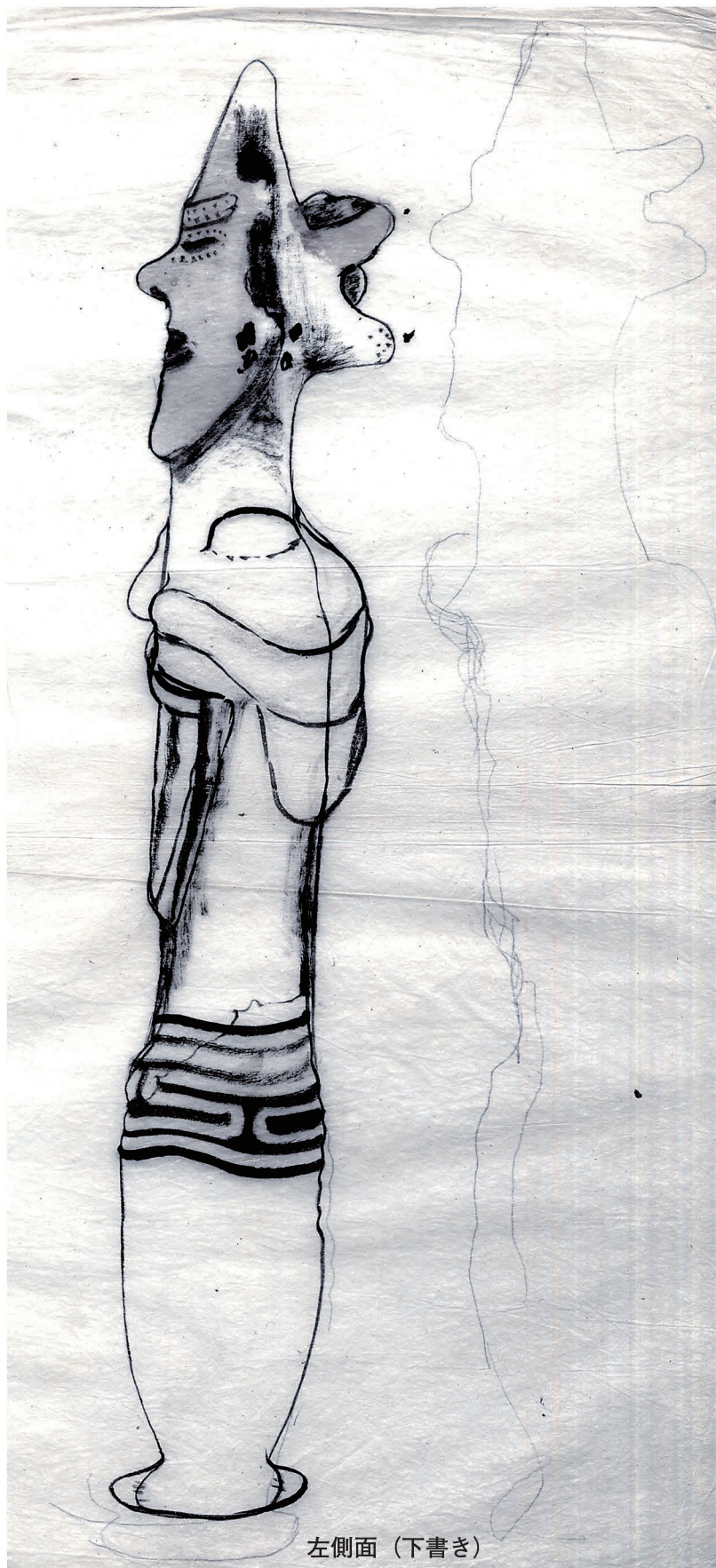


中津輕郡裾野村大字十腰内字猿沢
明治三十四年十月十九日
得振

其 參

左側面

1C



1D

西津輕郡鳴沢村大字建石

得掘

其虎



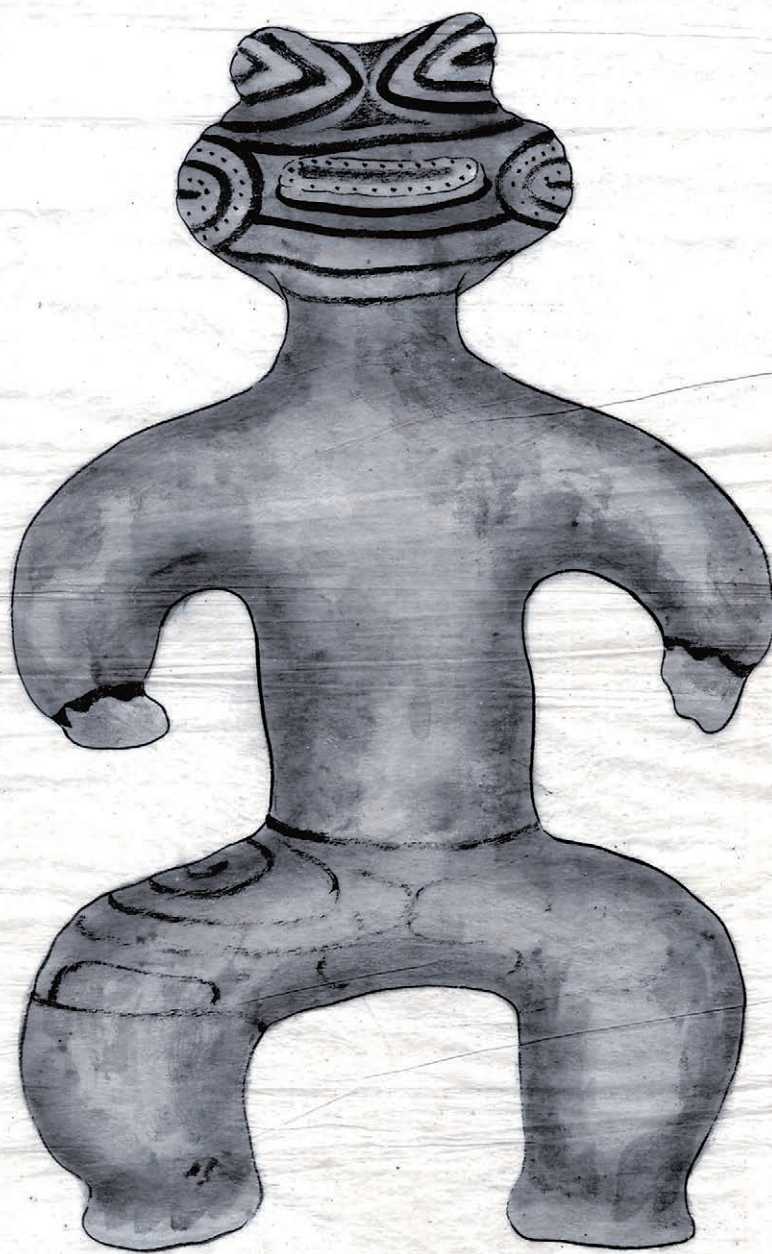
正面

2A

西澤輕郡鳴澤村大字建石

得掘

其貳



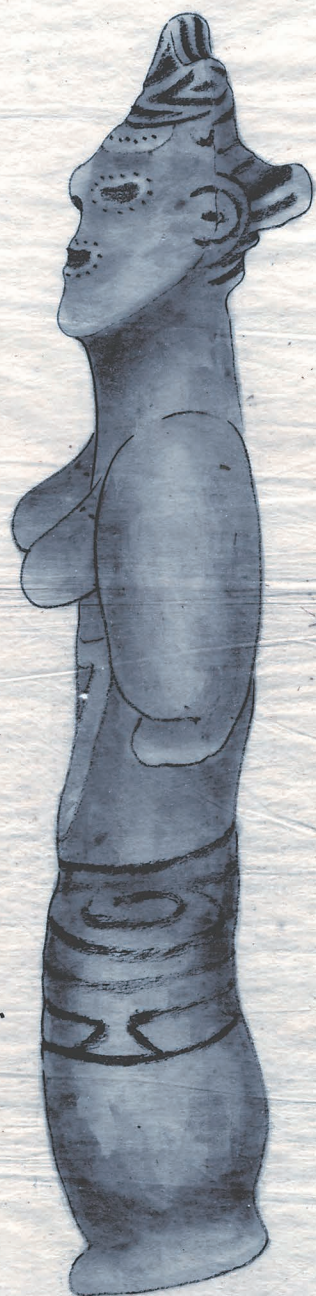
背面

2B

西津輕郡鳴澤村大字建石

得振

其參



左側面

大人形圖

但
正面
後面
片面

西津輕郡舘岡村

加藤氏之藏

堀江夕八時八

明治二十年四月十日

是ハ原形之圖ニ色薄黒
體内ウツロニテ社中ニ通
社ノ先及ヒ右目左ノシ子損
スタルモ片々ノ全キヲ持テ全体
ヲ見ルニ豆ル

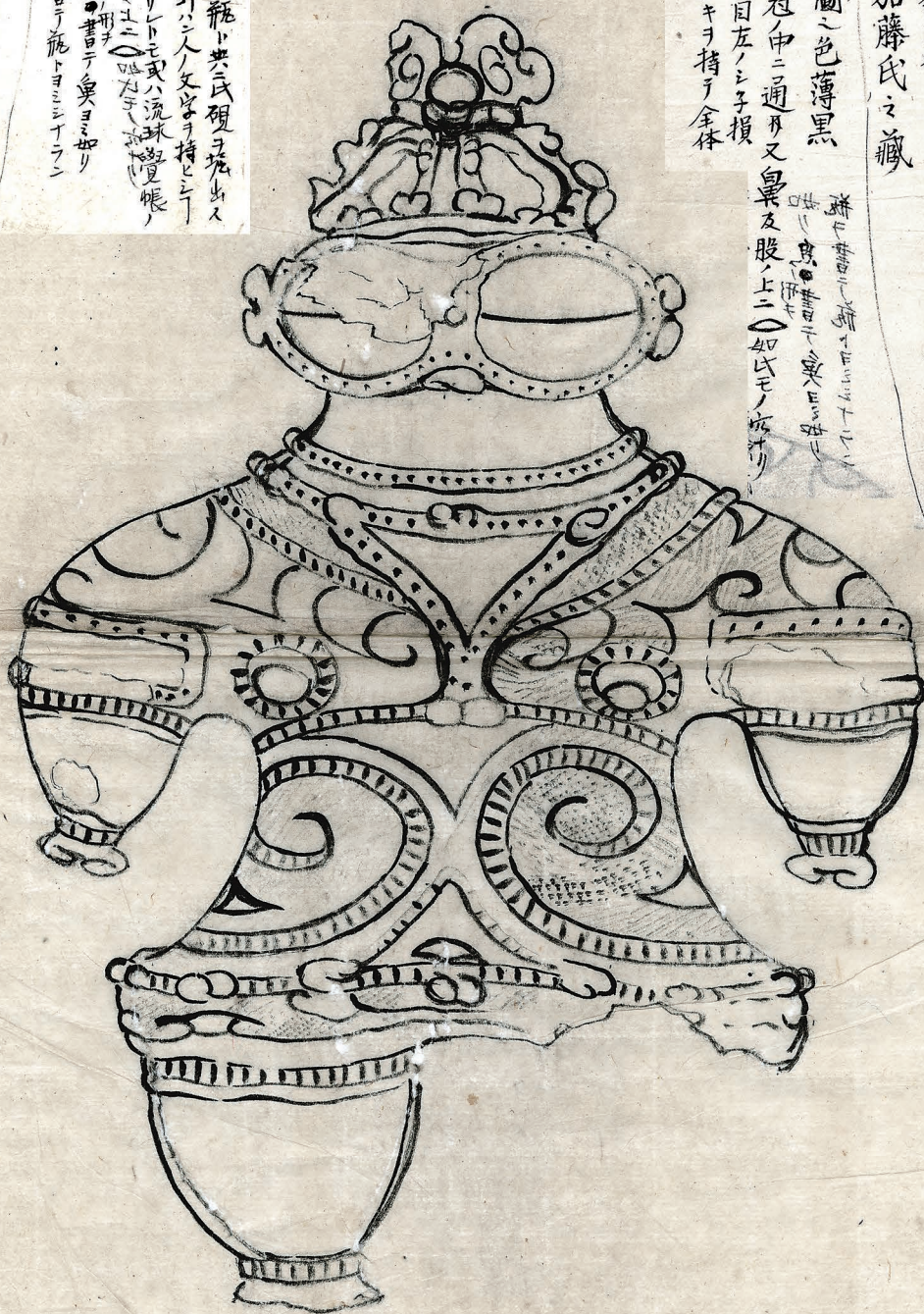
蘇子書曰二一
蘇子書曰二一
蘇子書曰二一

瓶園

瓶より瓶に共氏硯ヲ流ス
 然六野ハ人ノ文字ヲ持ビテ
 論ヲ待サレトモ或ハ流球ヲ
 算ス期ヘユニ

如リ思フ書言テ莫クモ如リ
 瓶ヲ書言テ瓶トモニナラニ

明治二十年四月十一日
坂本サヲ郎

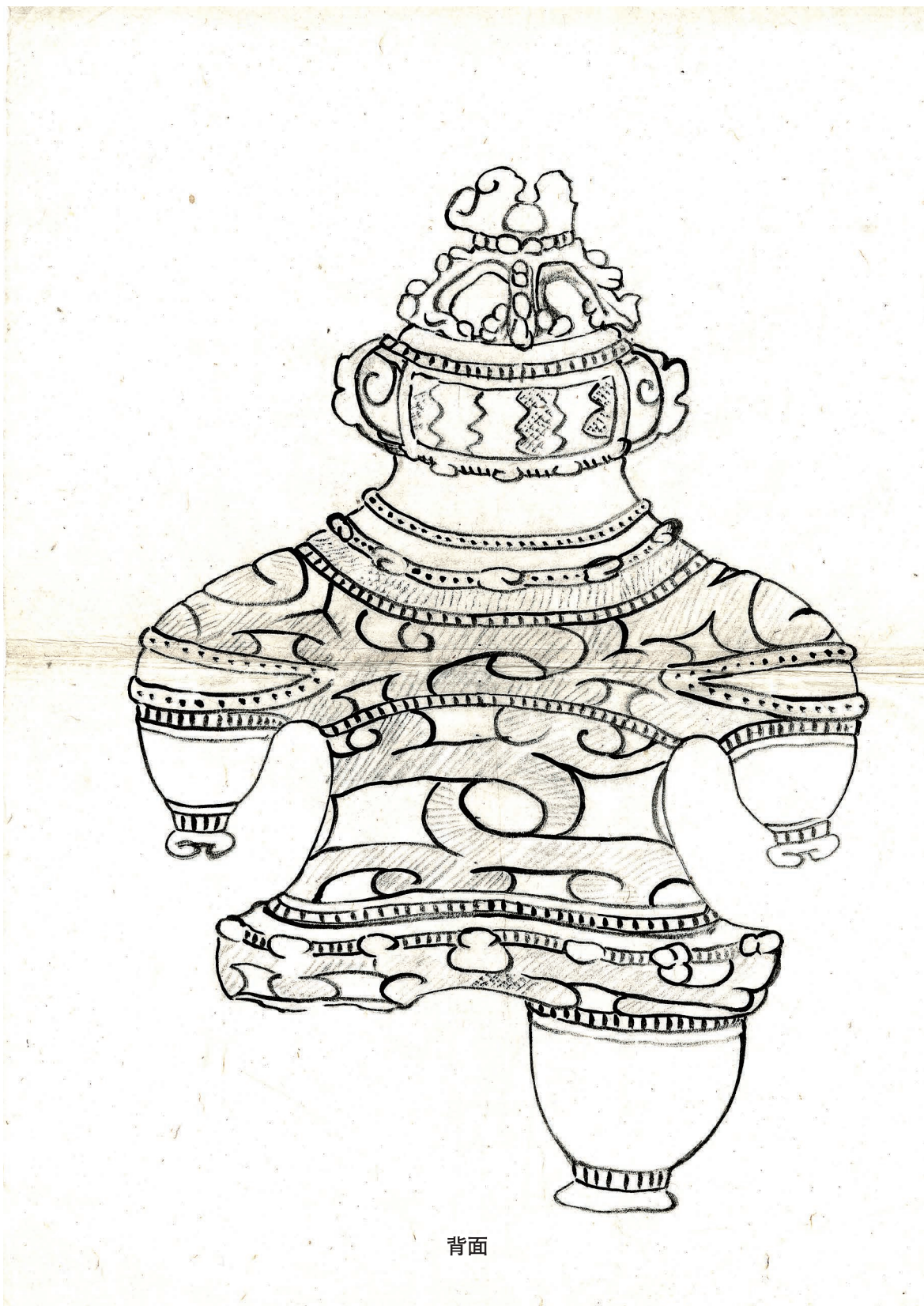


正面

3A

0

10cm



背面

3B

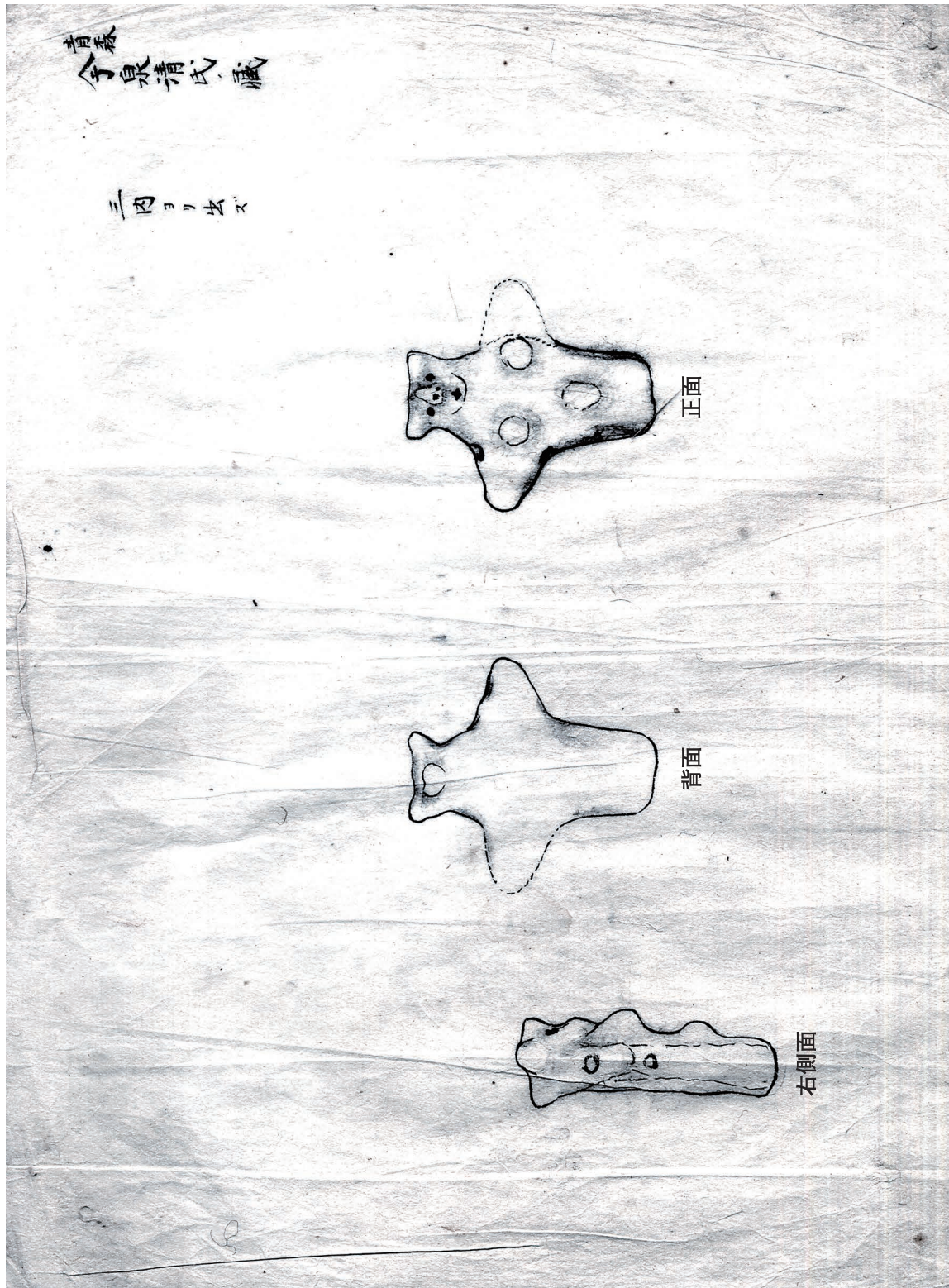


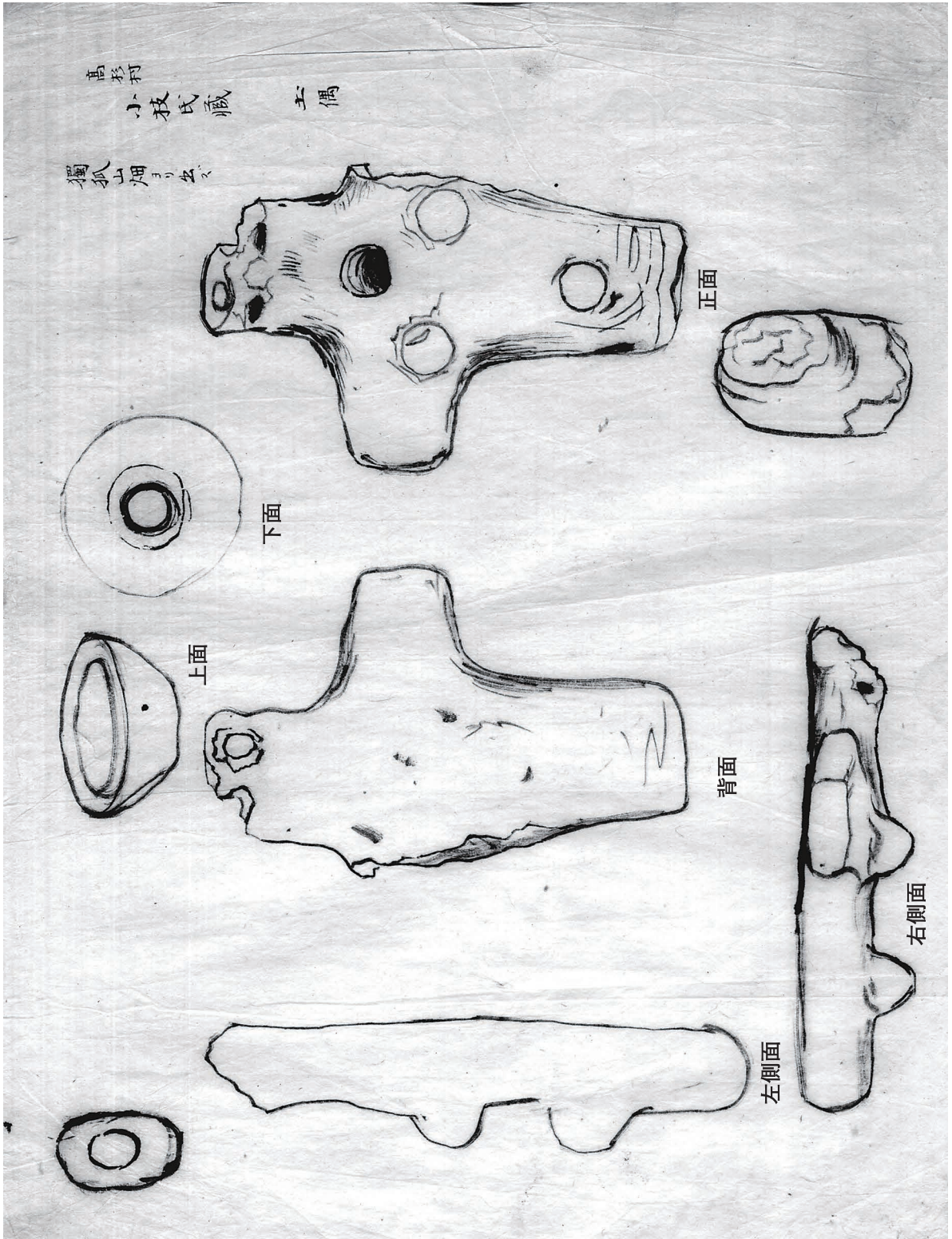


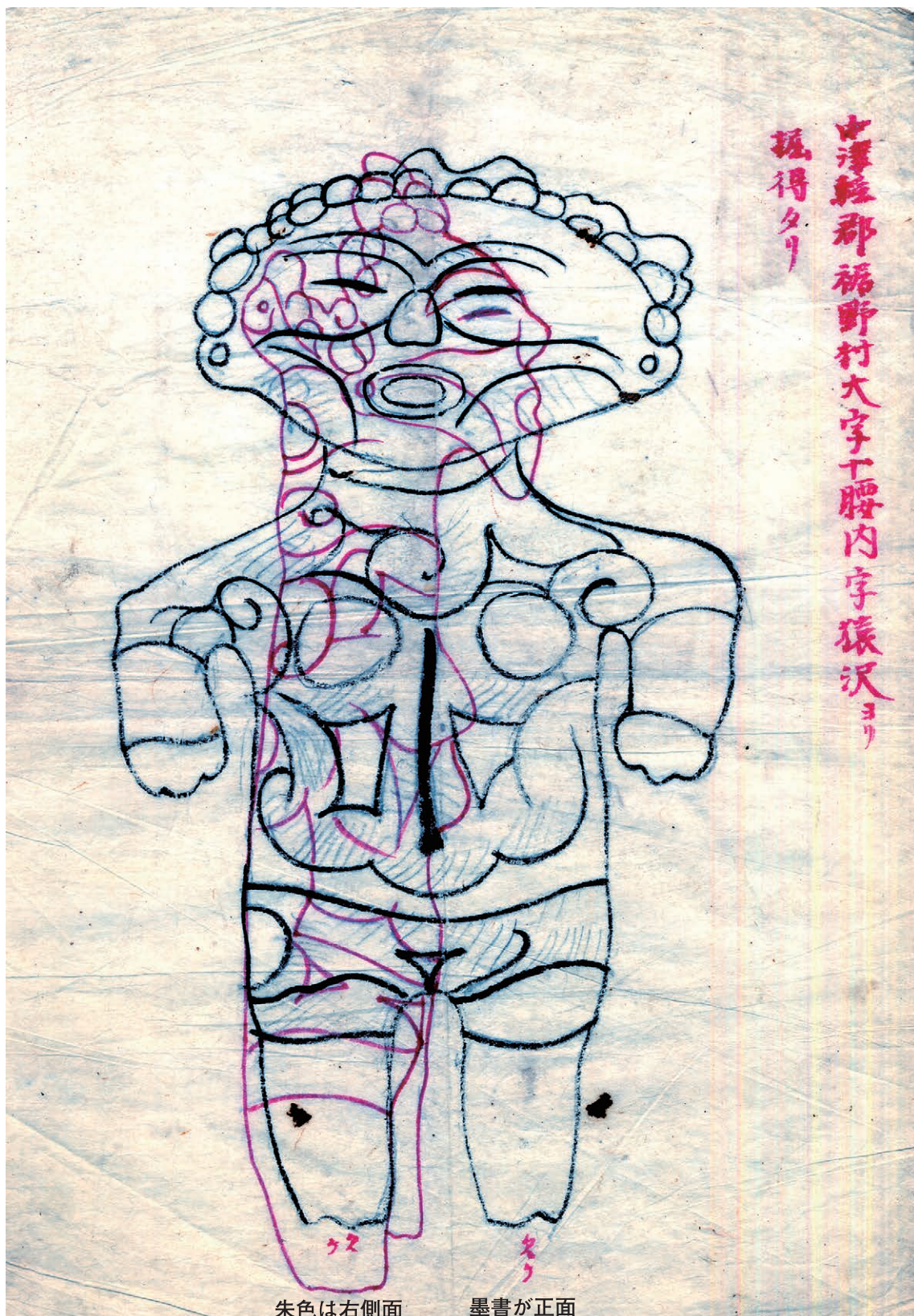
左側面

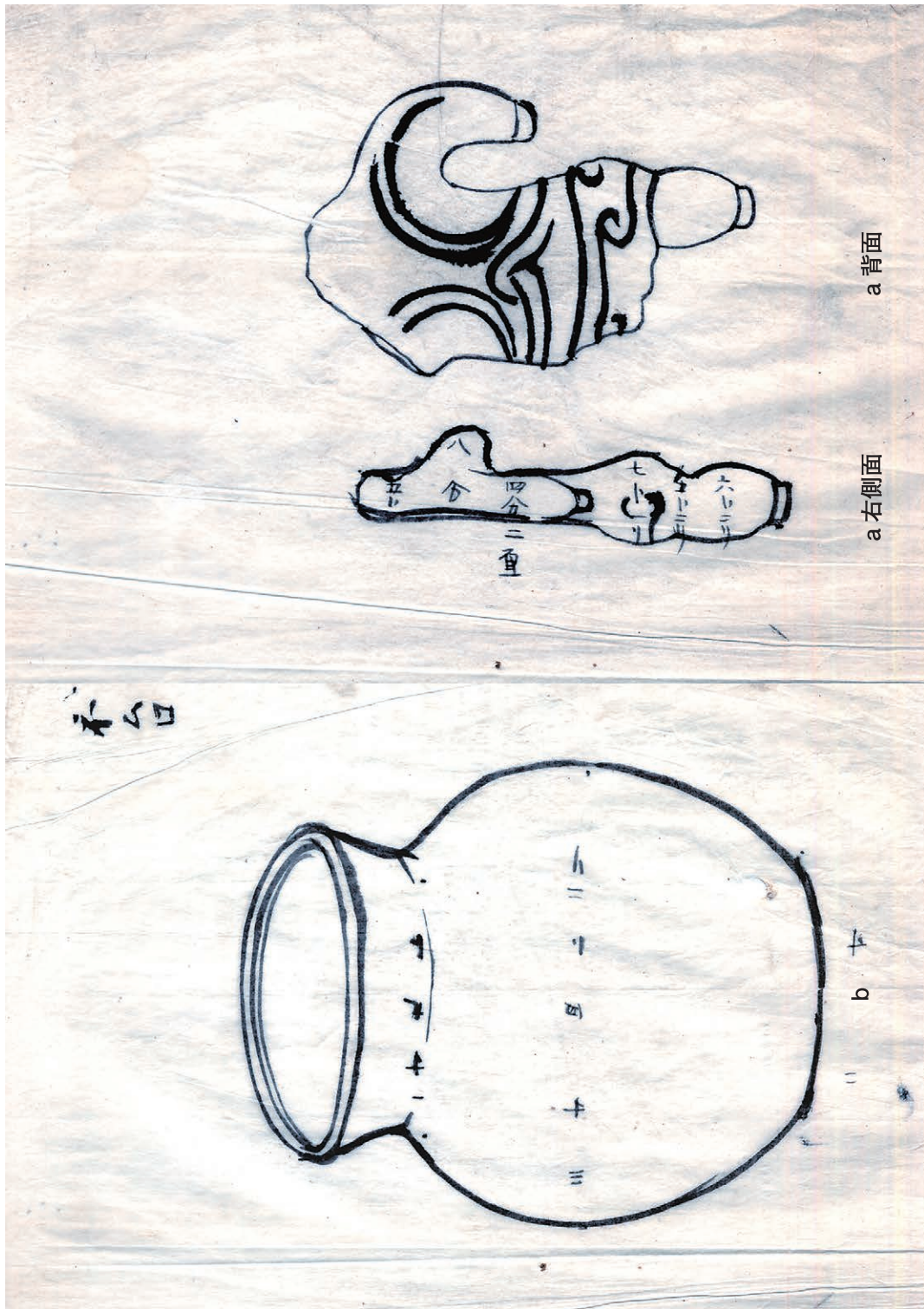
3C

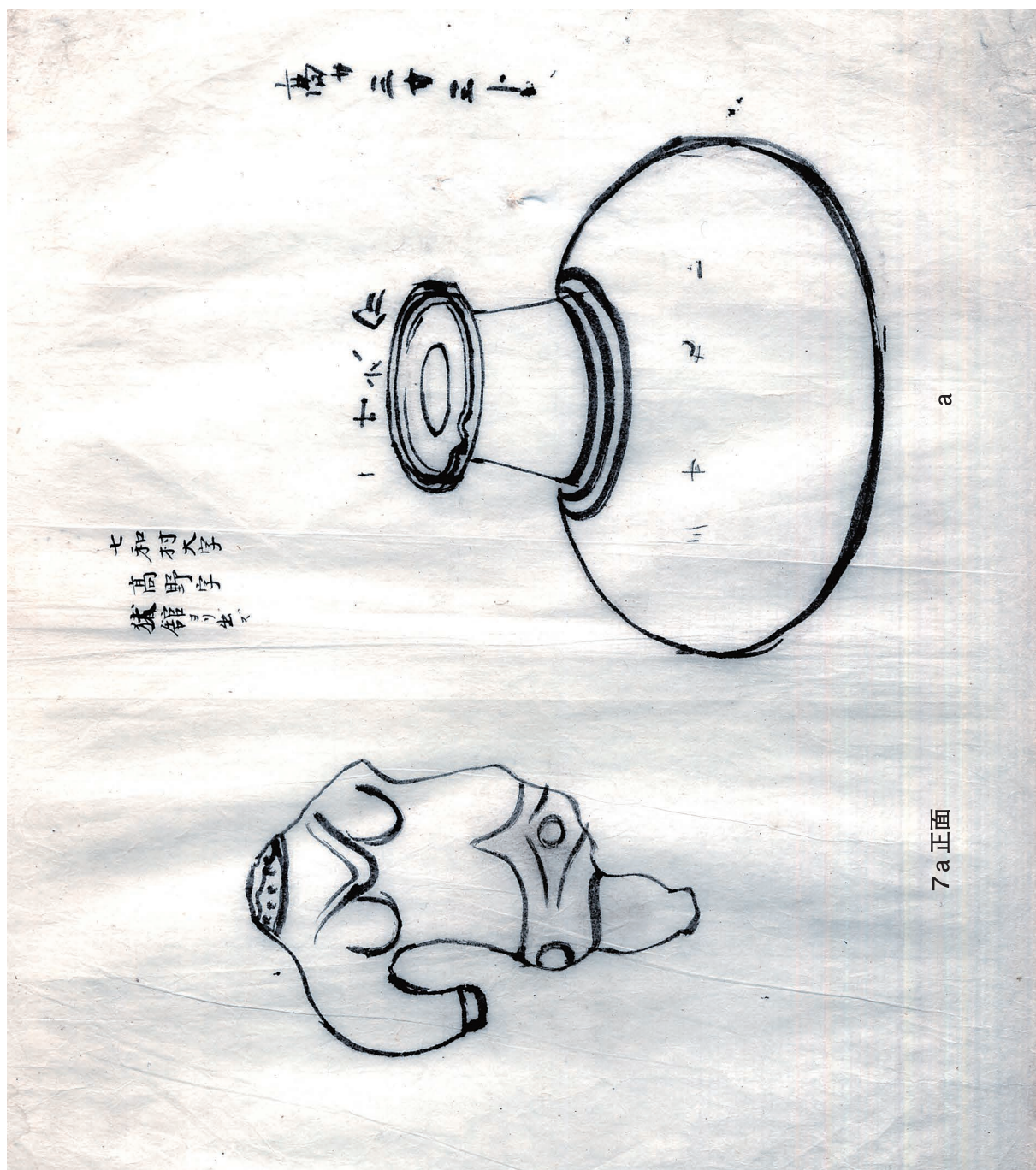


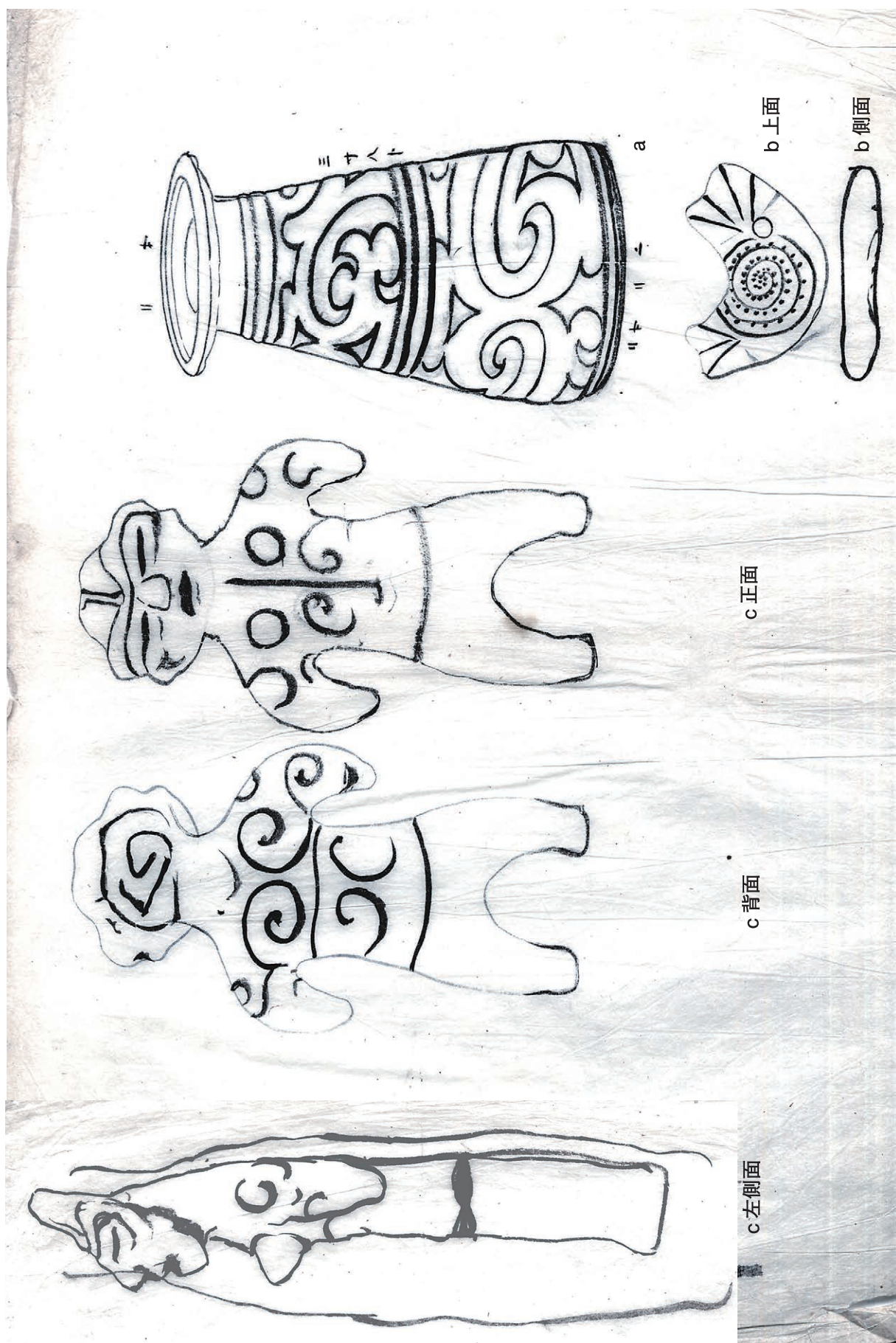




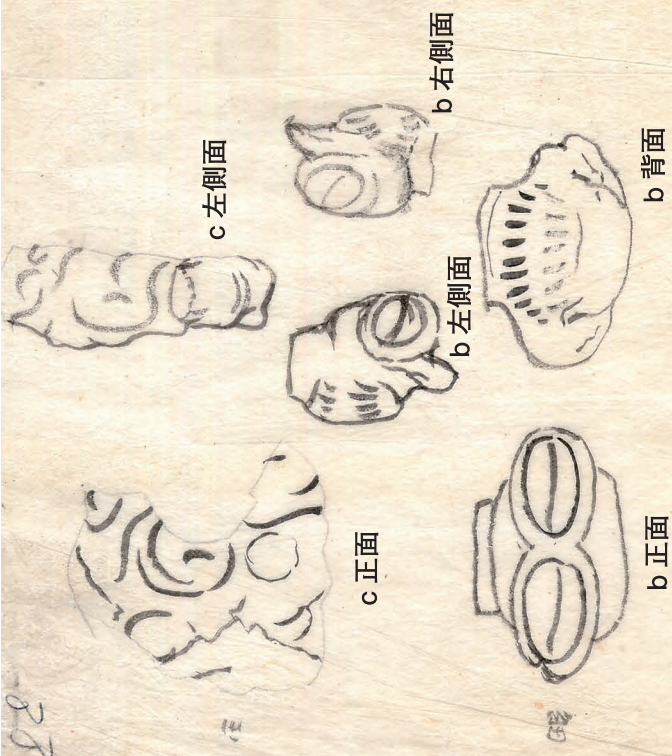


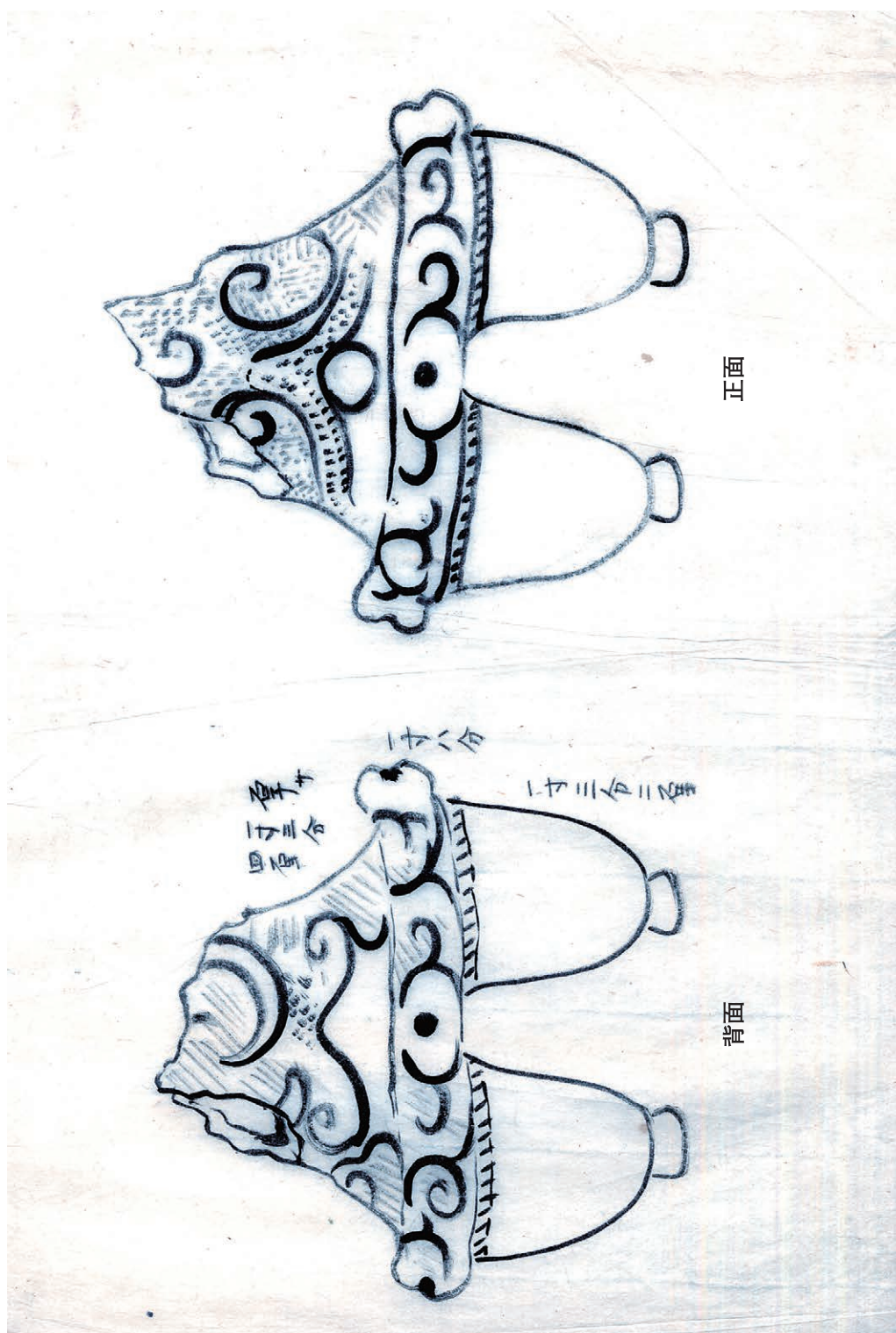


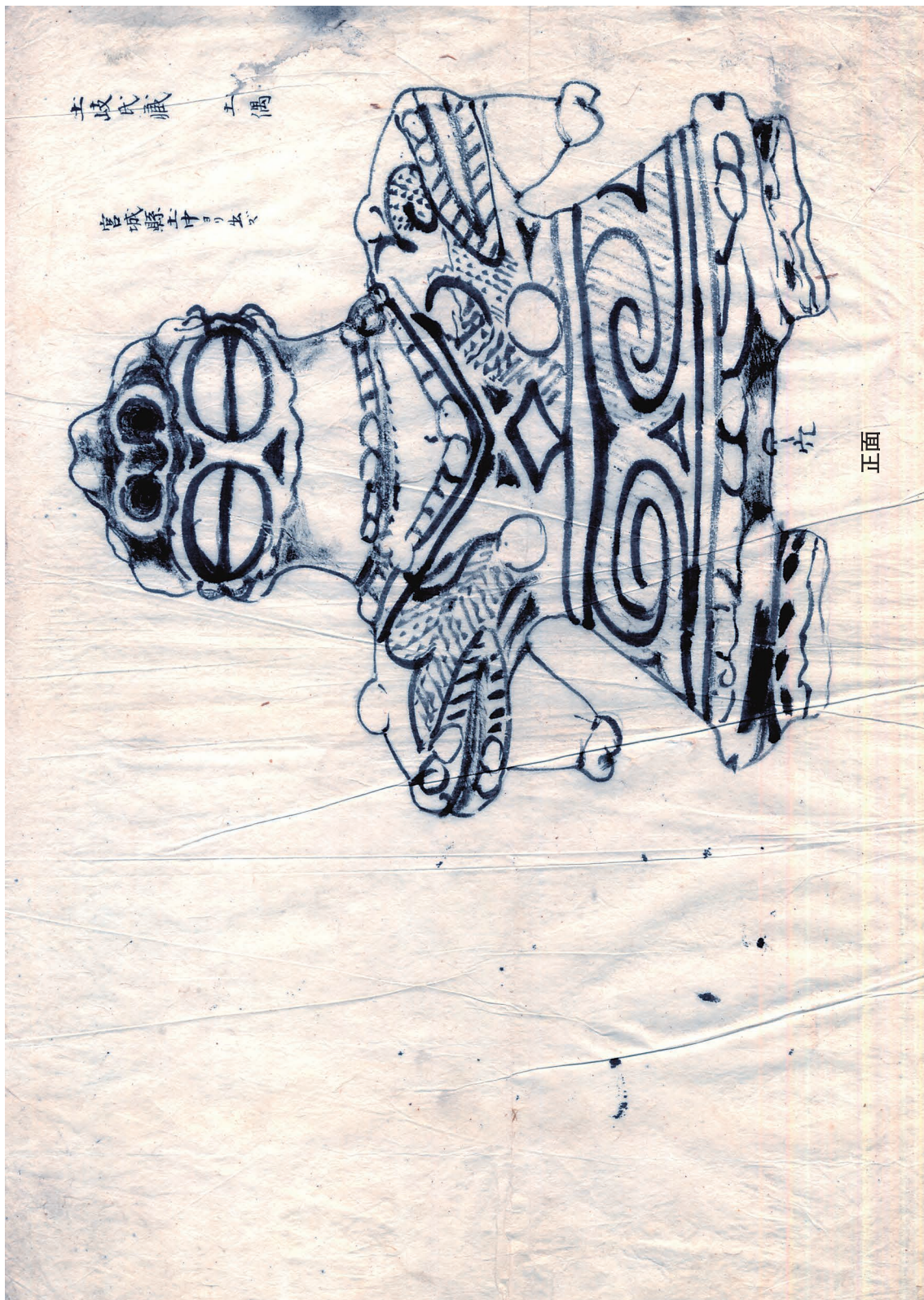




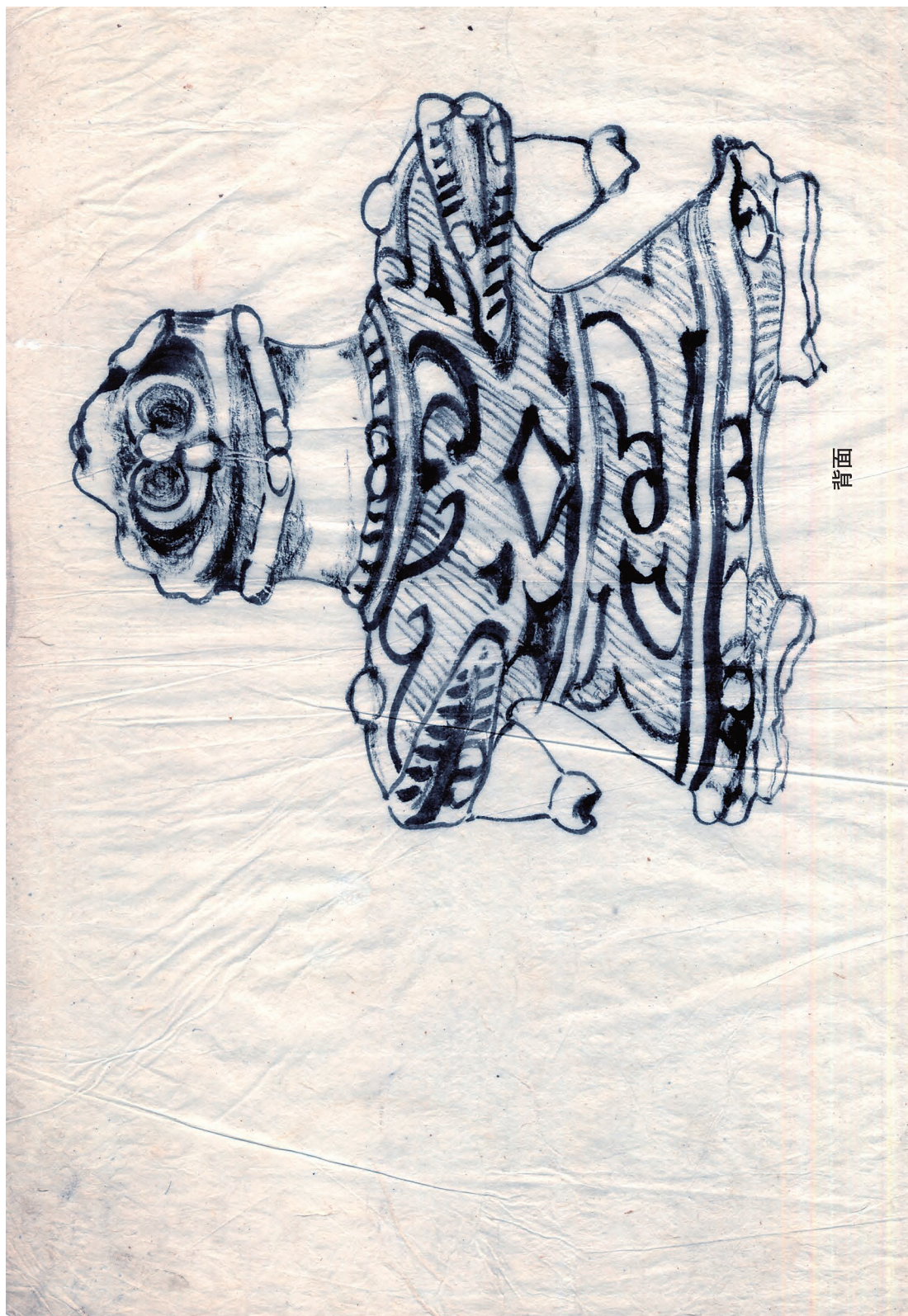
駒籠
字月見野



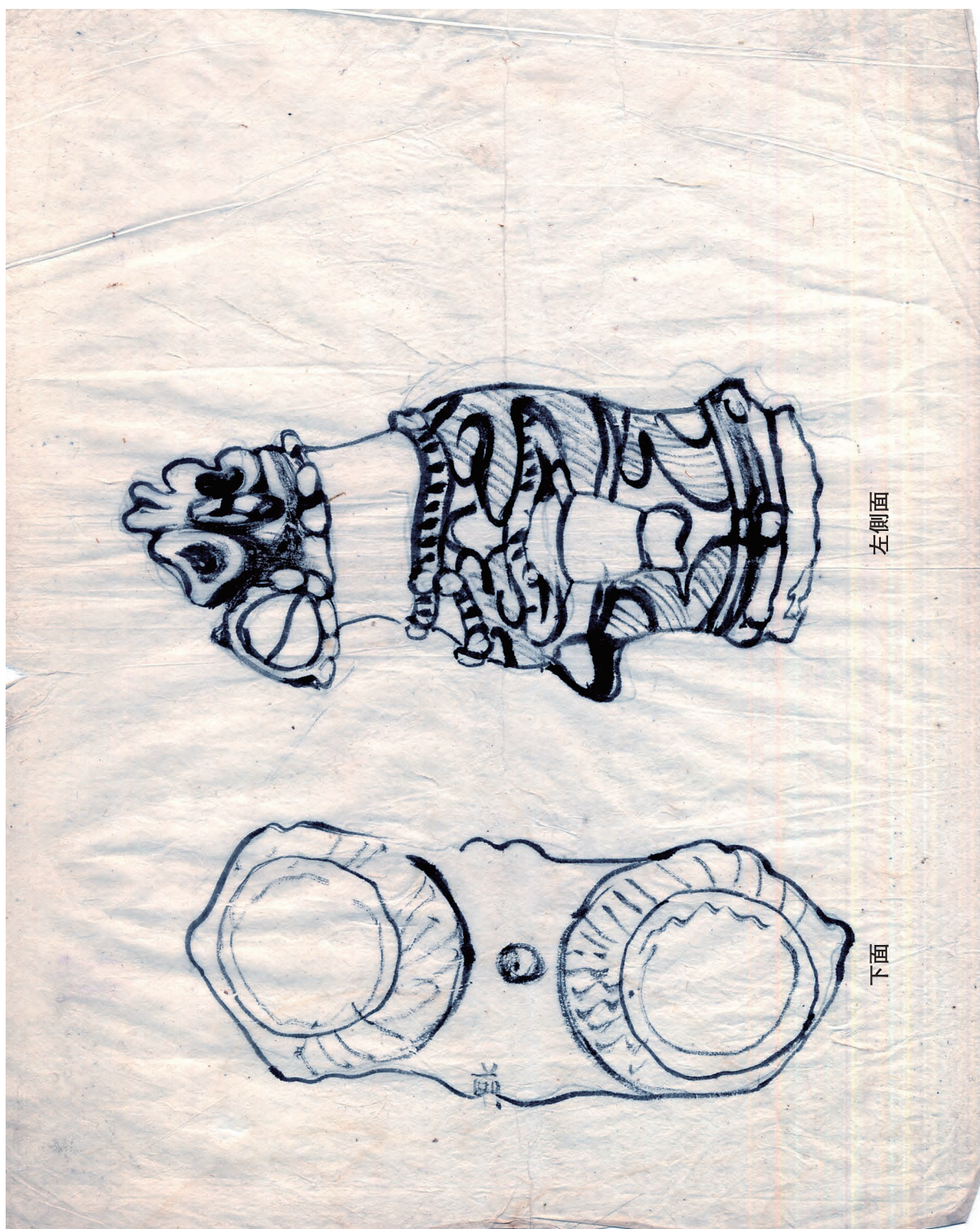




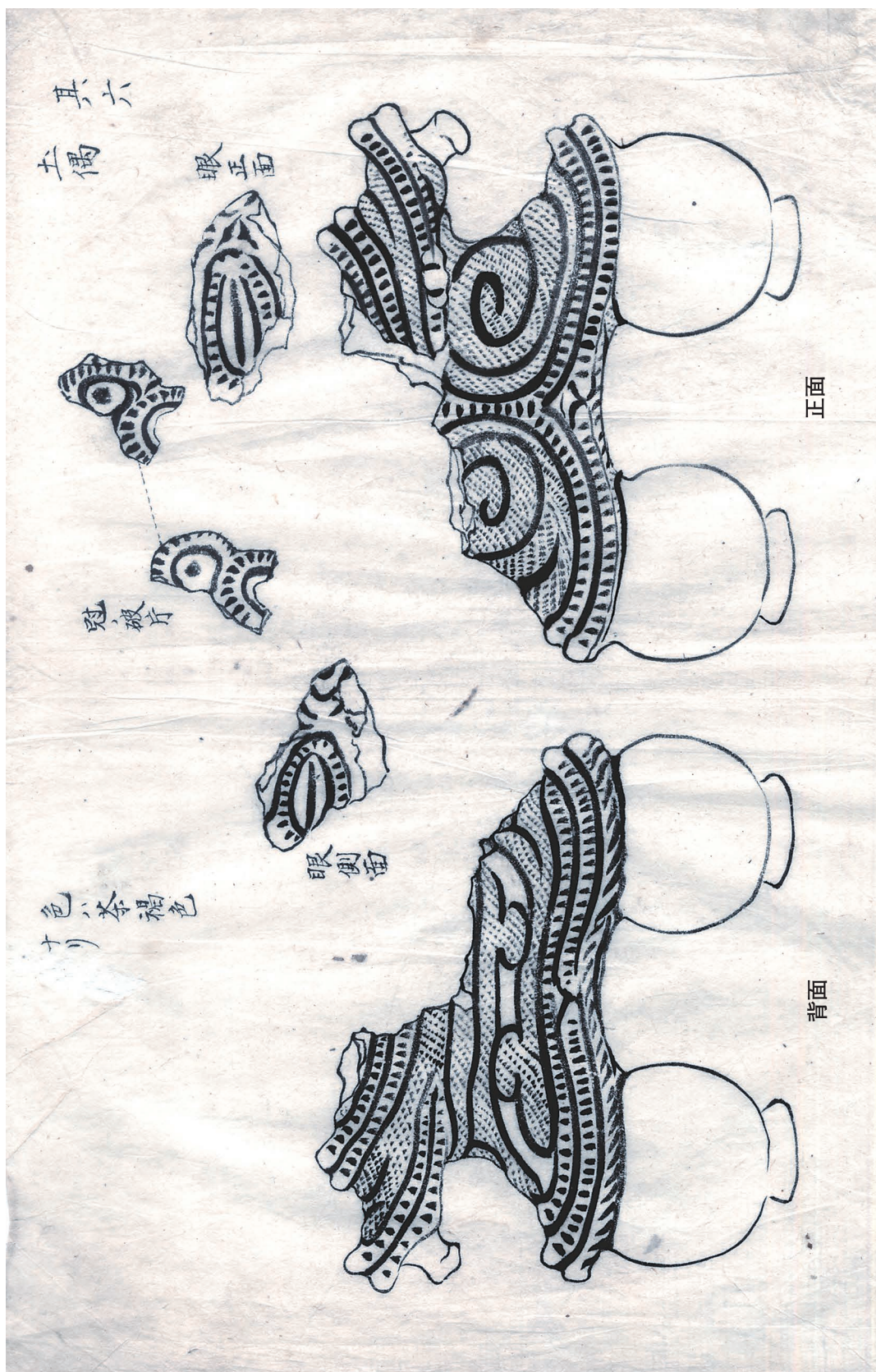
12A



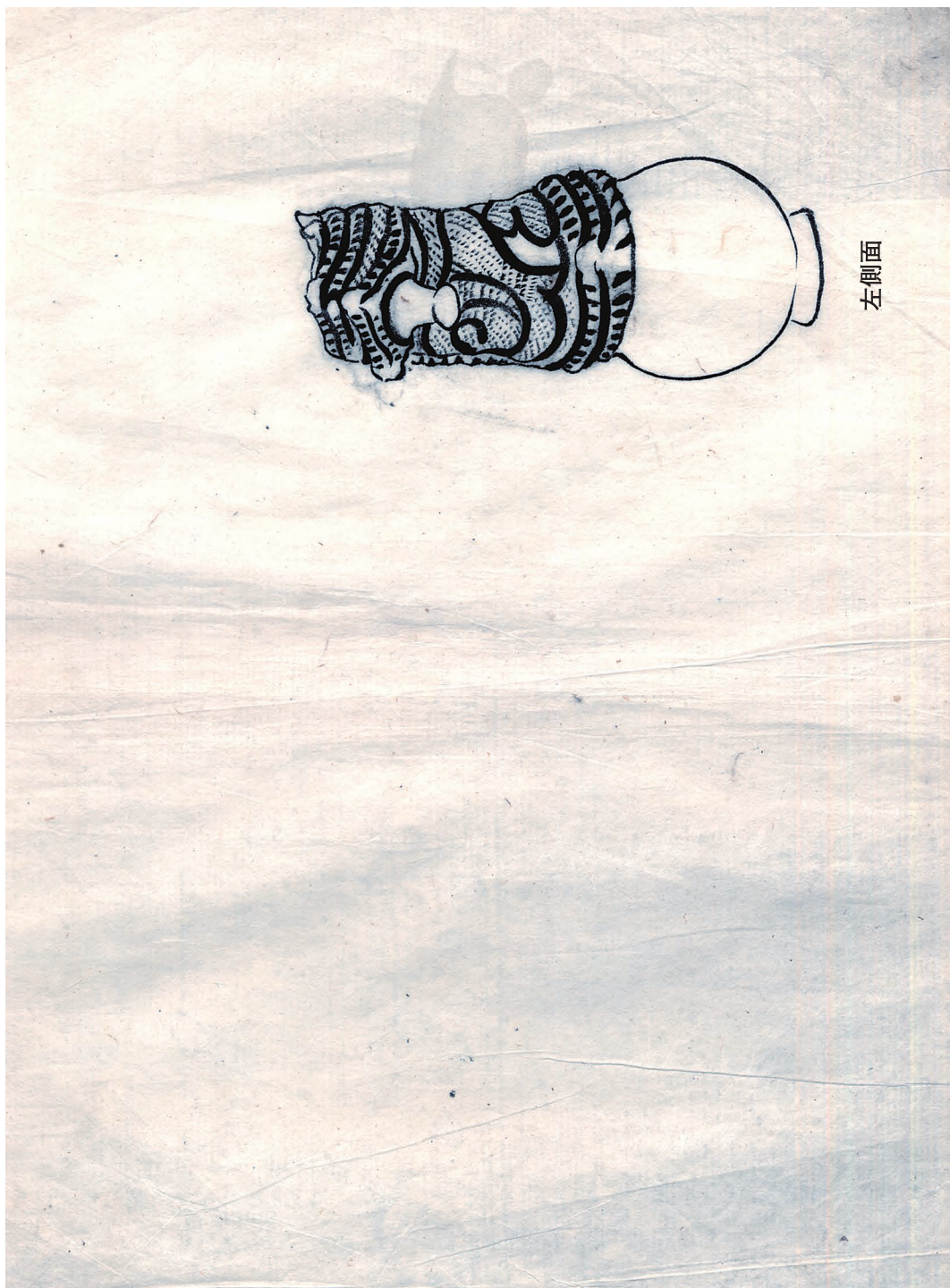
12B



12C



13A



左側面

13B

野呂氏藏
館岡村



a 正面



a 背面拓本



a 斜面

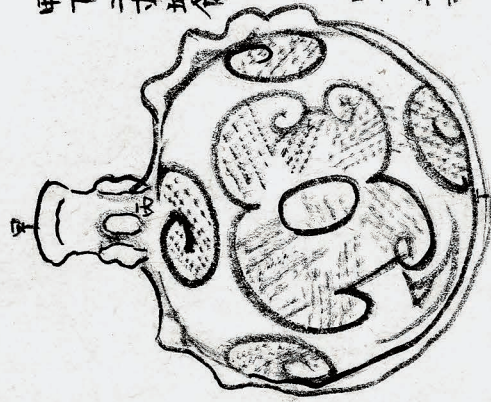
高一寸四分
径一寸九分



b 側面

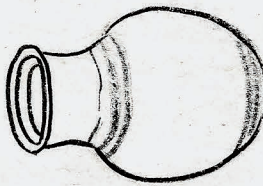
甲乙二寸五分

丙丁二寸



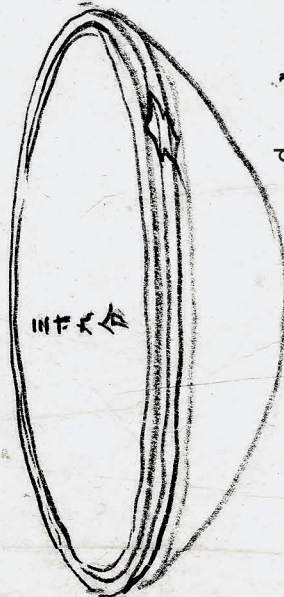
b 底面

一寸五分



c

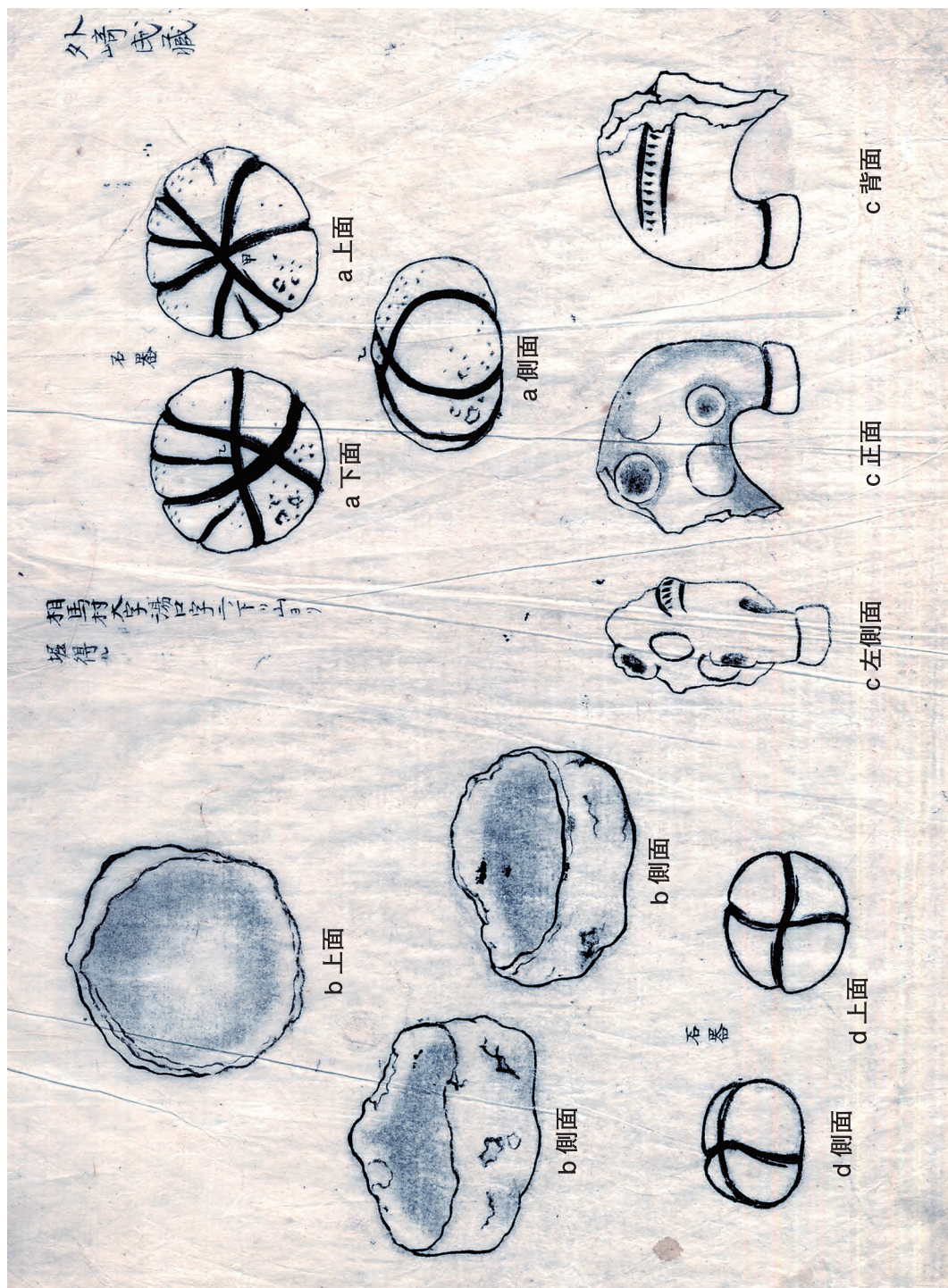
高一寸

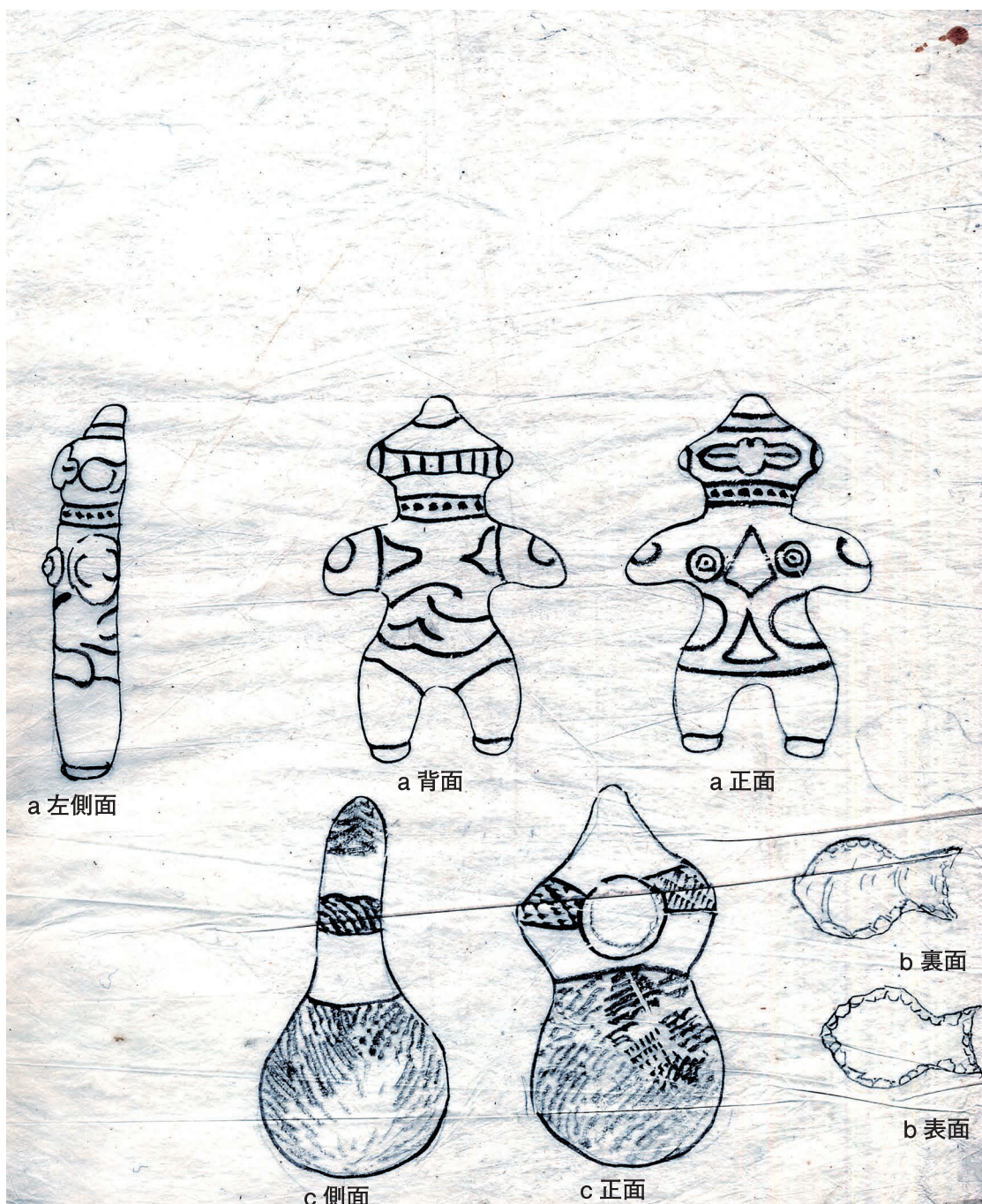


d

三寸七分





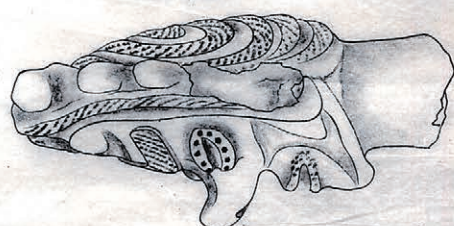


龜ヶ岡墟之産人形之圖

午、
旧四月廿一日寄

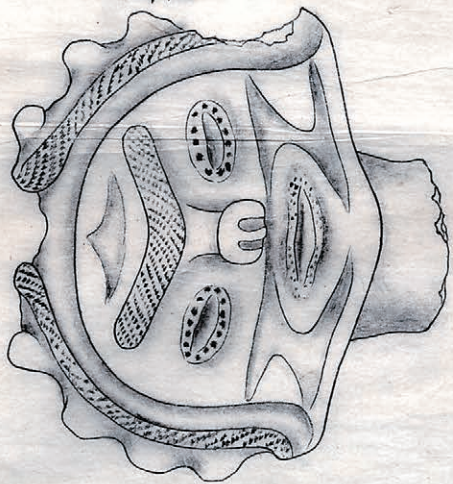
乳二寸二分
横三寸五分
厚一寸五分
細如糸
光沢あり

片面



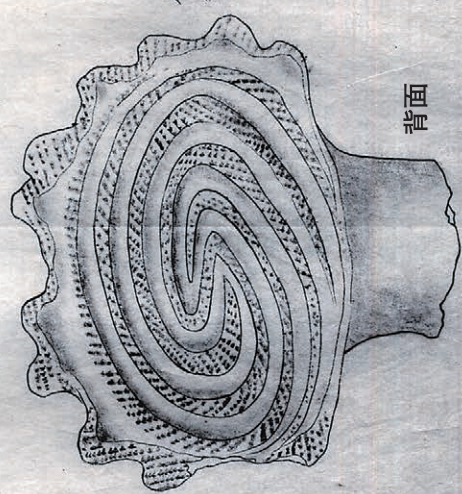
左側面

正面

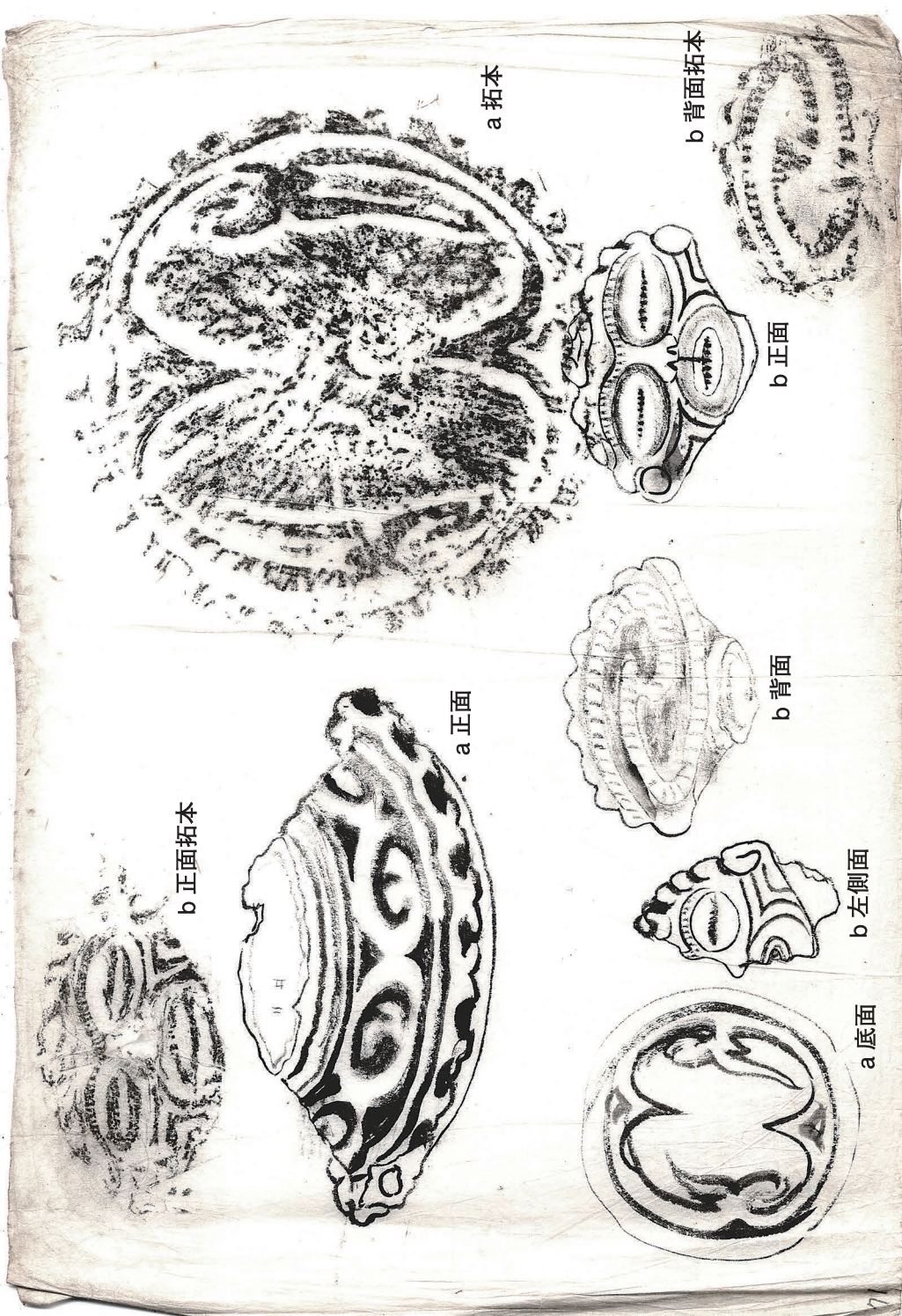


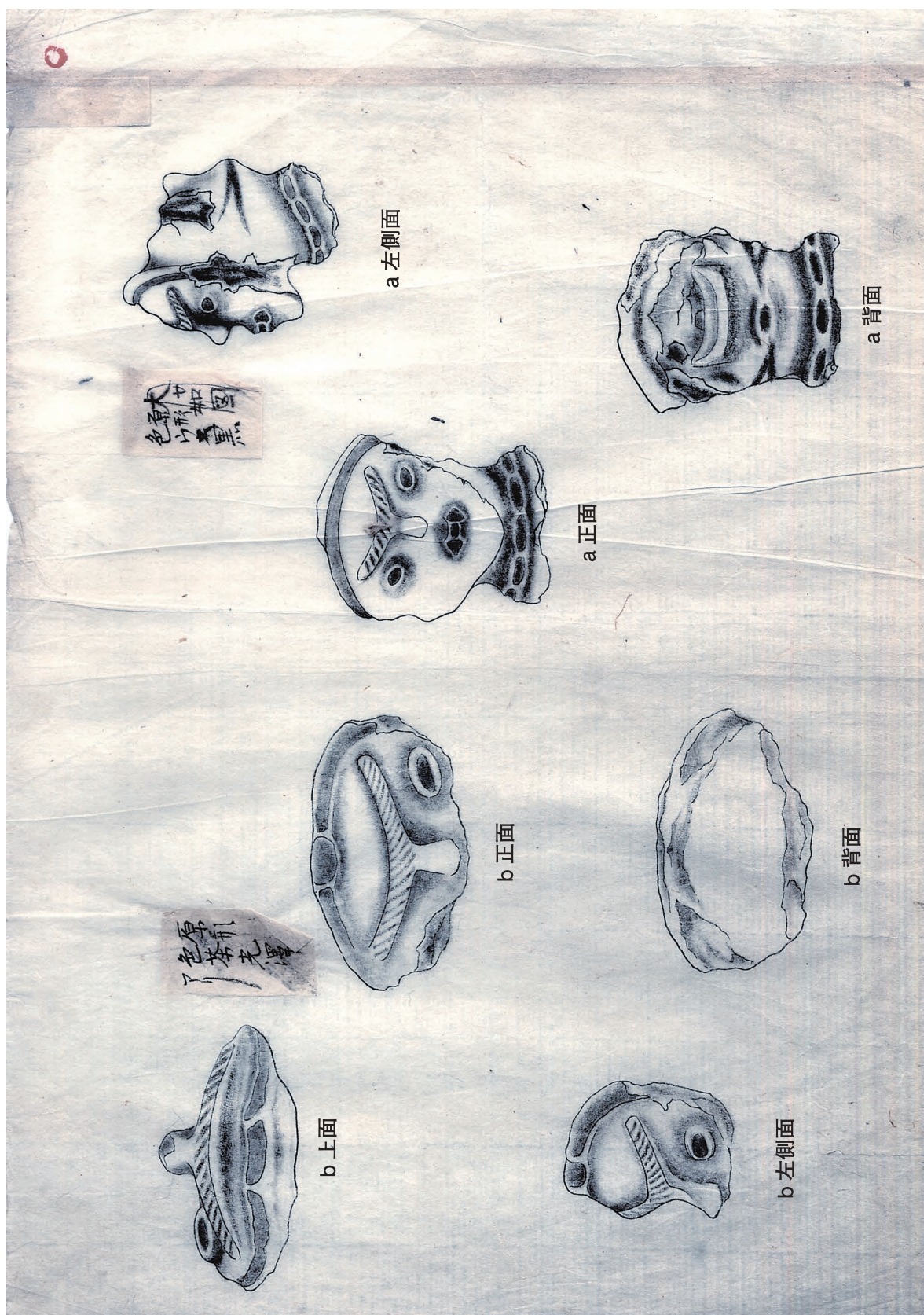
正面

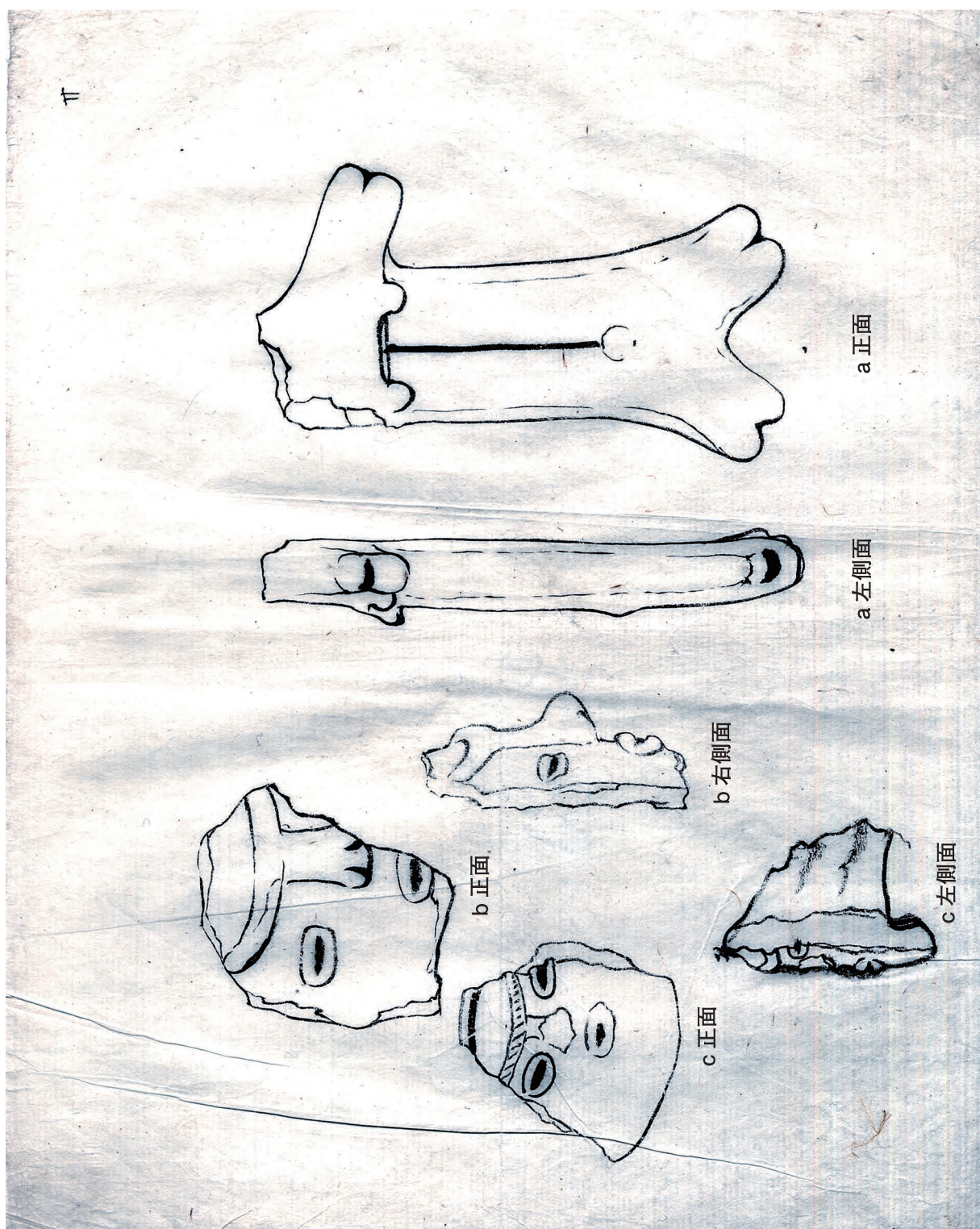
後面

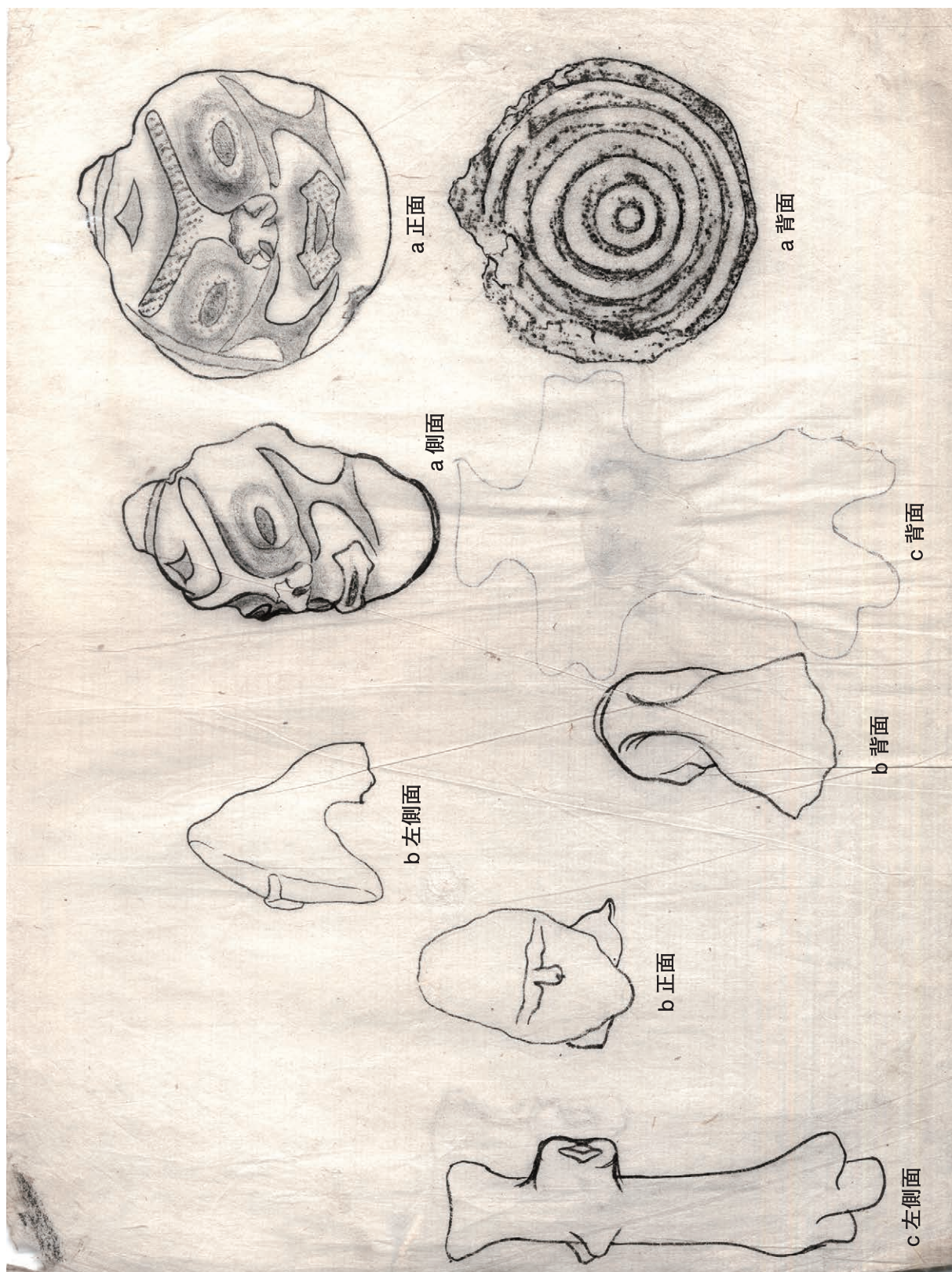


背面



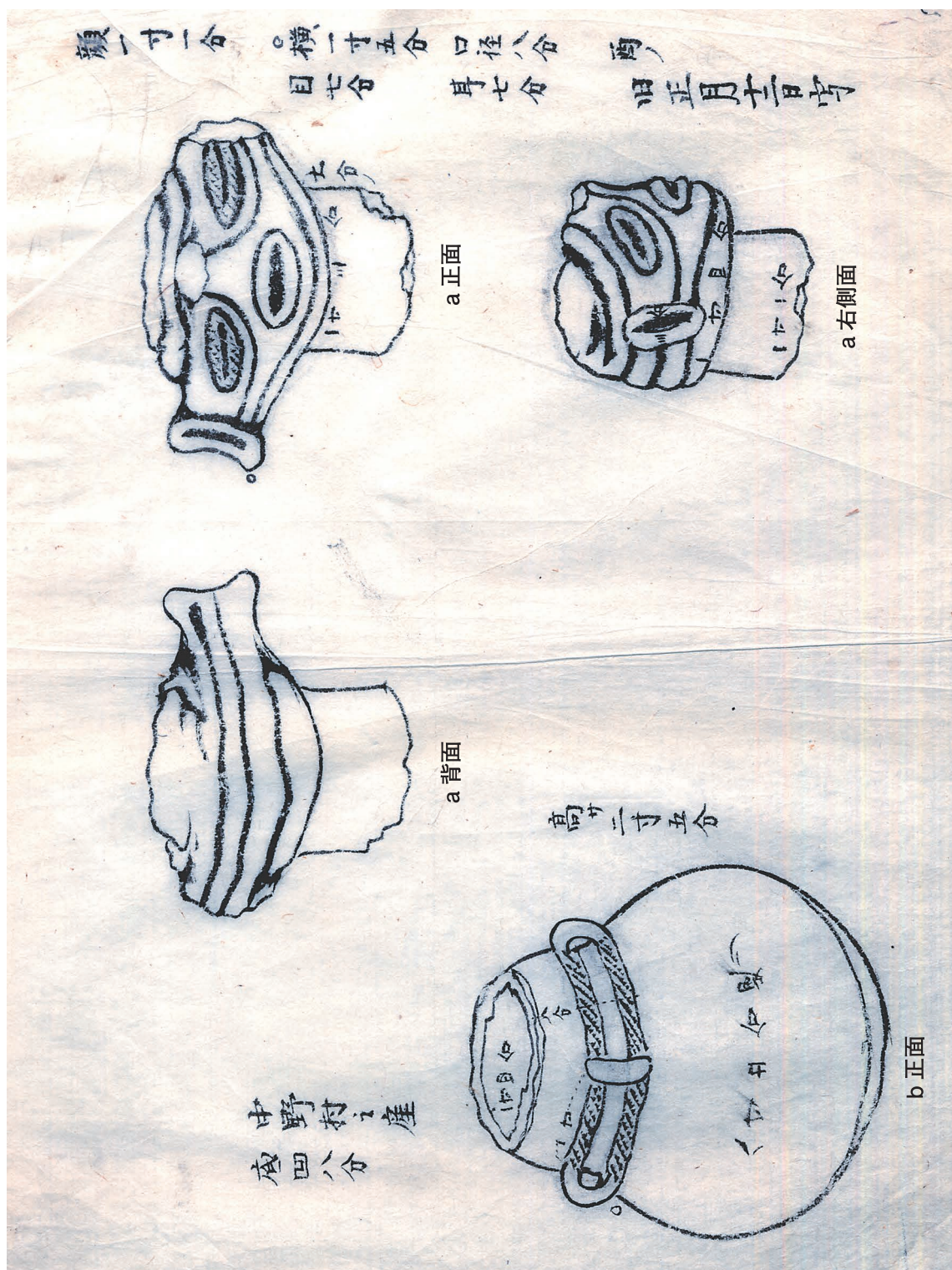




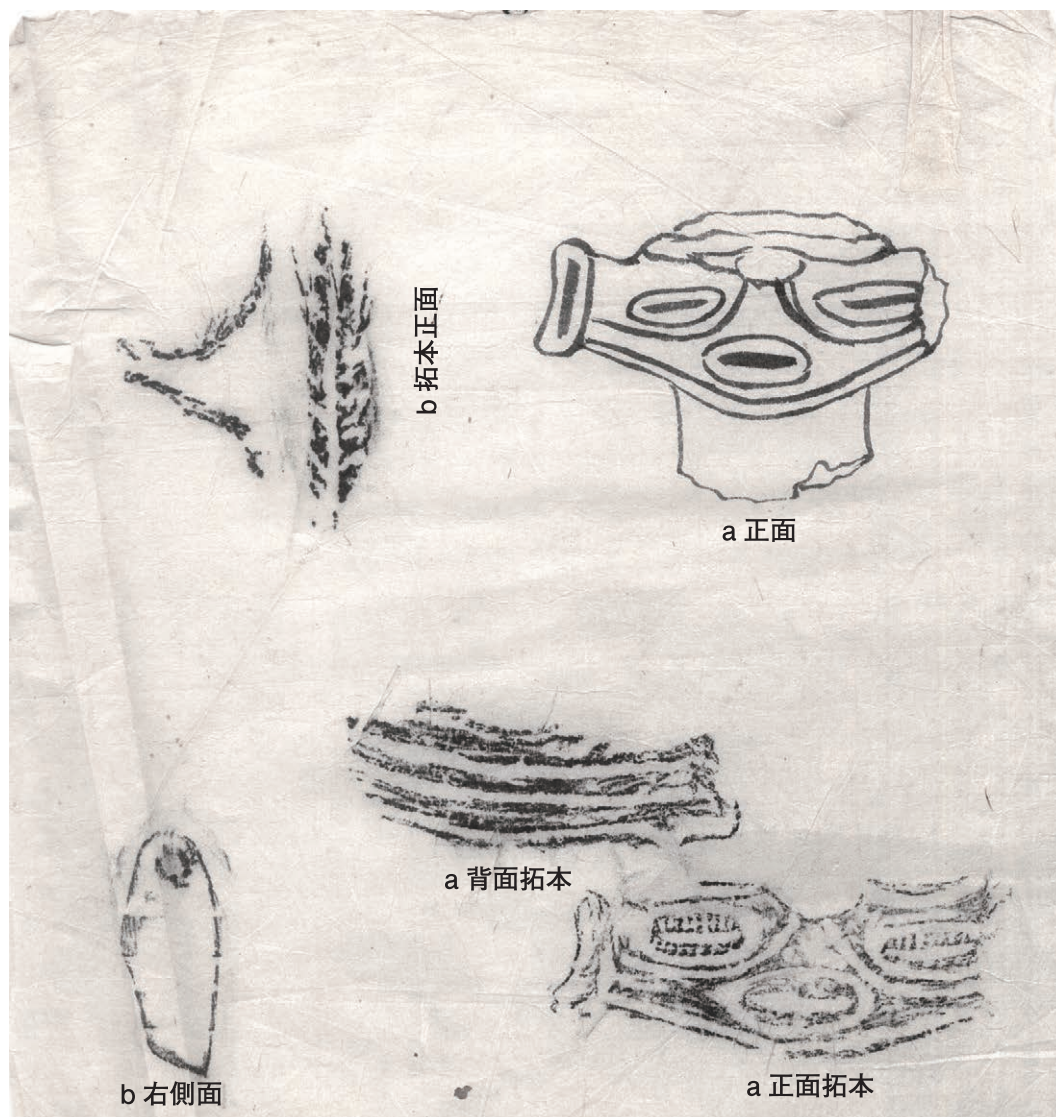




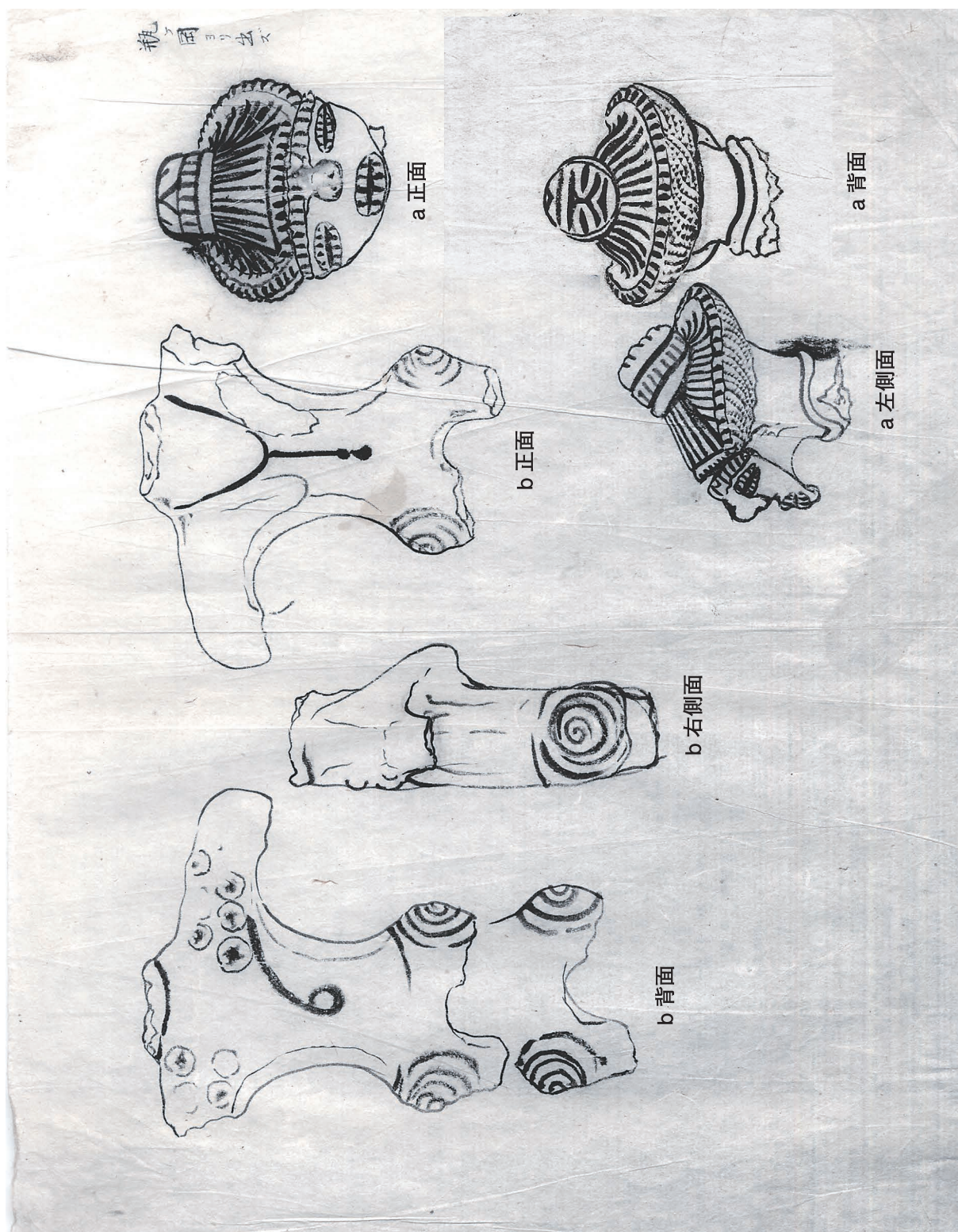
23



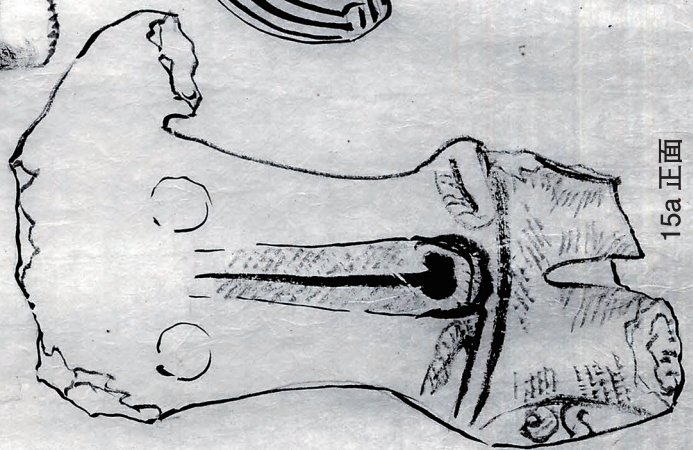
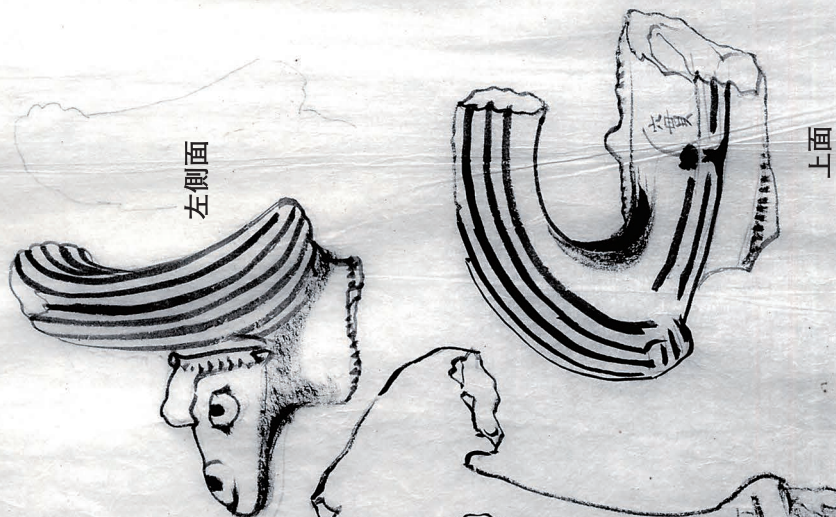
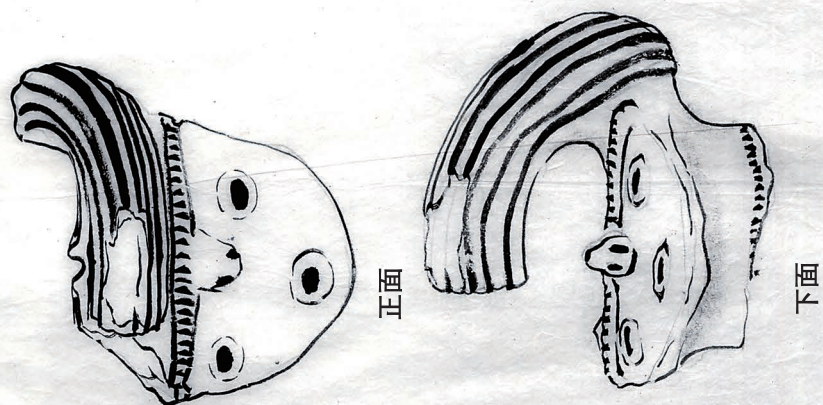
24A



24B

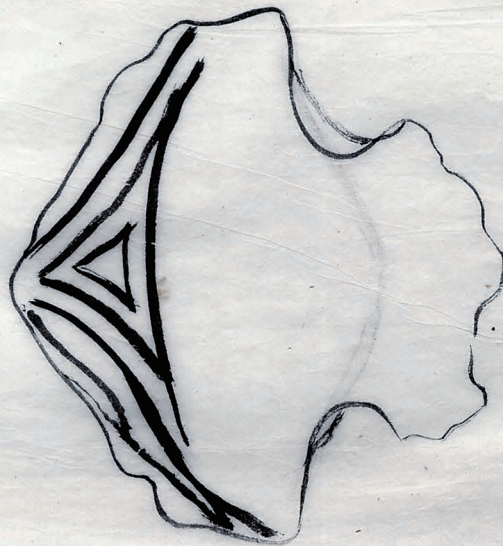


秋川
工藤氏藏
龍岡出土



浪岡
平野清助氏藏

龍岡出土



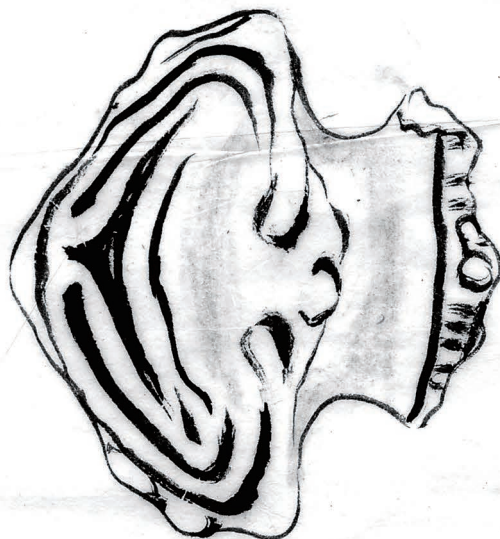
背面 (下書き?)



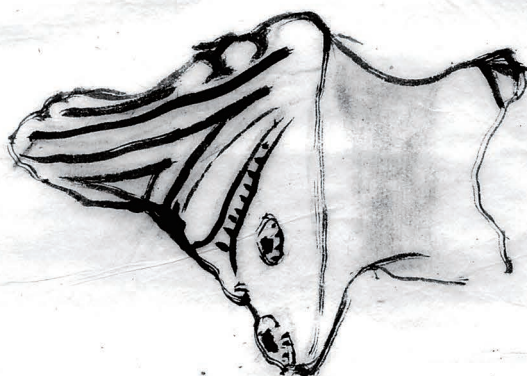
正面

27A

其二



背面



左側面

27B

其二

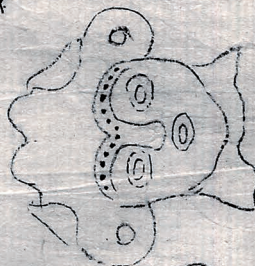
館岡村

野呂忠古之藏

巳 四月十日寅



a 側面



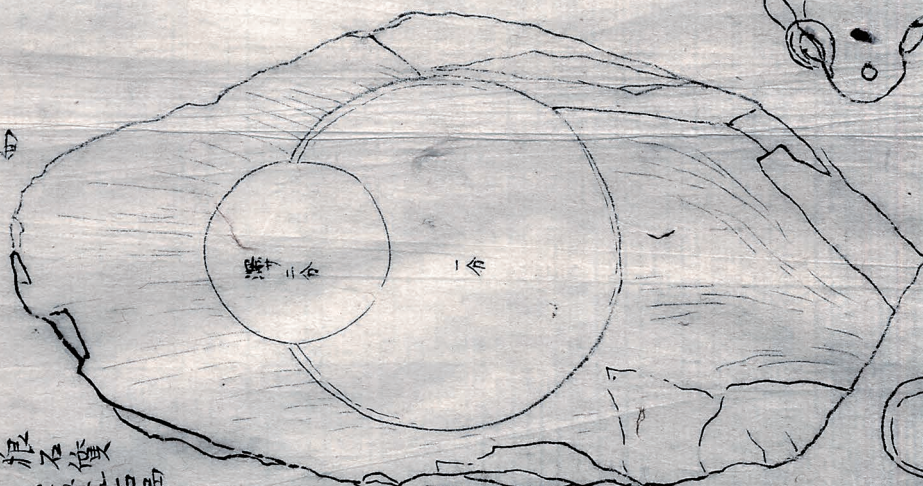
正面

b



後面

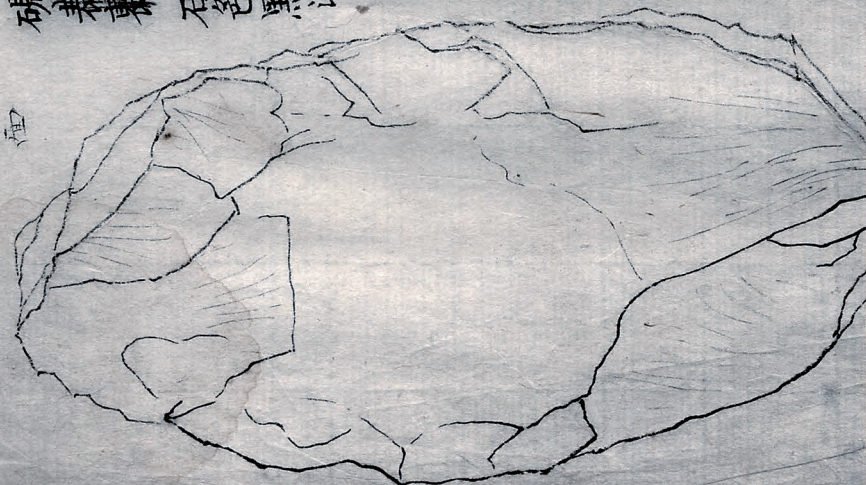
c 正面



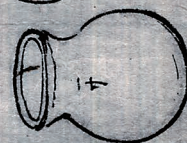
左 痕 石 質

硯 森 東 石 色 黒

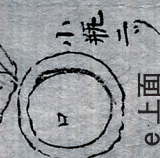
右 面



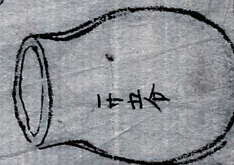
d 上面



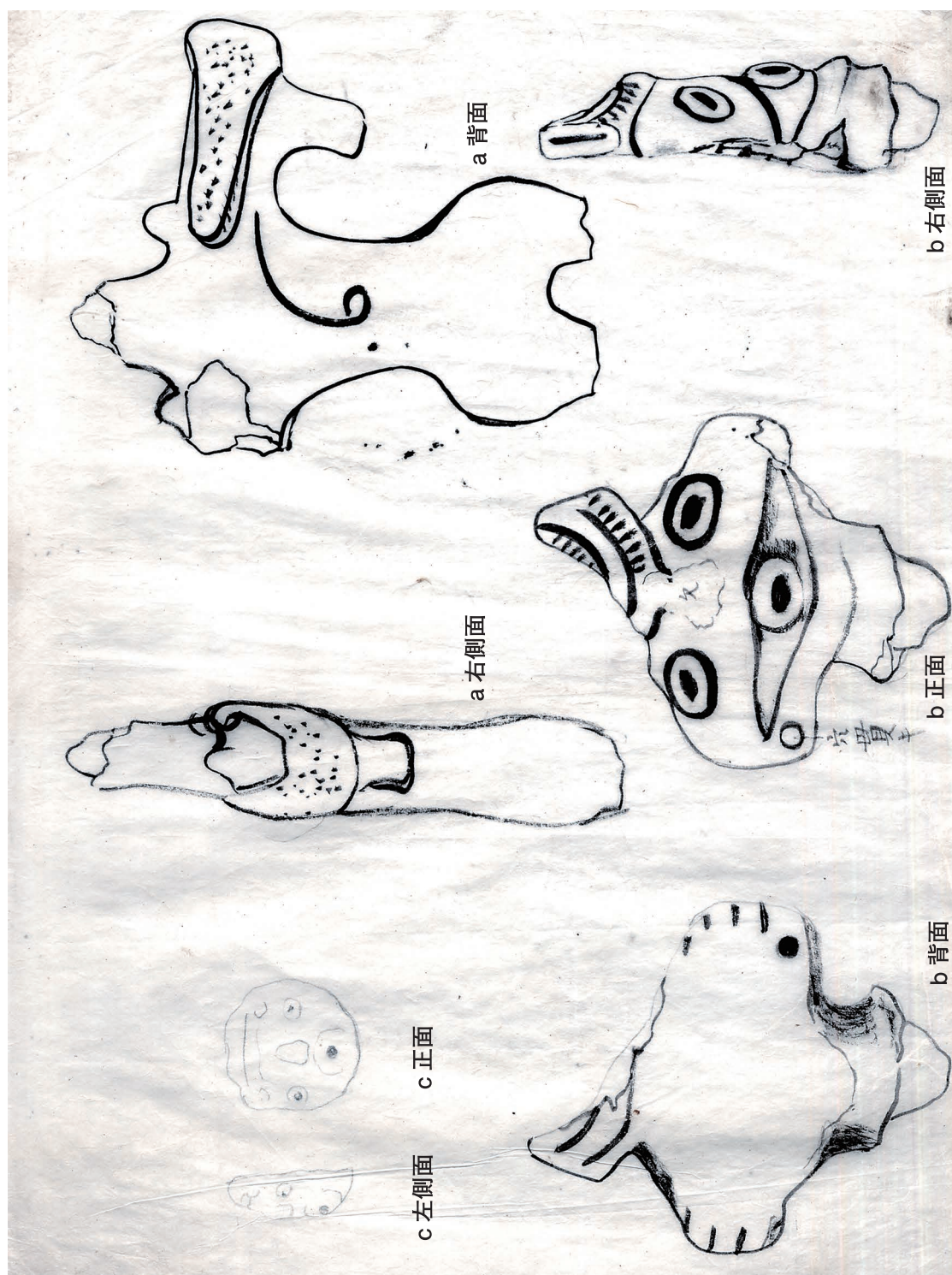
d 正面

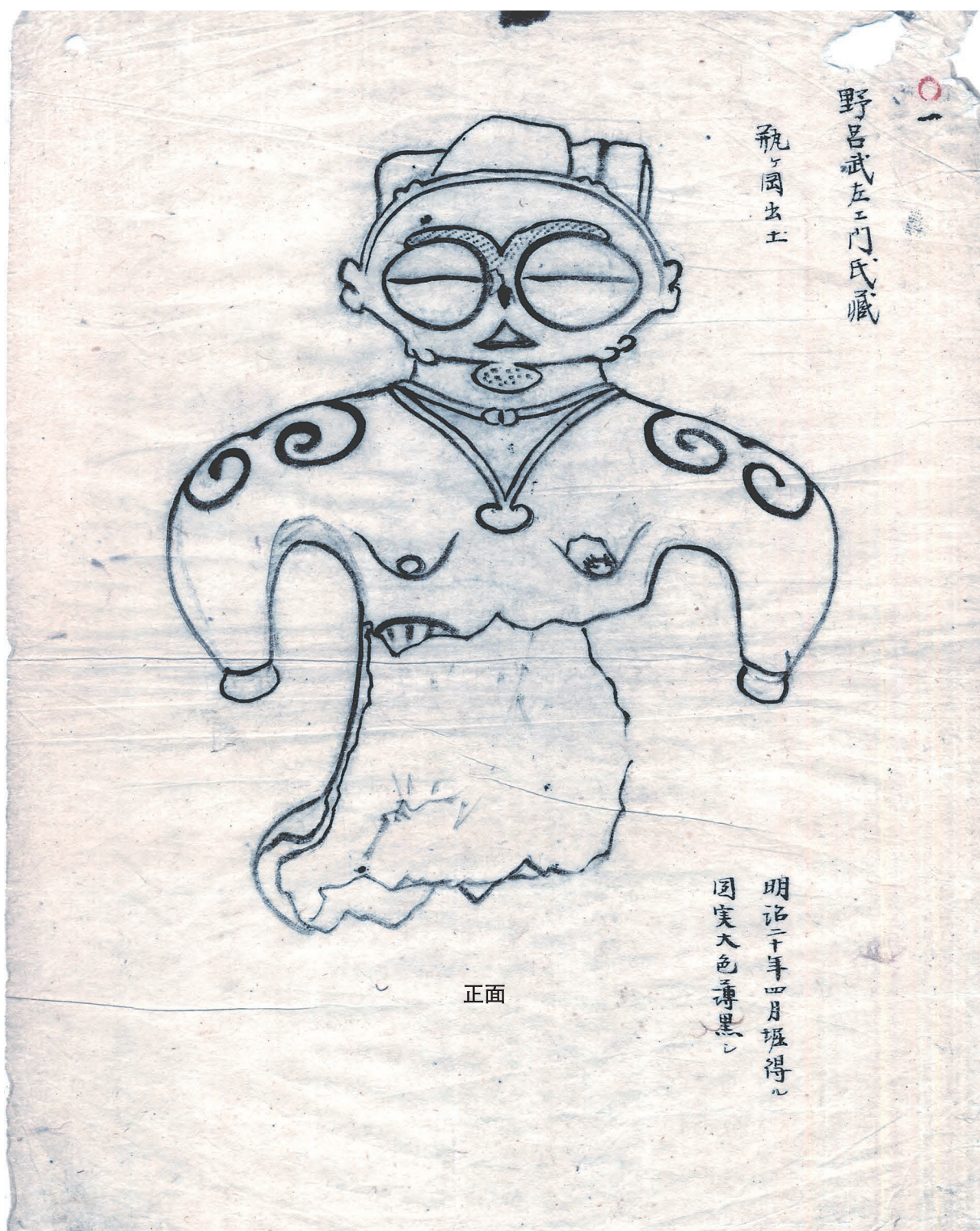


e 上面

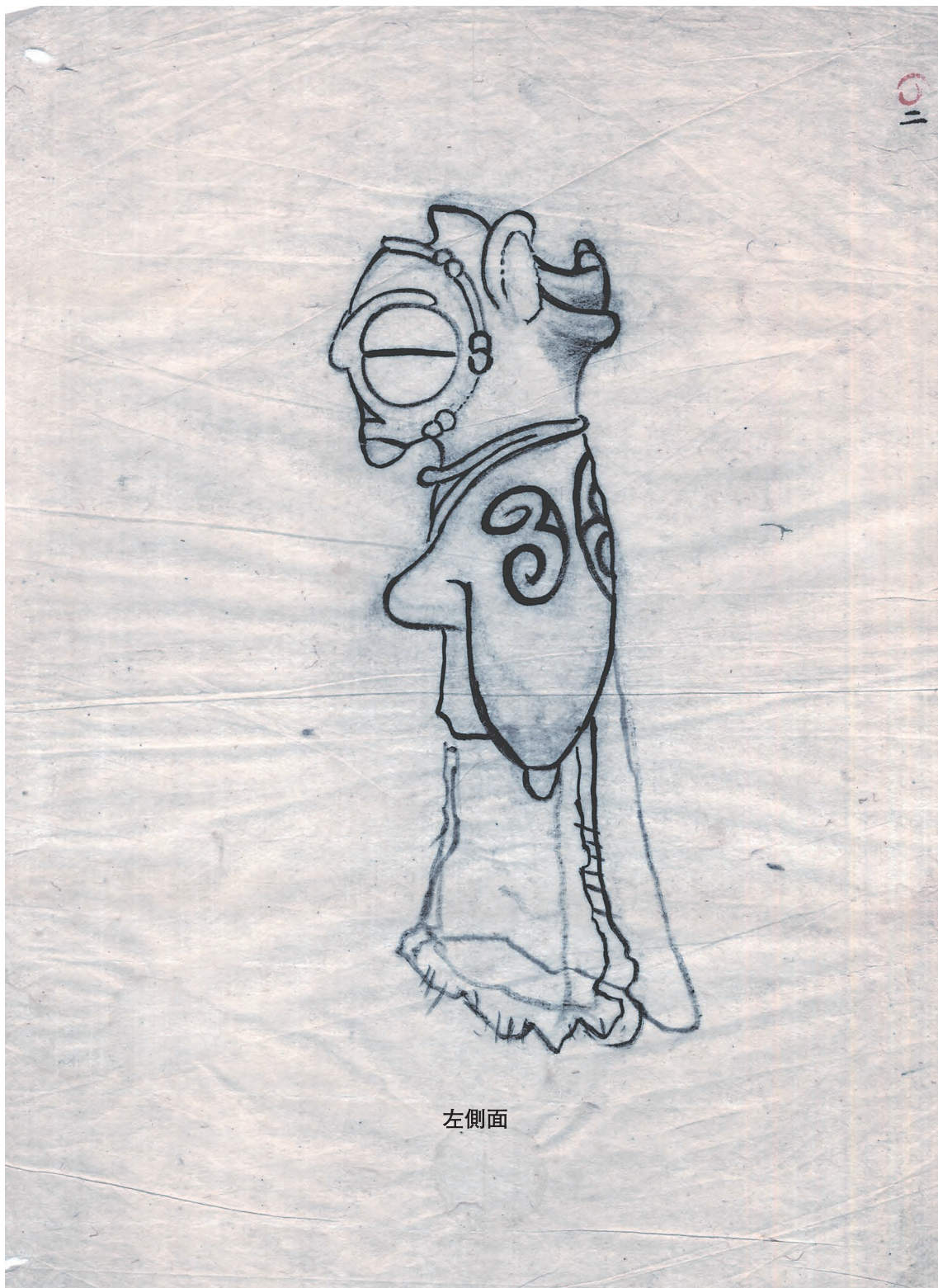


e 正面





30A



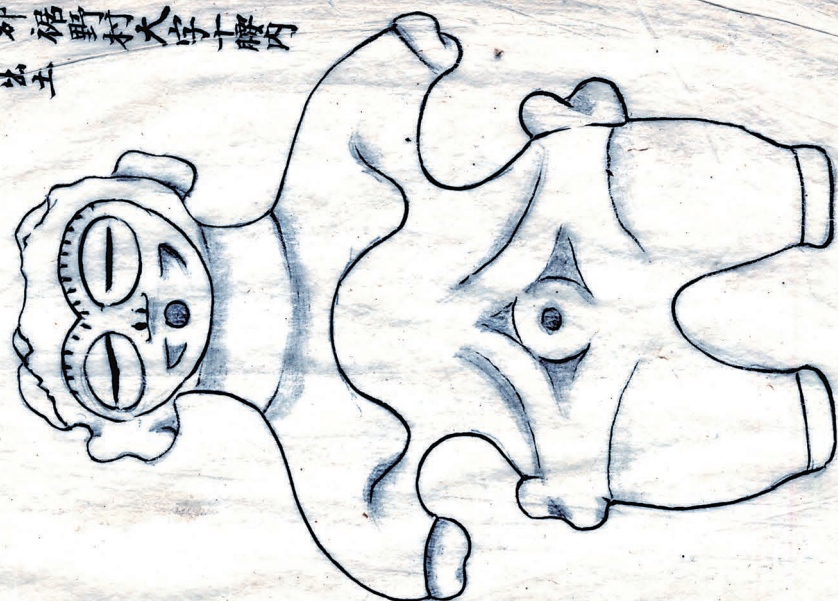
左側面

30B

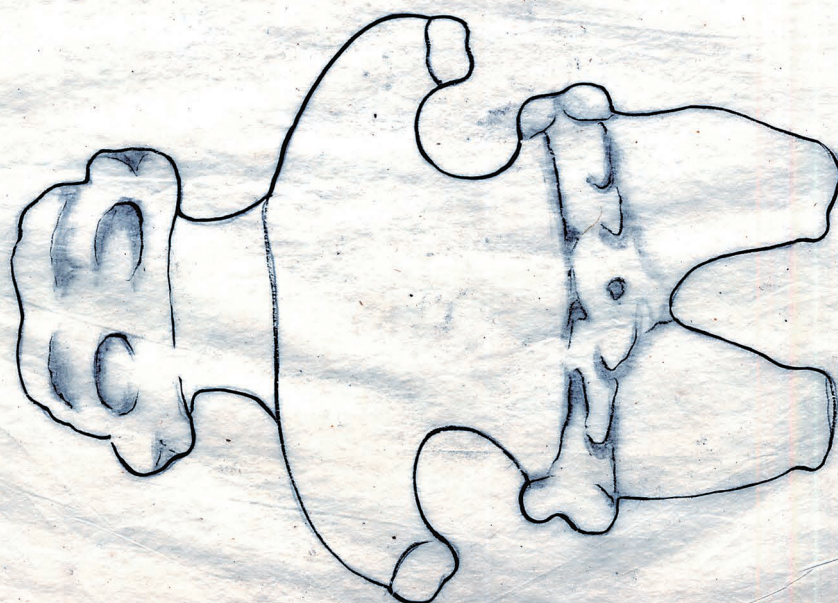


30C

中澤縣郡裾野村大字下腰内
字太平出土

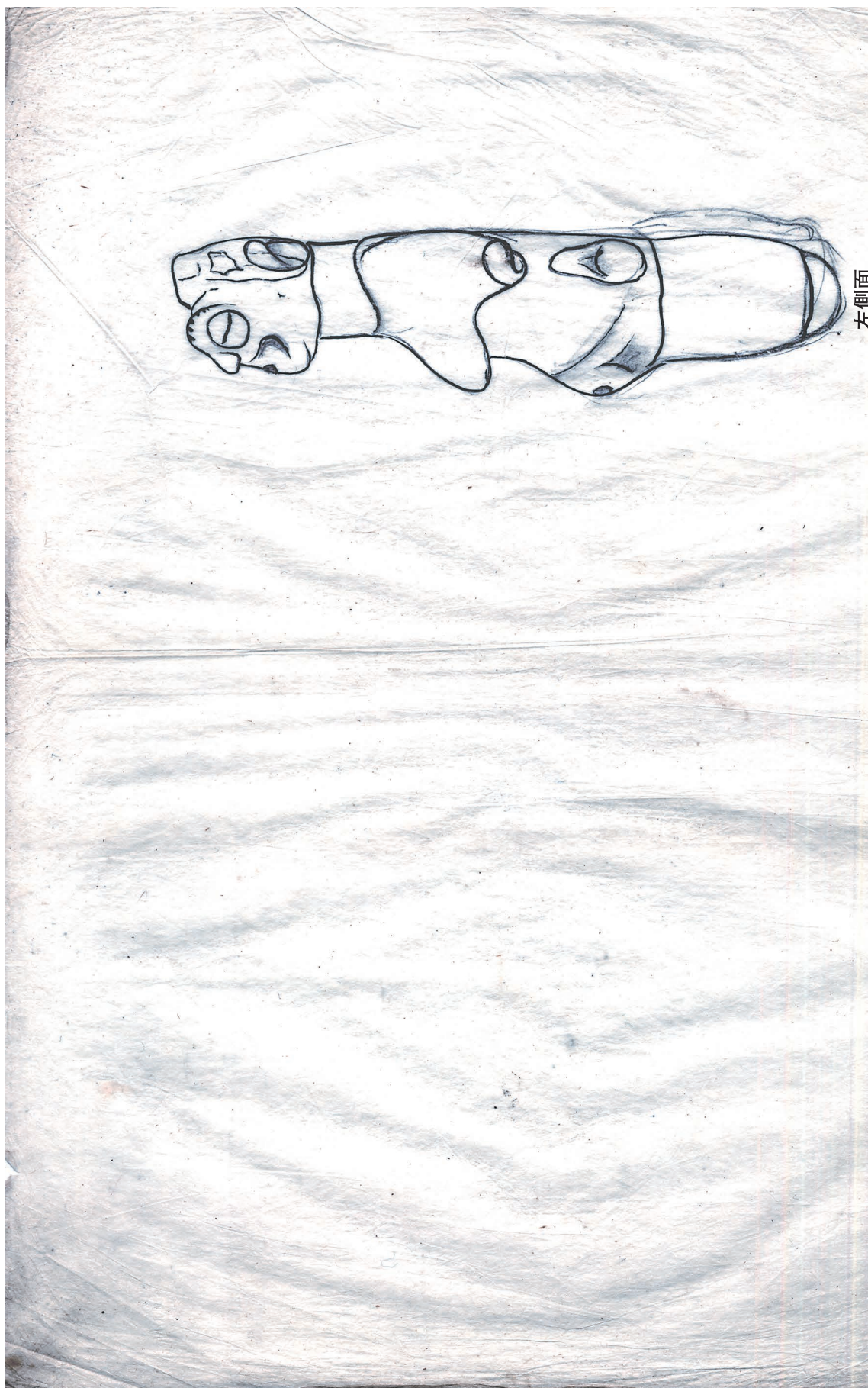


正面



背面

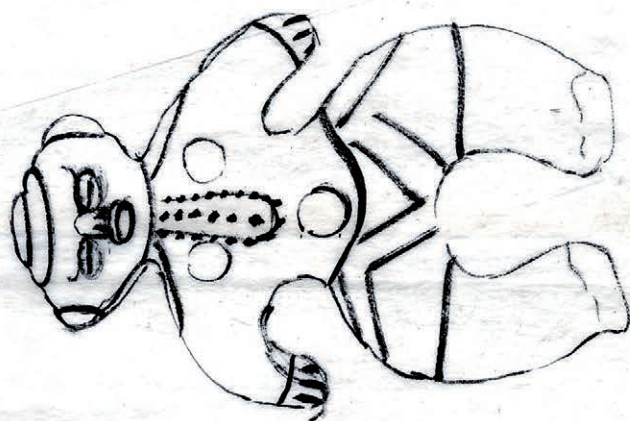
31A



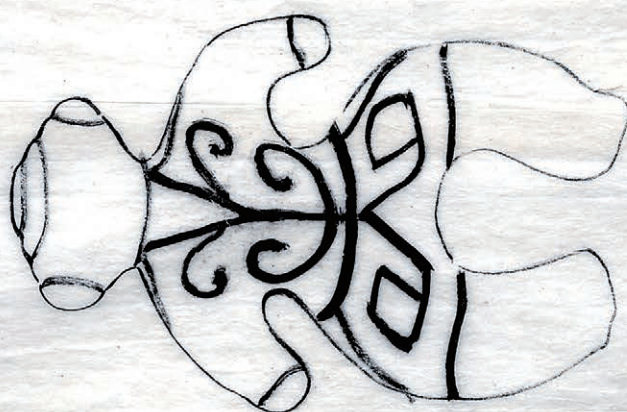
31B

中津輕郡

明治三十四年十月三日号



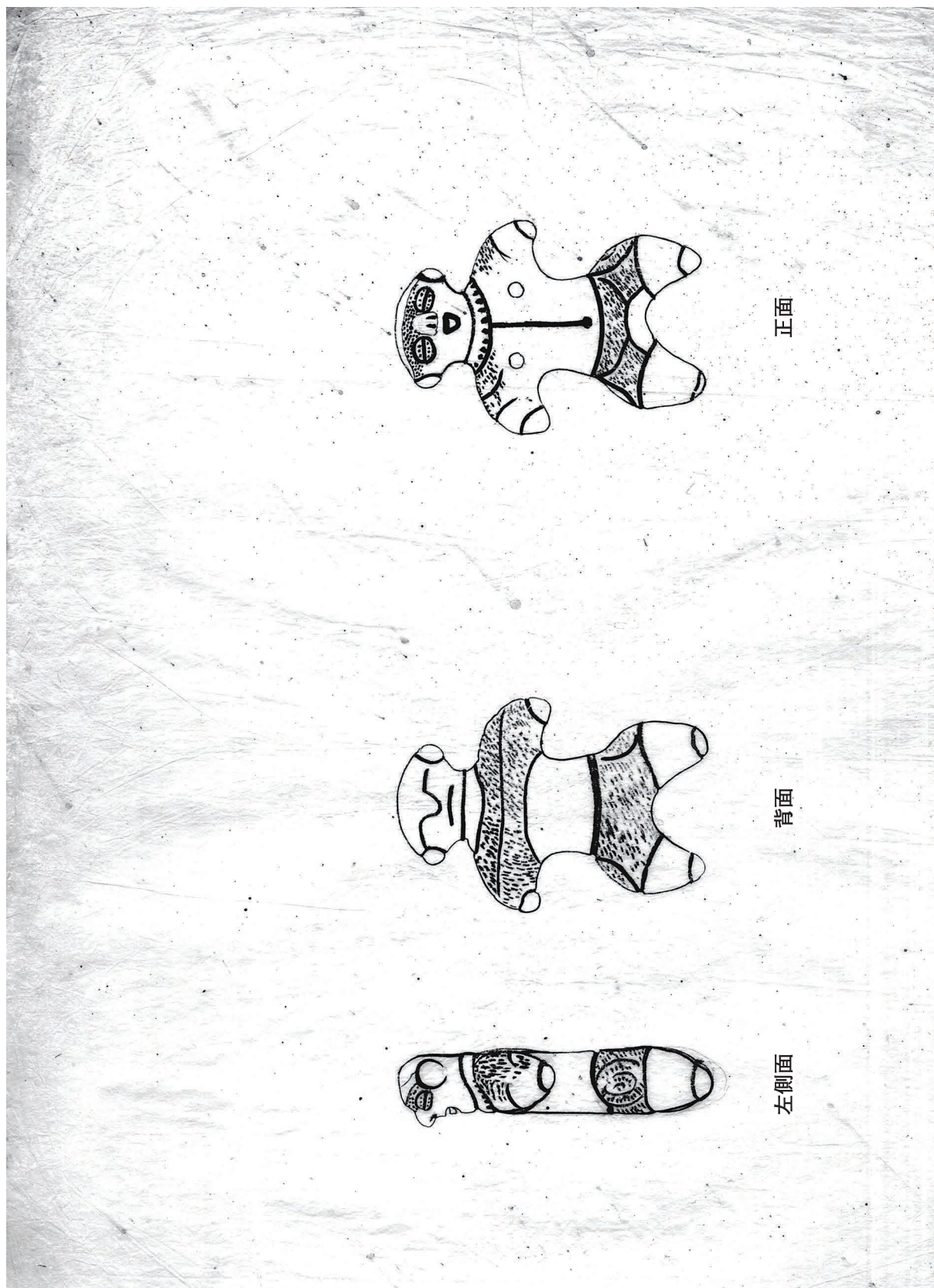
正面

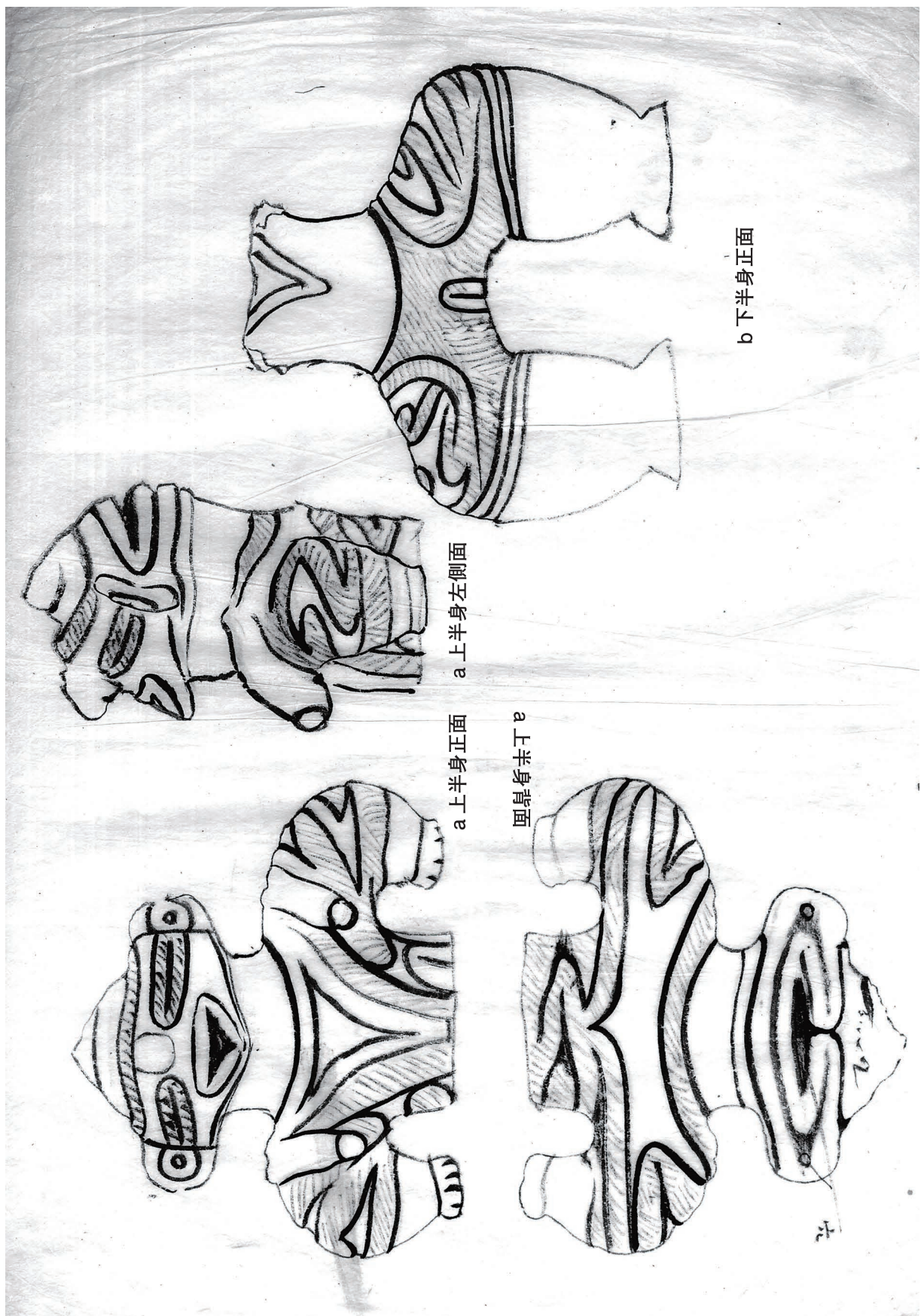


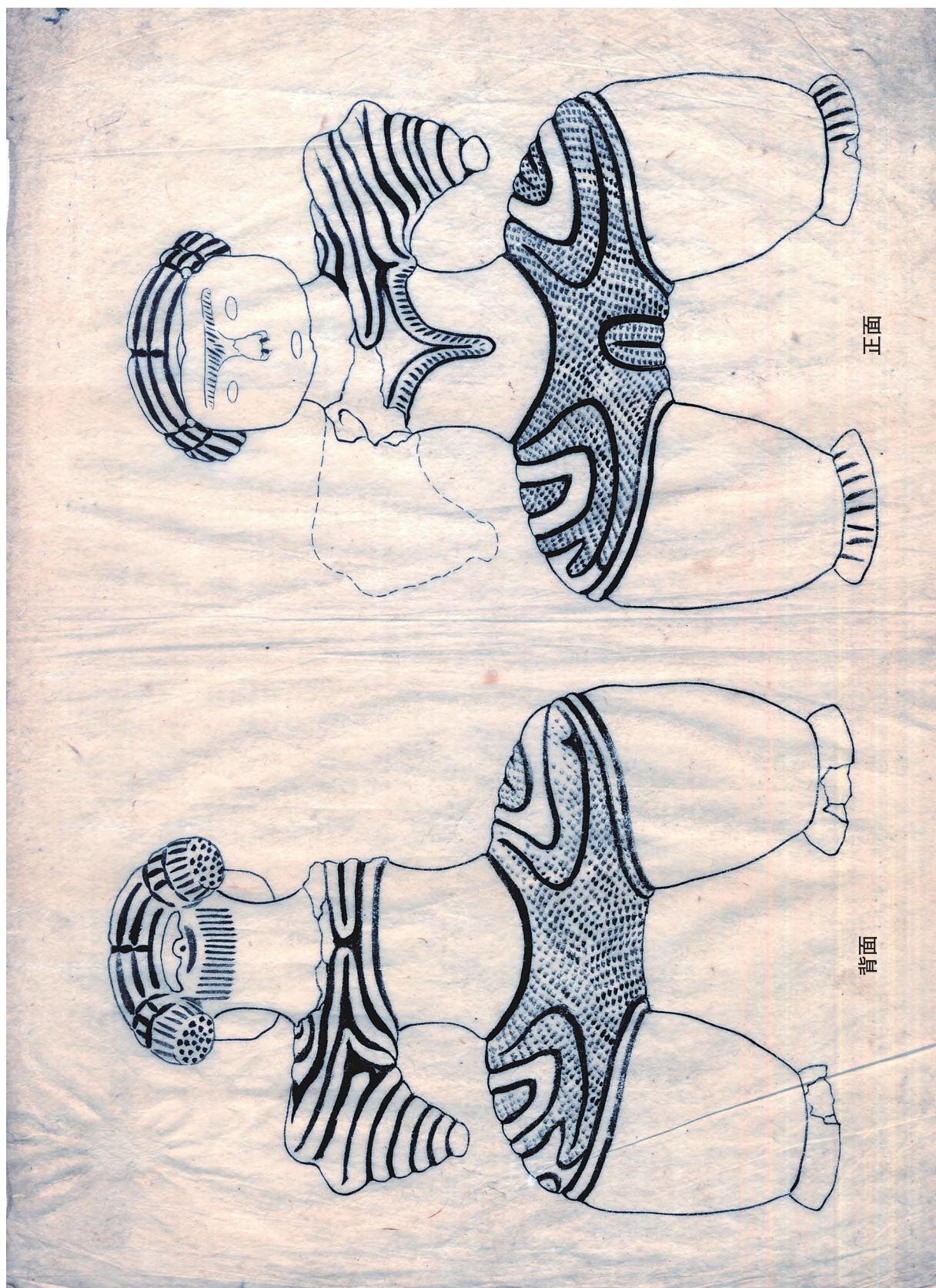
背面



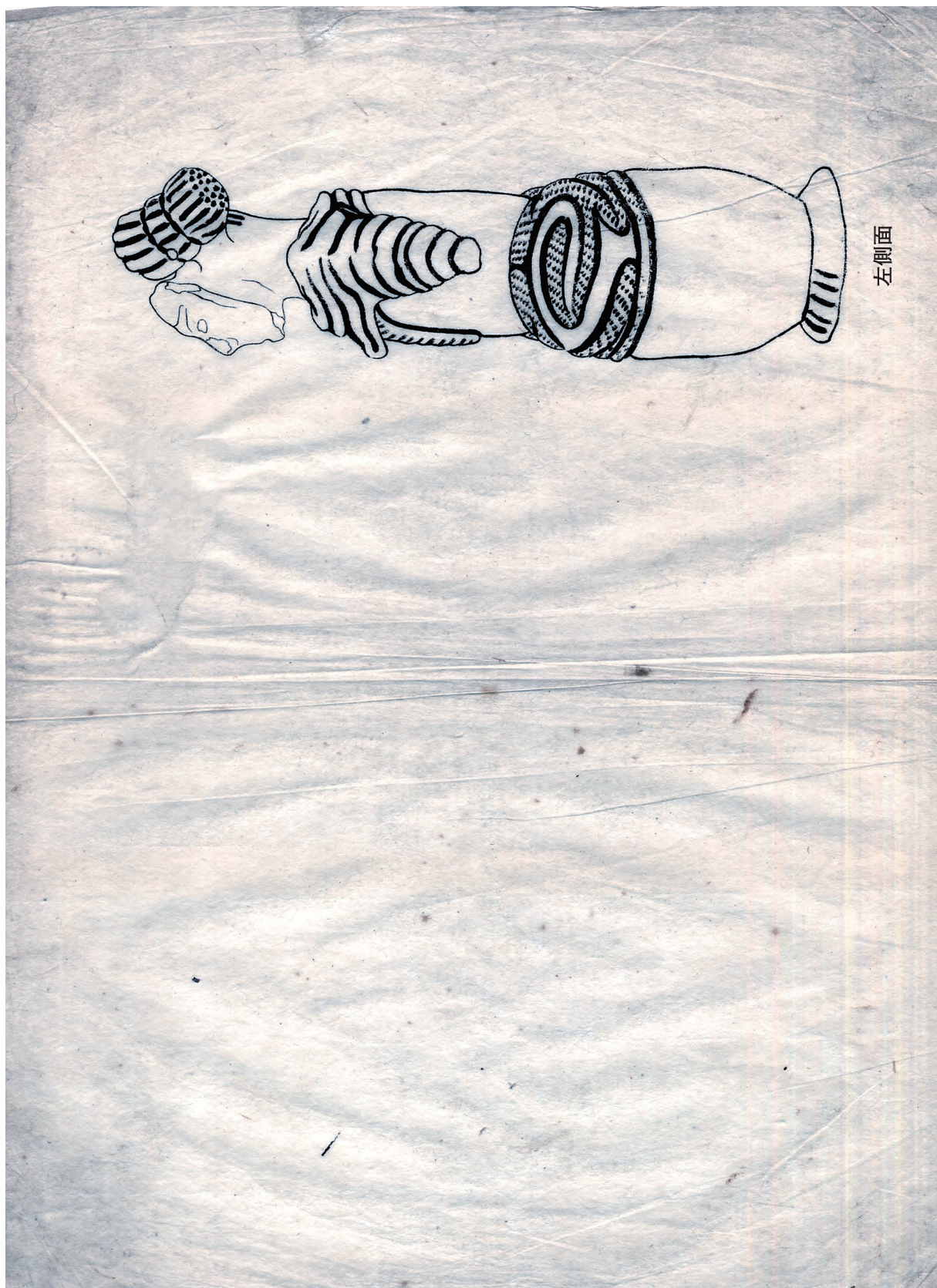
左側面



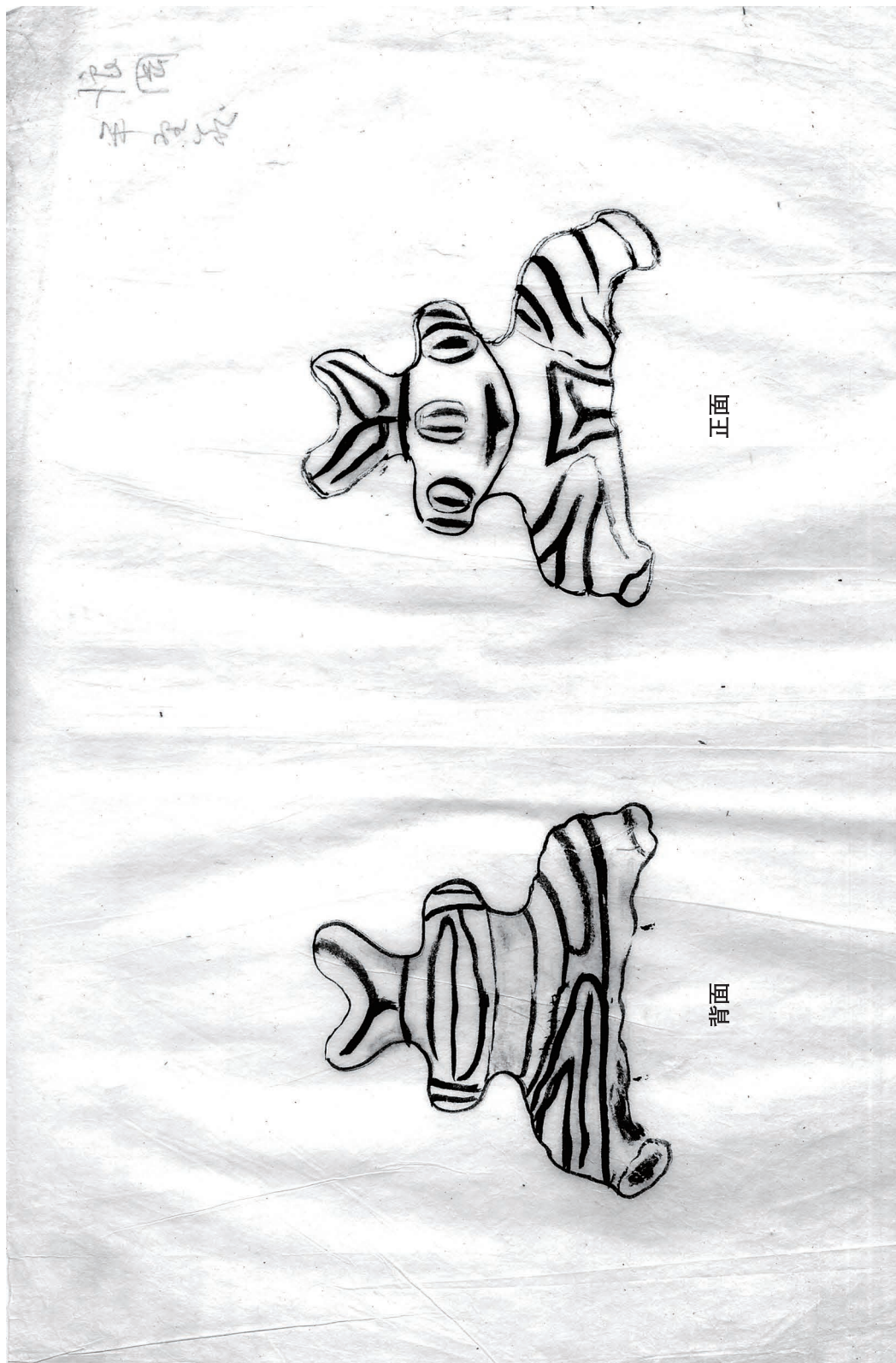




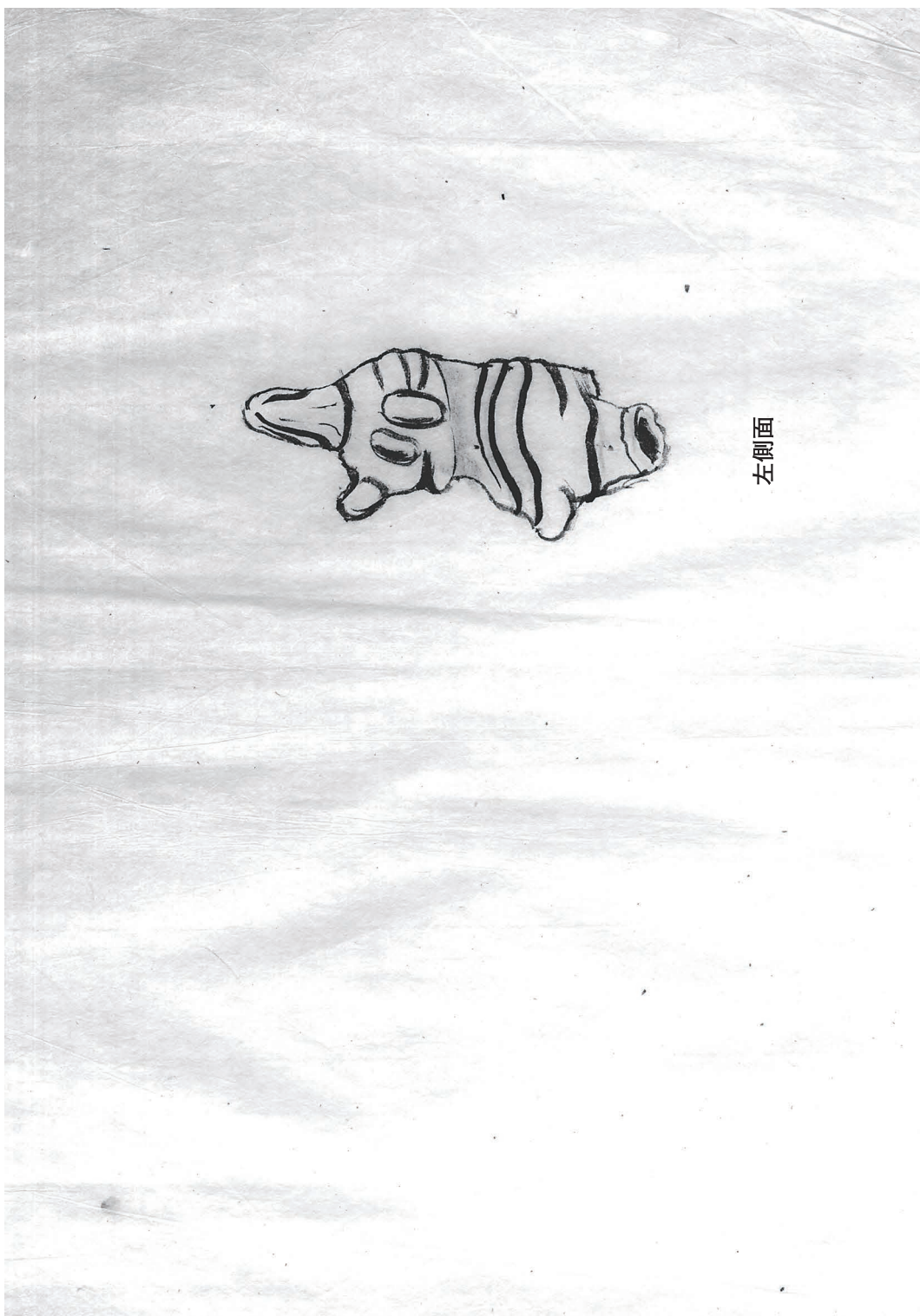
35A



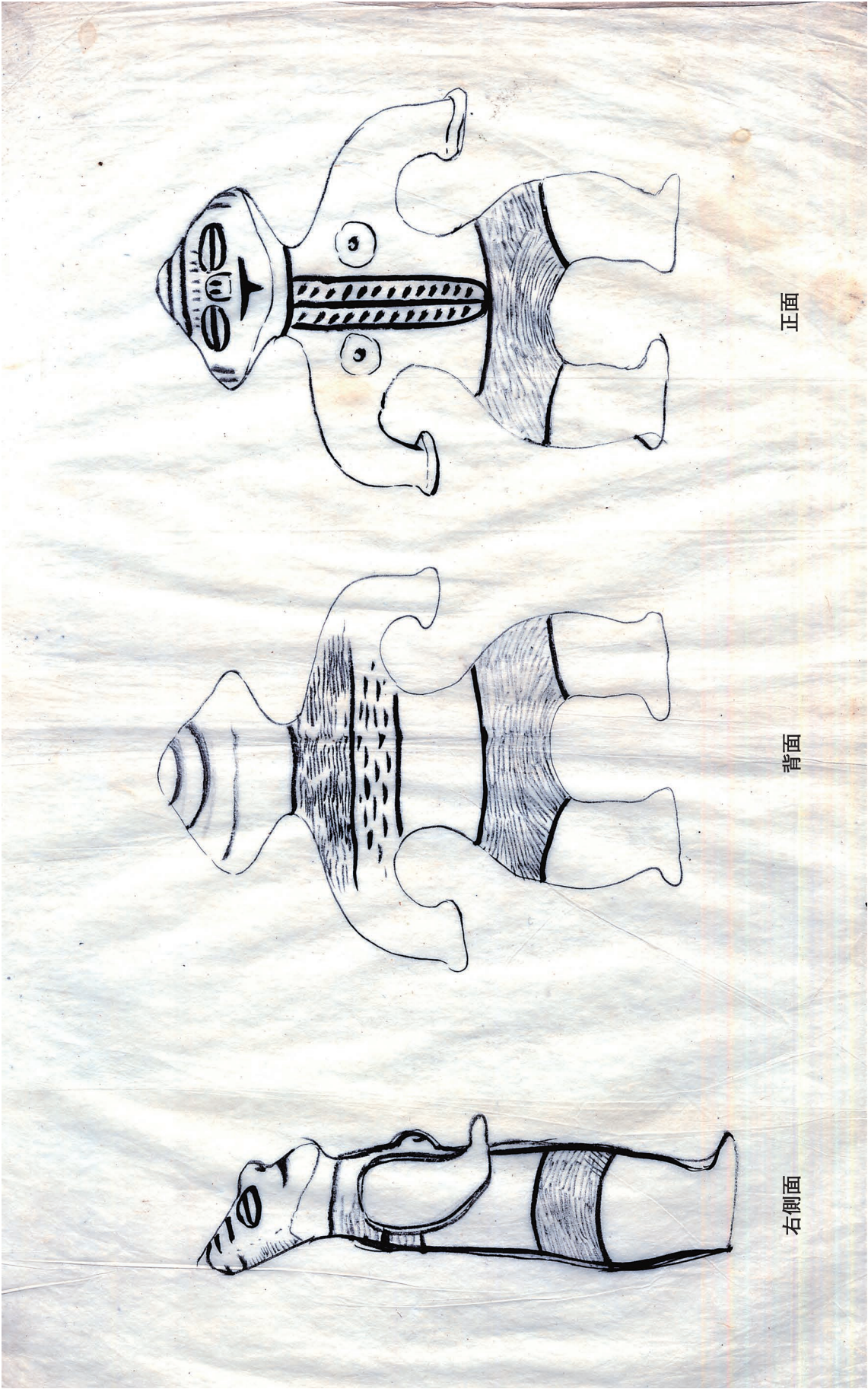
35B



36A



36B



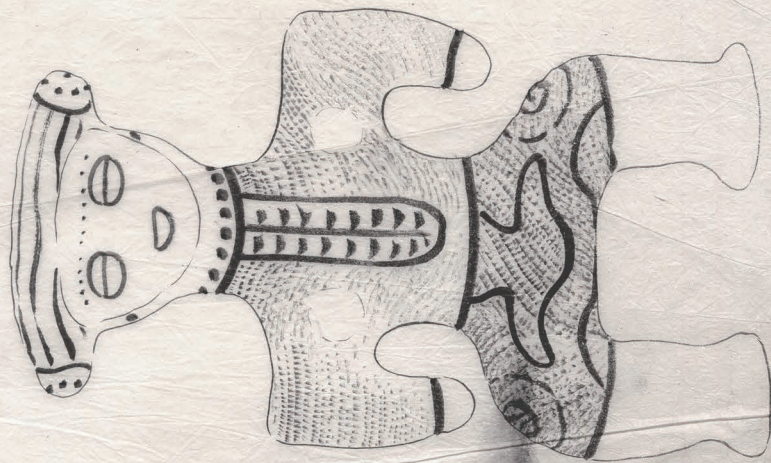
正面

背面

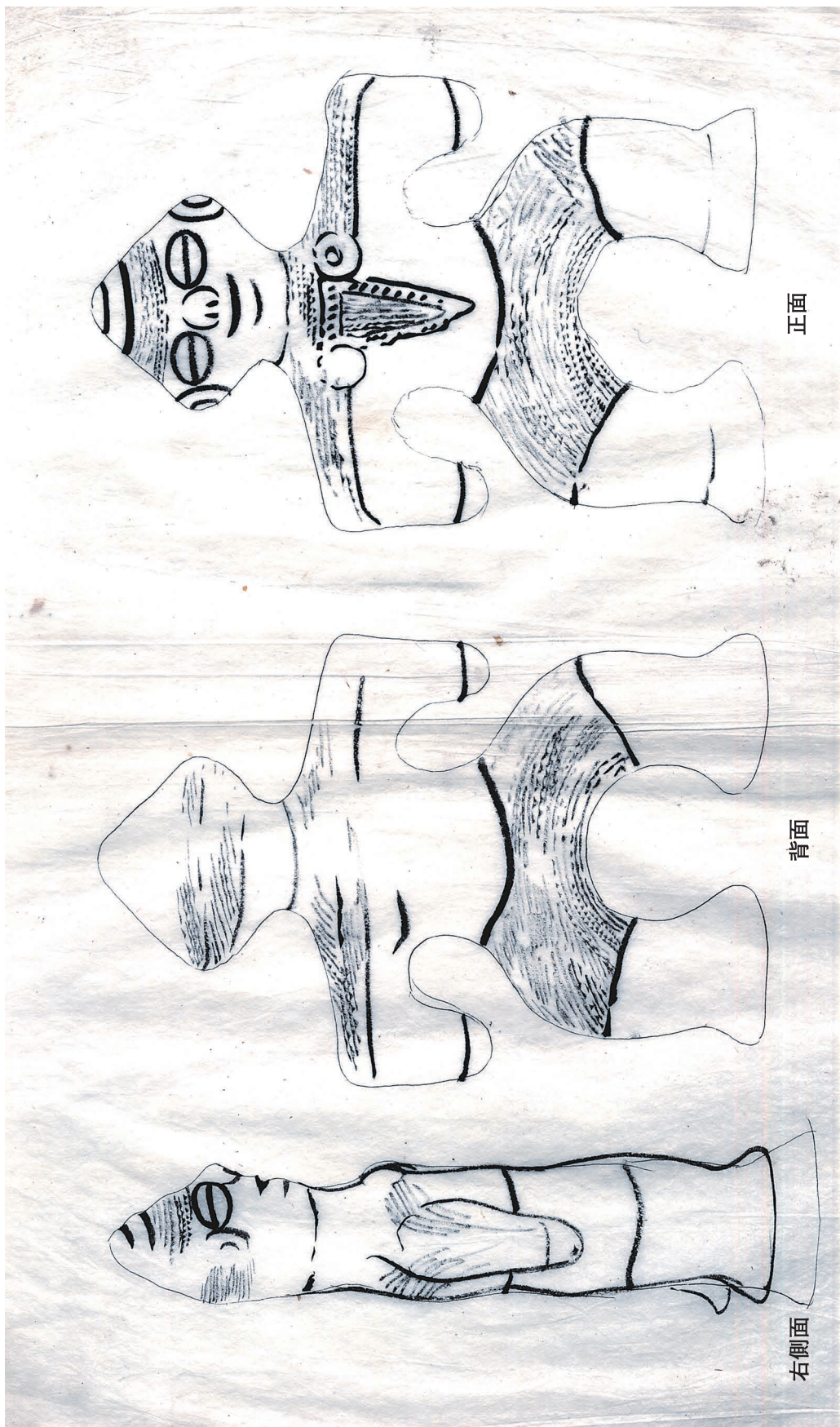
右側面

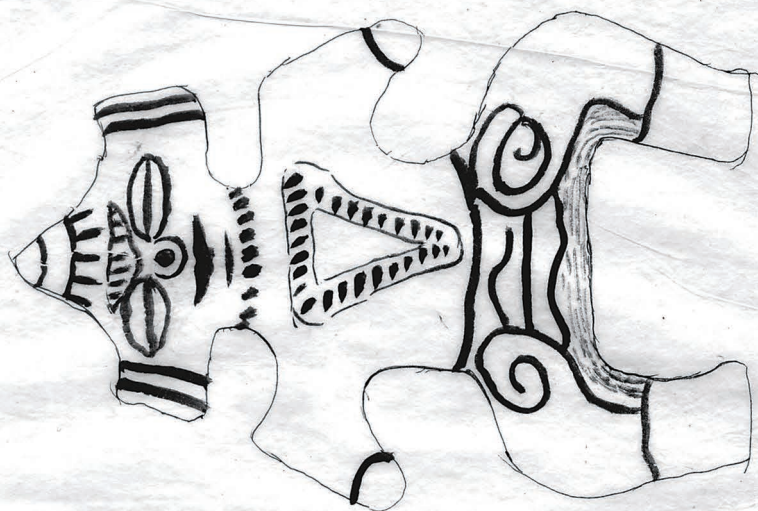
中場經新 裙舞付 大士 + 腰尺字猿皮、付堀

面付利文 田鳴尺付 大士 建五

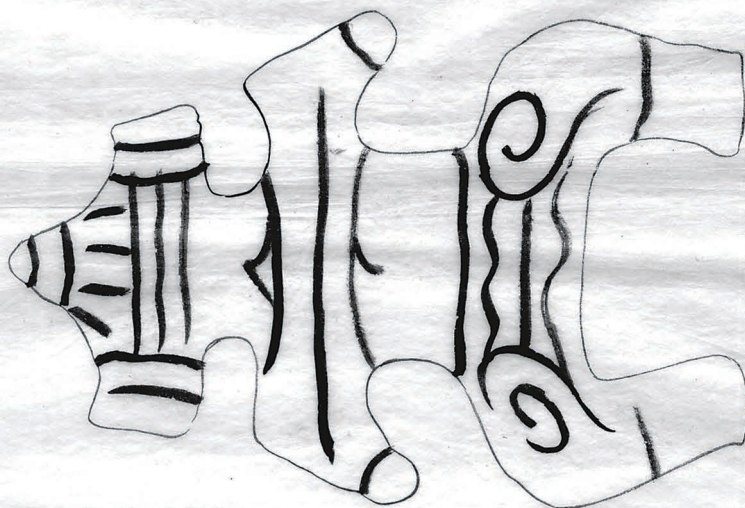


正面





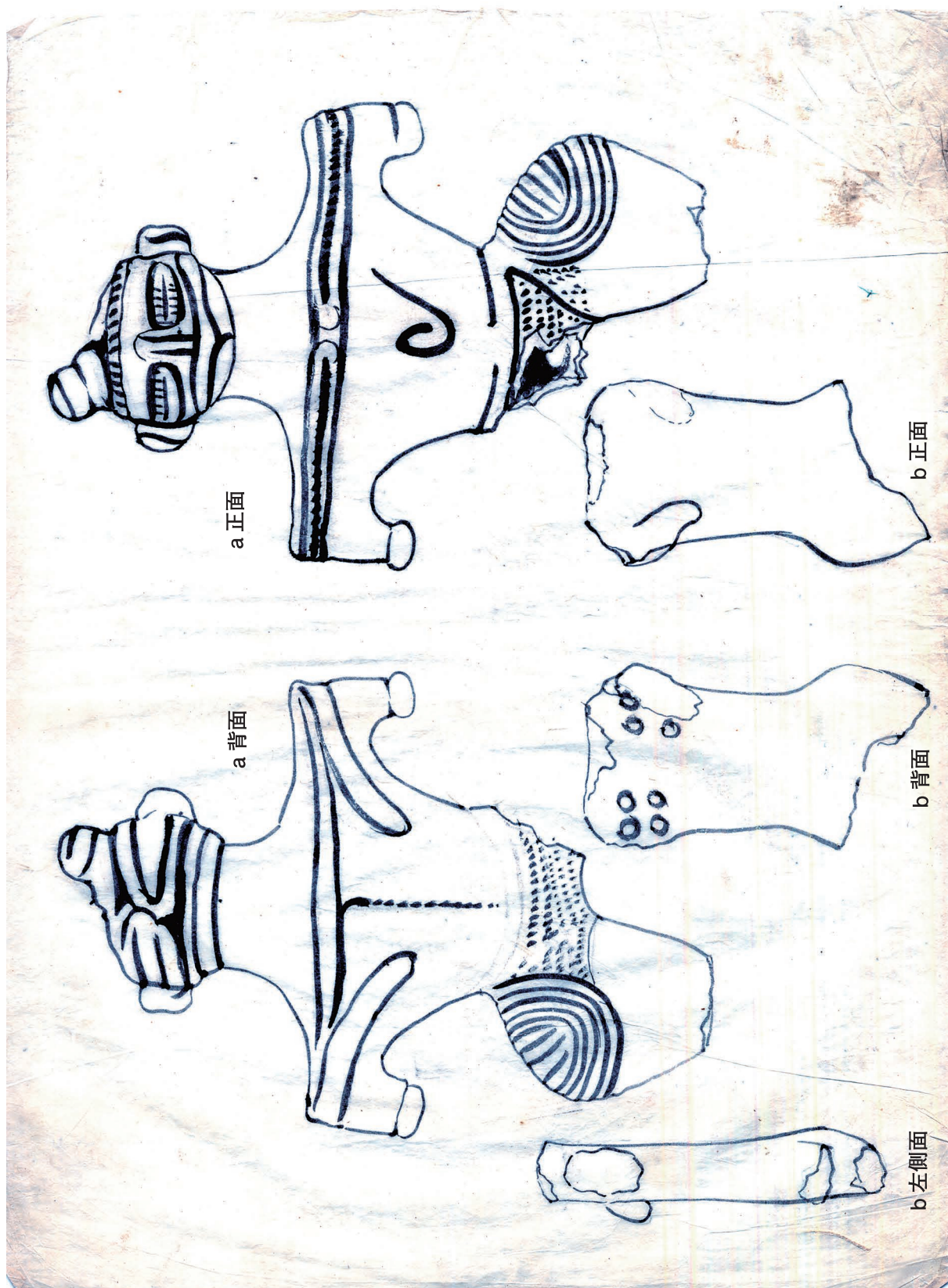
正面

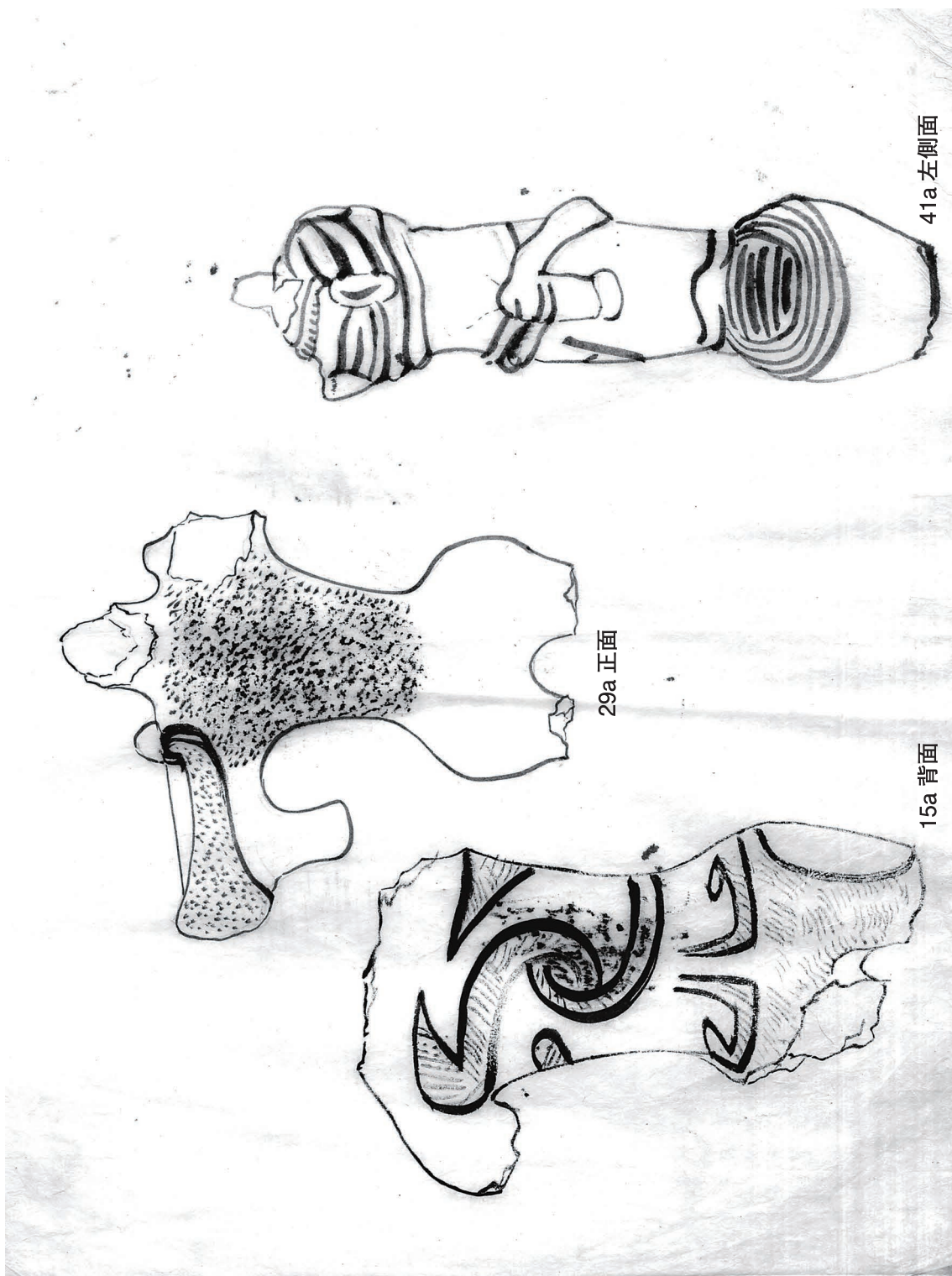


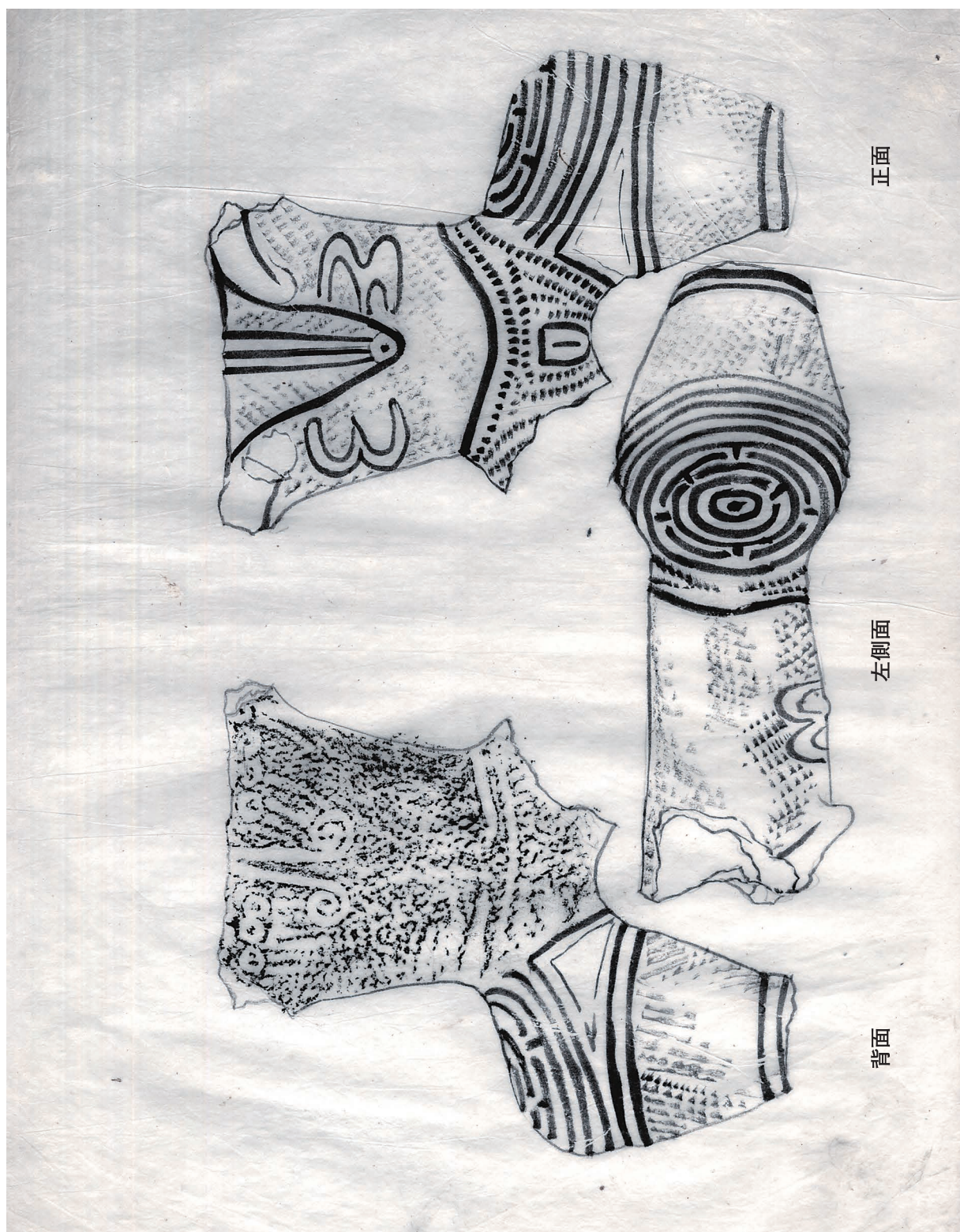
背面

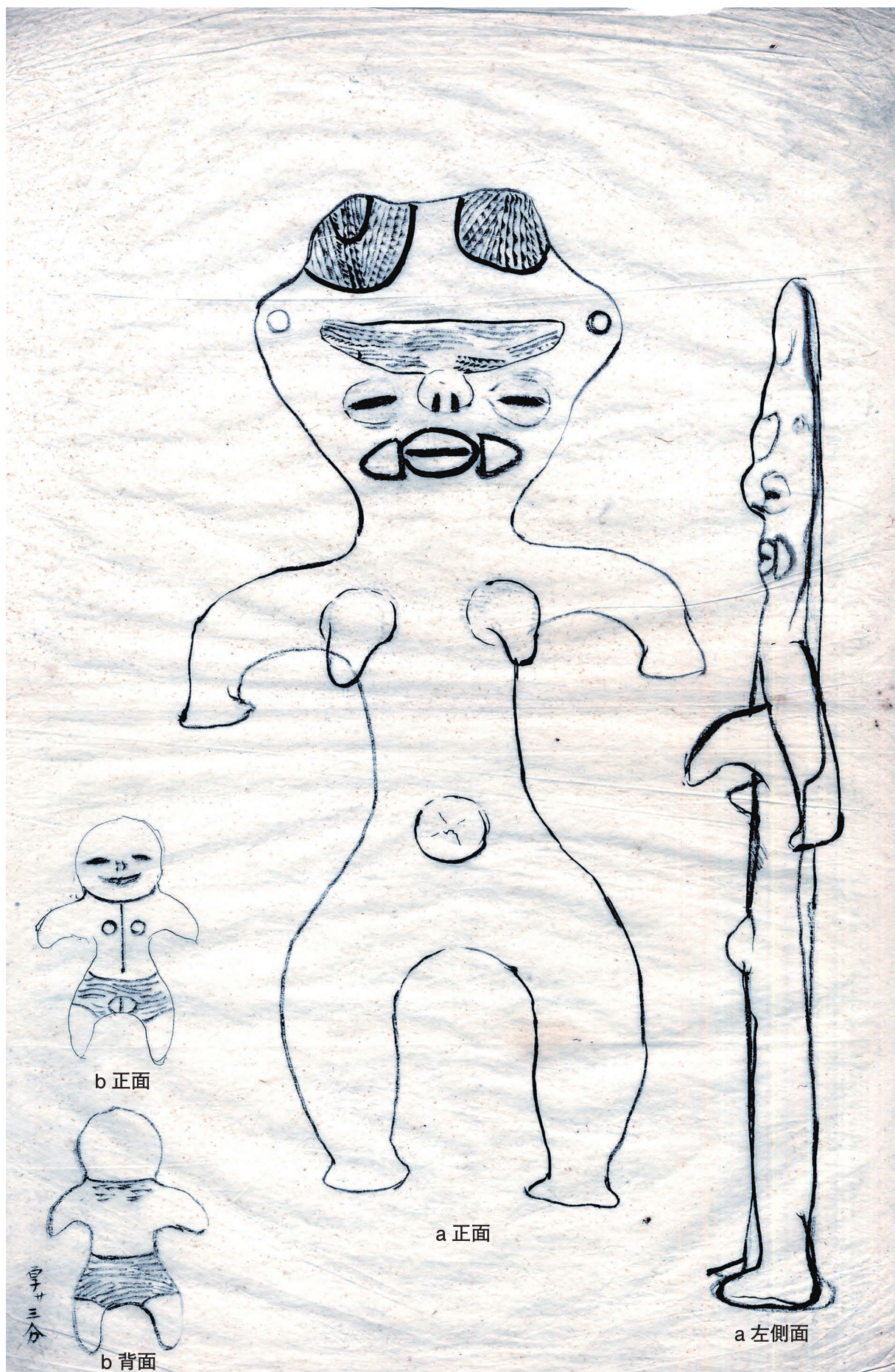


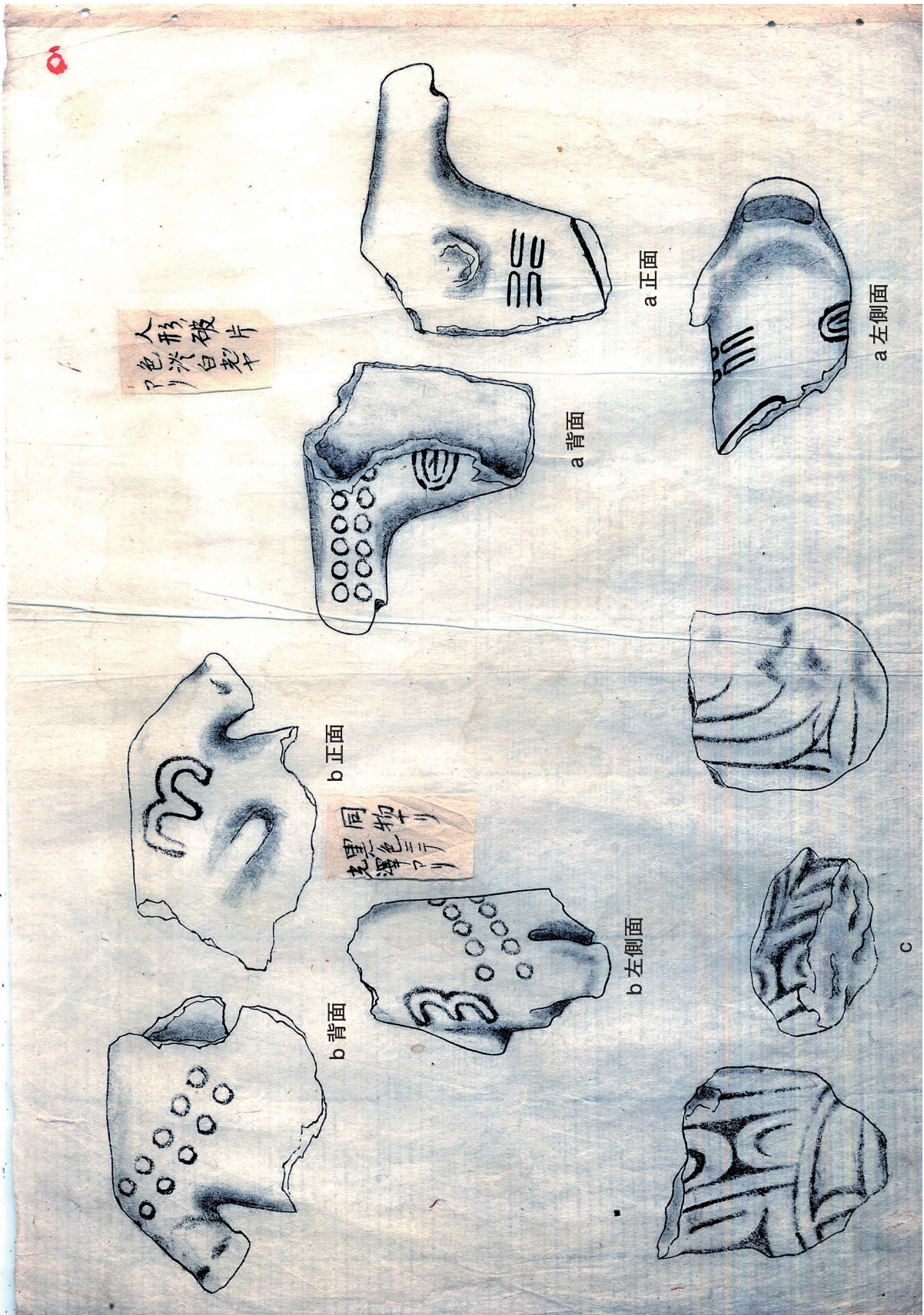
左側面





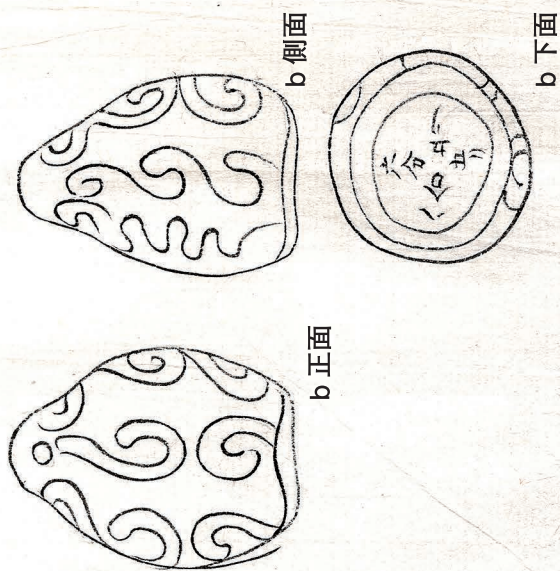
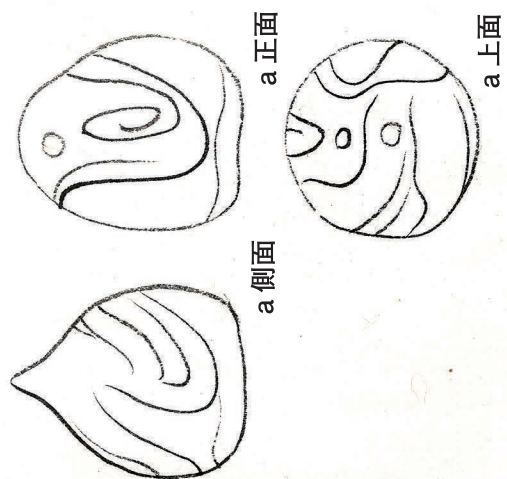


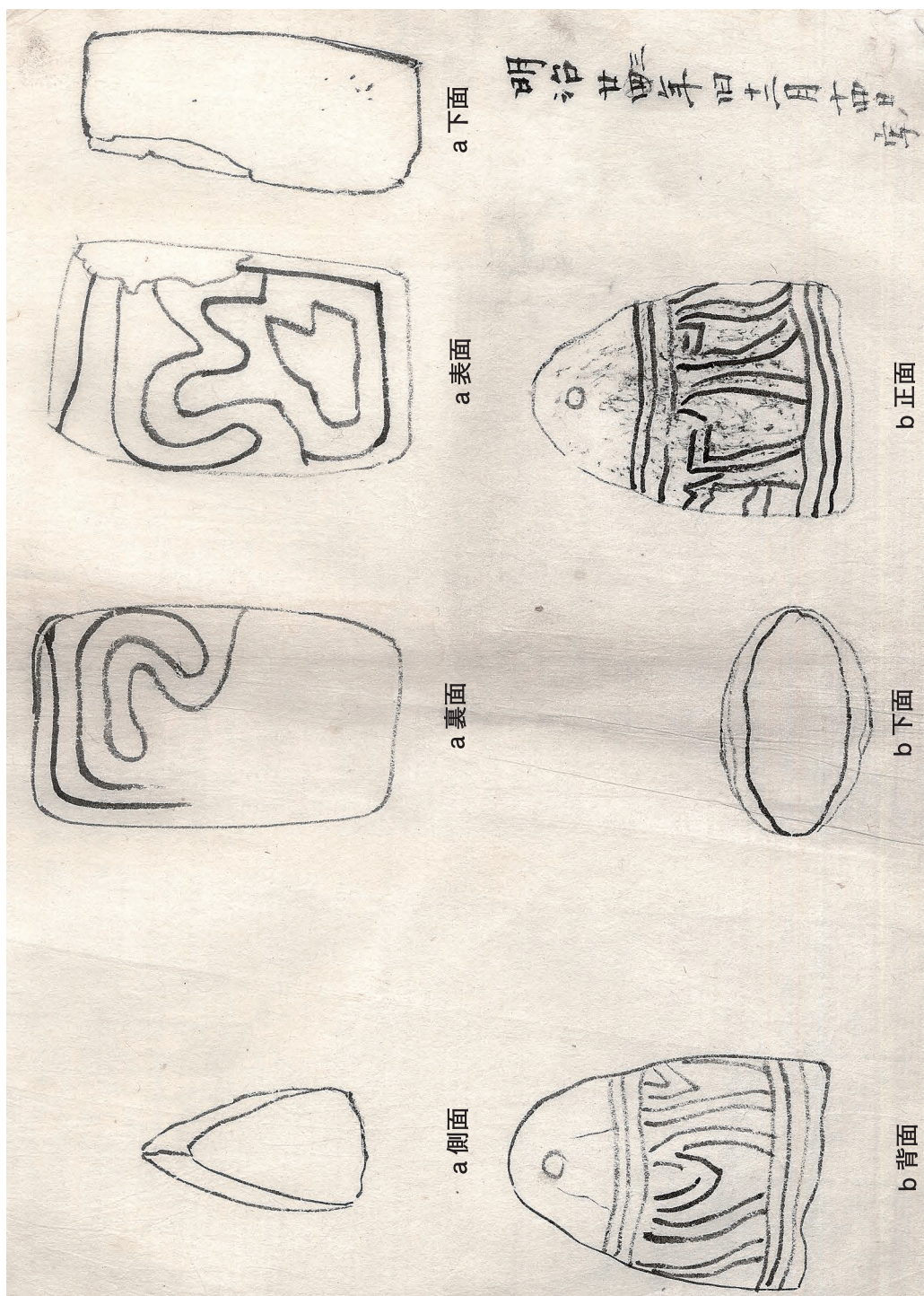


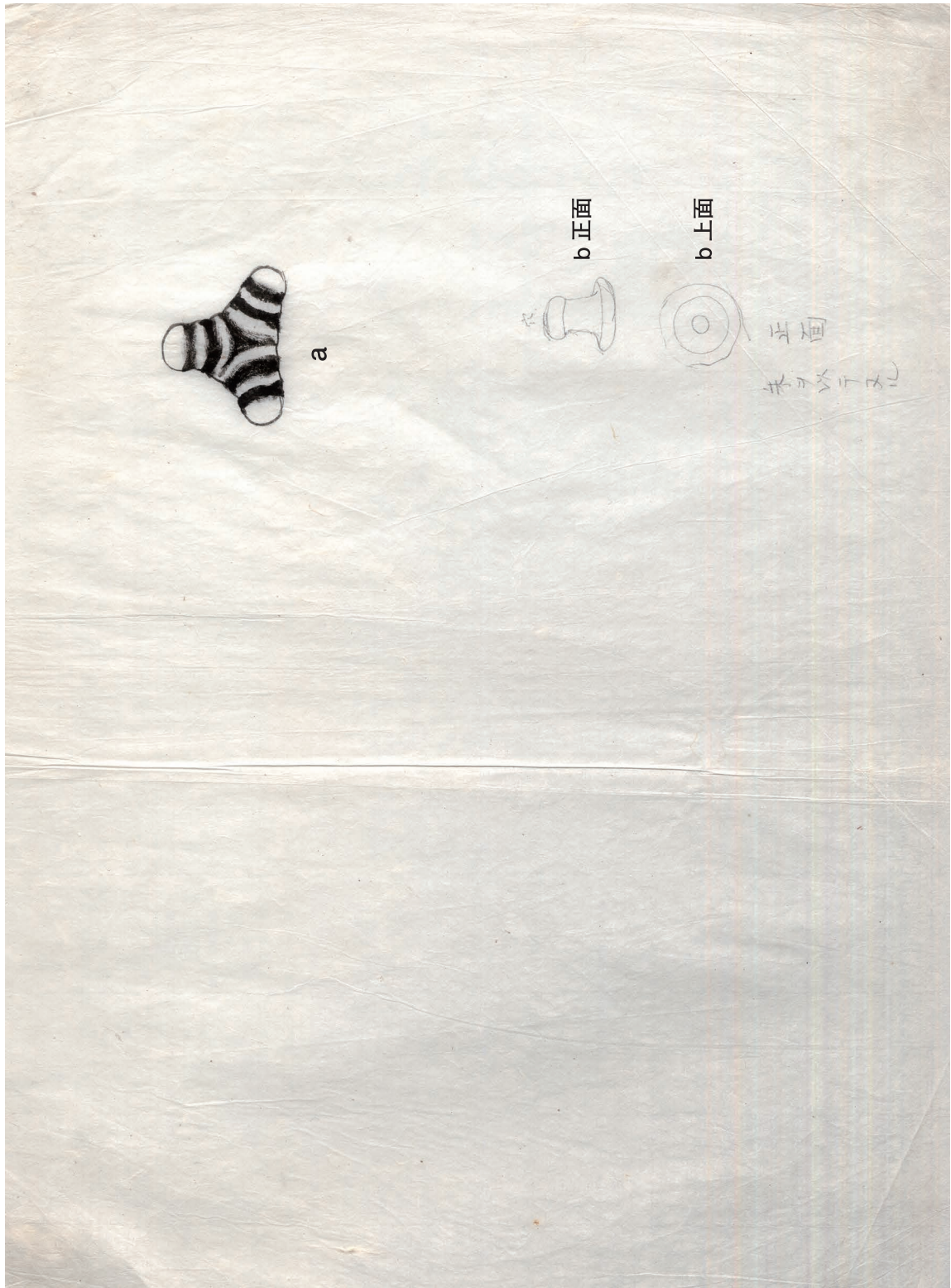


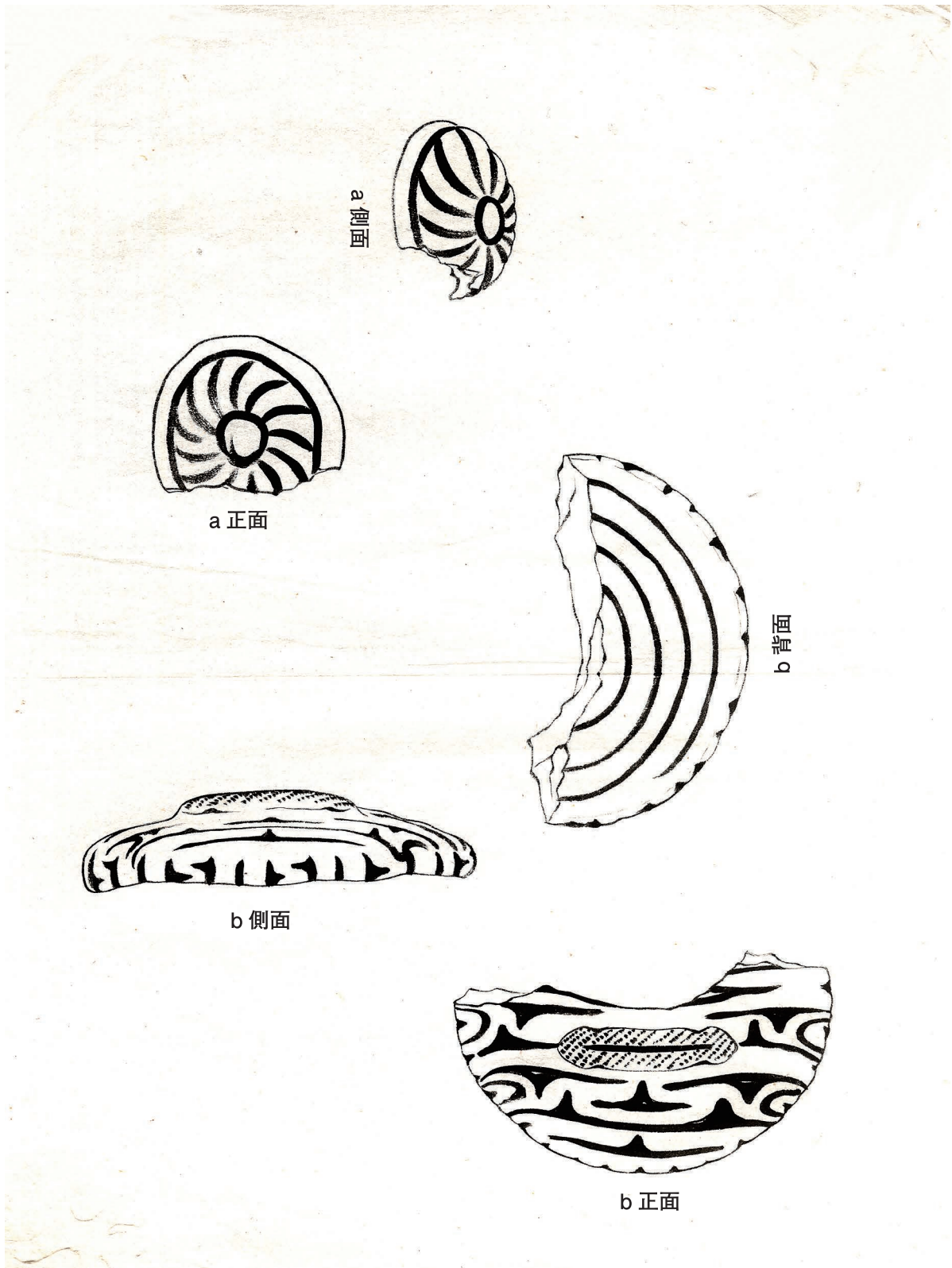
浪岡村 字 館 山

九月一日 寺







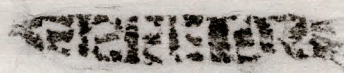


棟方氏藏

土板



表面



側面



裏面

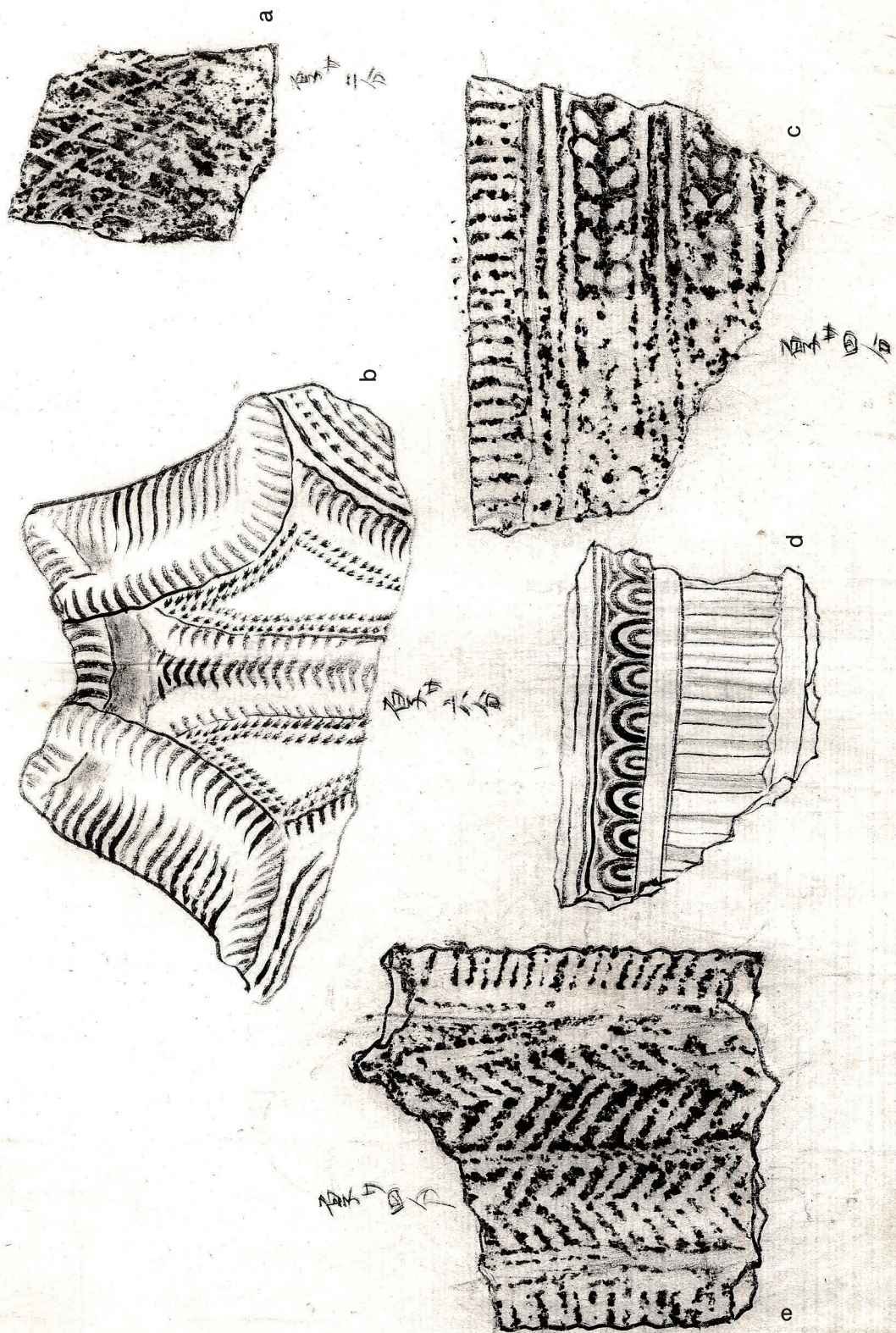


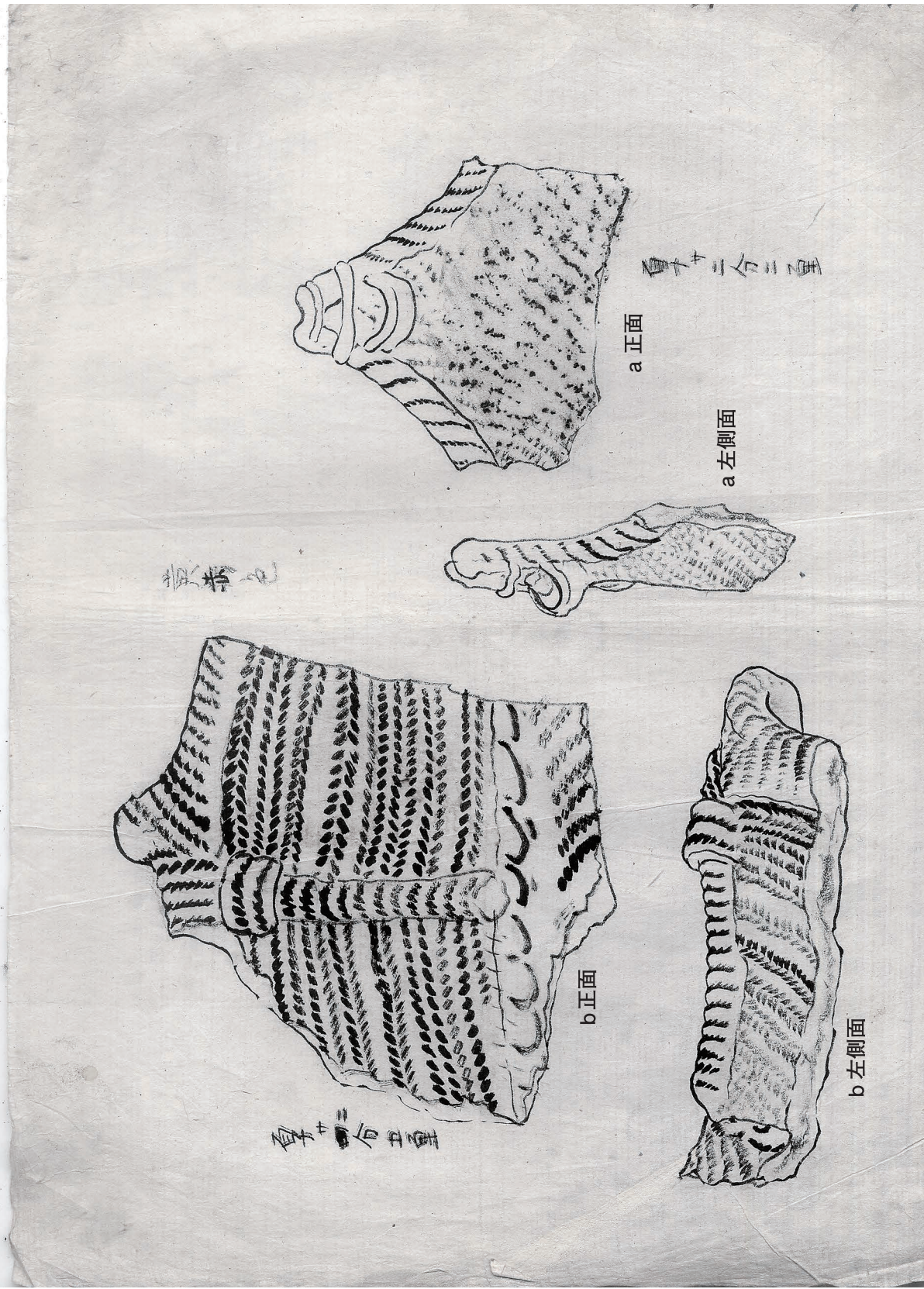
側面

笠森清定氏藏

4/24日
4/25日

明治廿六年四月久慈道開鑿之際
三戸郡大館村大字十市字登リ坂
ニ於テ掘リ取ル

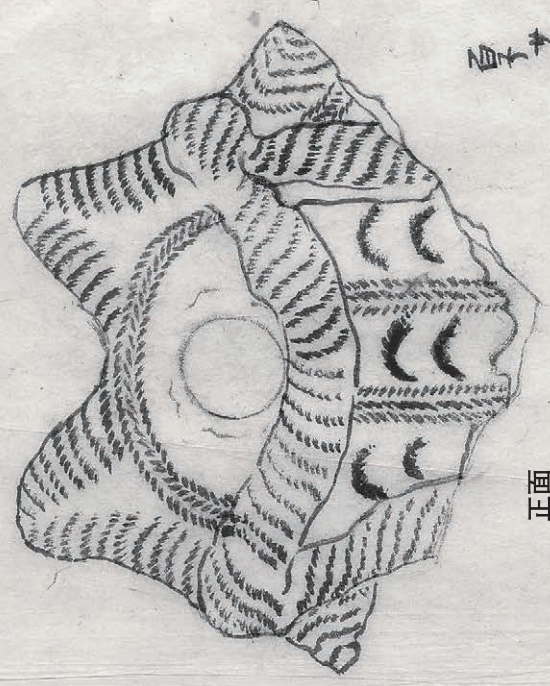






三 内

厚子七令



正面



左側面

高杉利
加茂神社の祠宝物 藤氏の蔵あり



厚さ四合

正面

瓶罍の破さ
耳の圖あり
色黄土砂
木一ヤ
光潤あり



欠損

厚さ六合

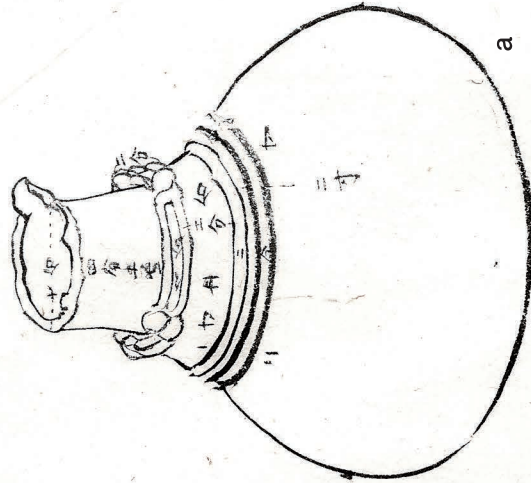
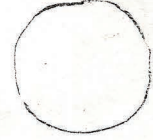
裏

庚辰旧五月廿九日寫

明治十九年

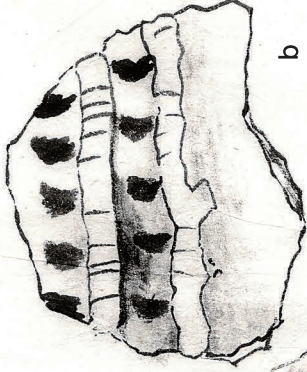
十月廿一日

高四寸七分



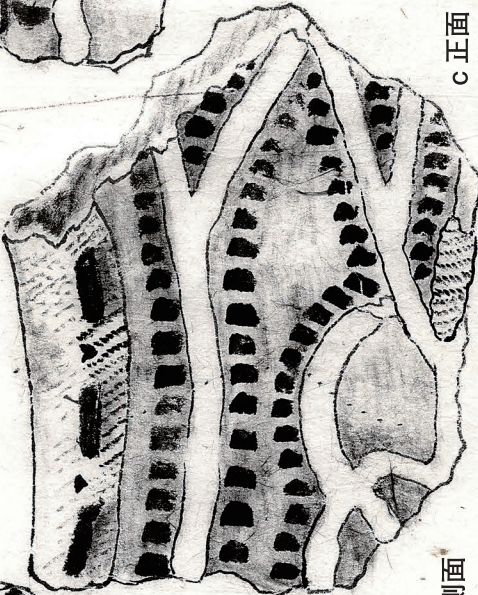
a

淡白 厚子二分五厘



b

c 正面



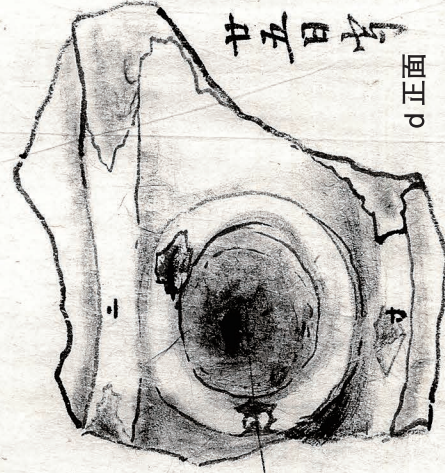
c 側面



厚子四分五厘

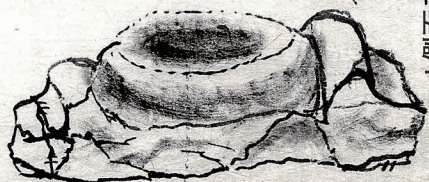
廿五日

d 正面

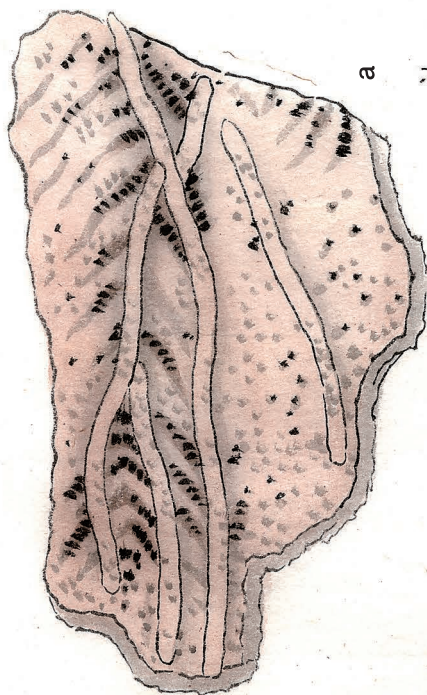


厚子五分

d 側面



厚子一分



物おれの女六字文あり
ちと好して何とるものあり
余と似文と

濃 風 日

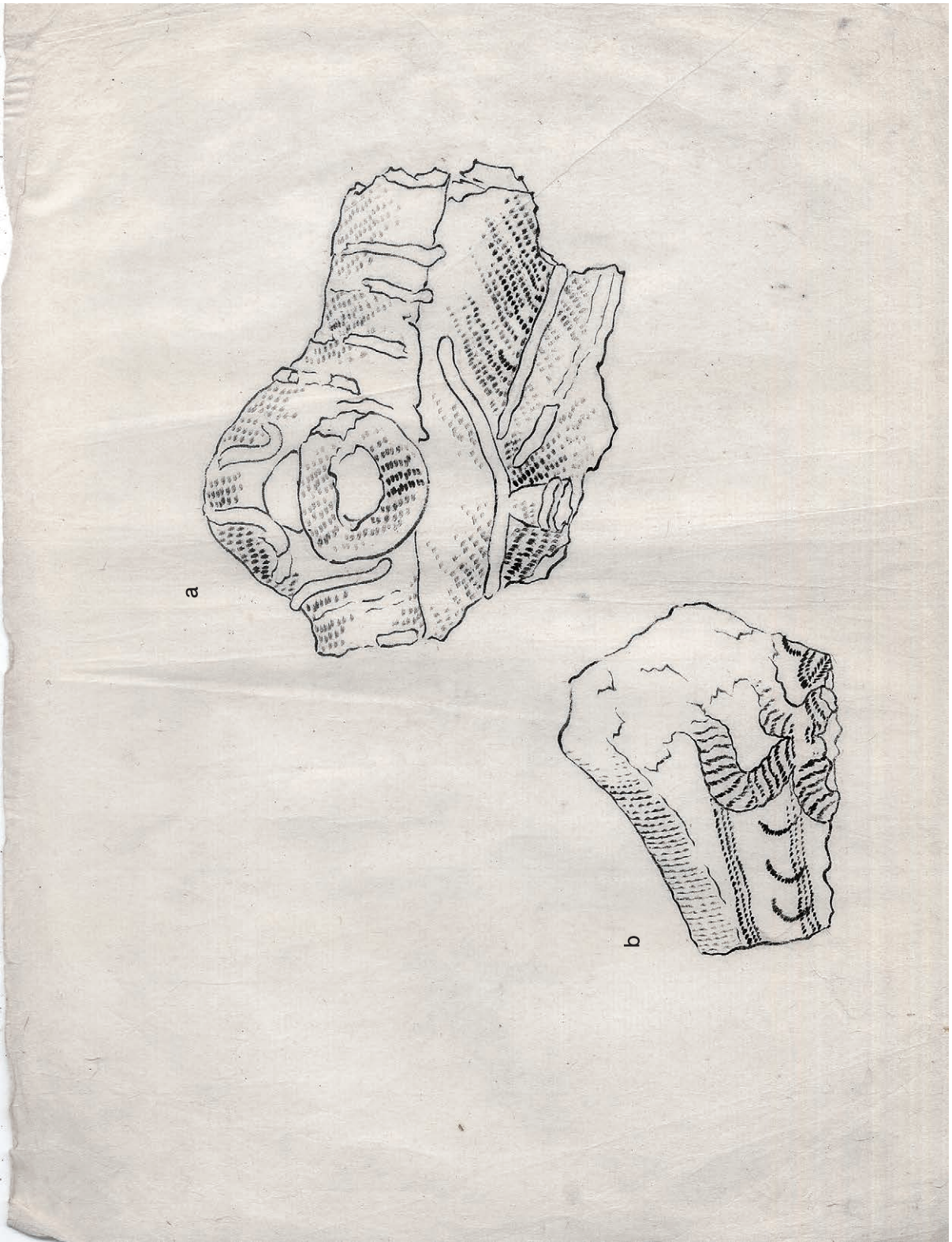
如也
此
此
此

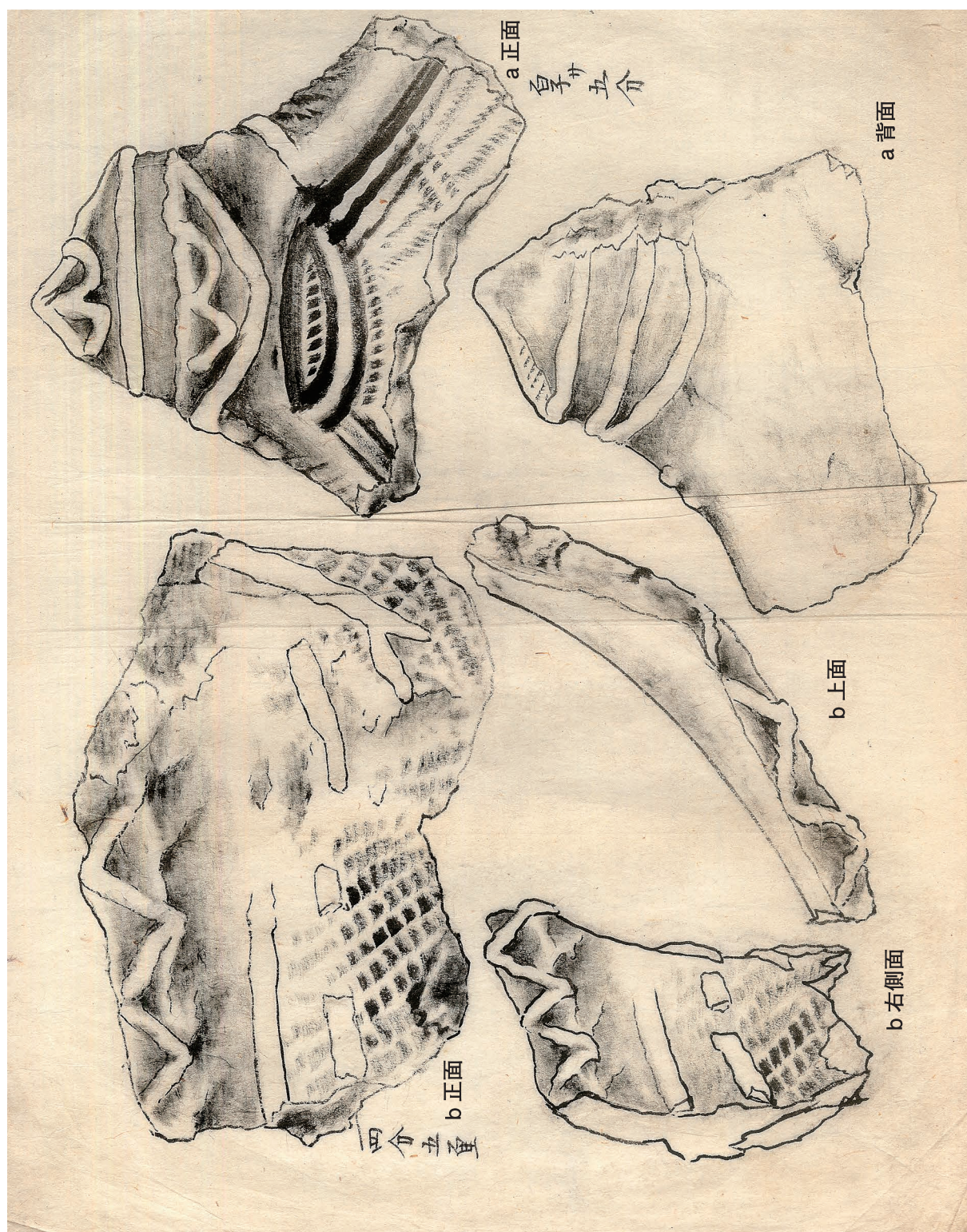


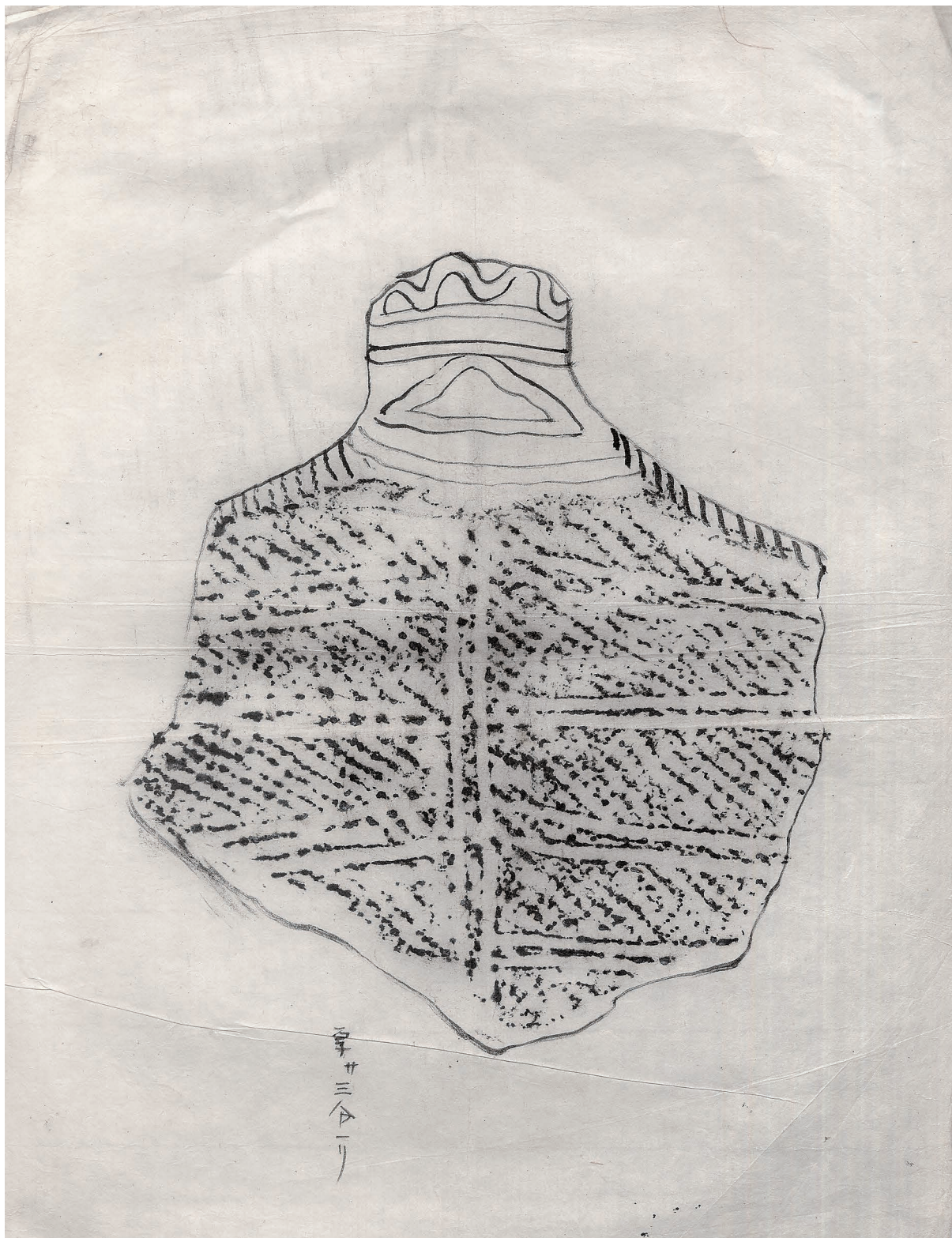
金
子
一
匁
五
分



此瘻の碑ともものそいふ如し
 是より又い知し石隙出る
 石隙はけする石の片粹よりあつてし
 硝子を切るじとせしはあつてし国をあらわし
 これをなせ







獨孤村山畑

より出る

陶器の

碎けこる

もぬき

明治十二

年六月

佐賀仙之岡郷

松平にひくるとて

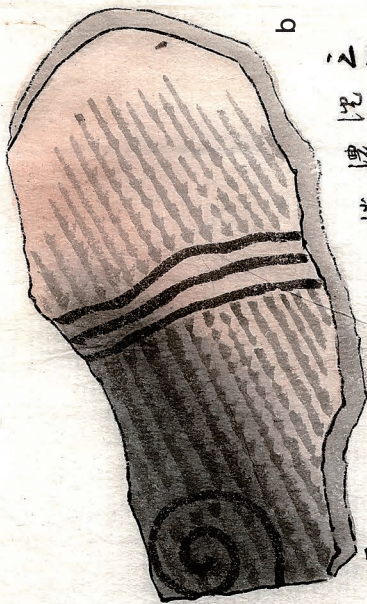
治まわぬき

出てもぬき粗く

文もかへし



a



b

之面より

泥文を

湯屋に漬

け置く

後と建

押付る

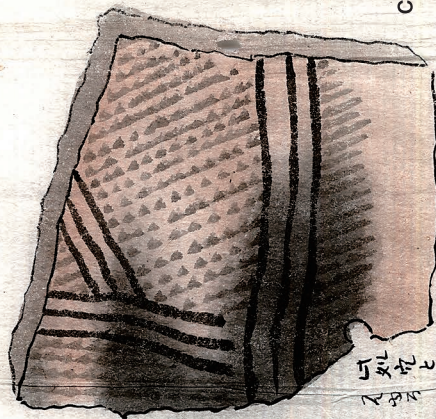
もの

あり

明治十二年

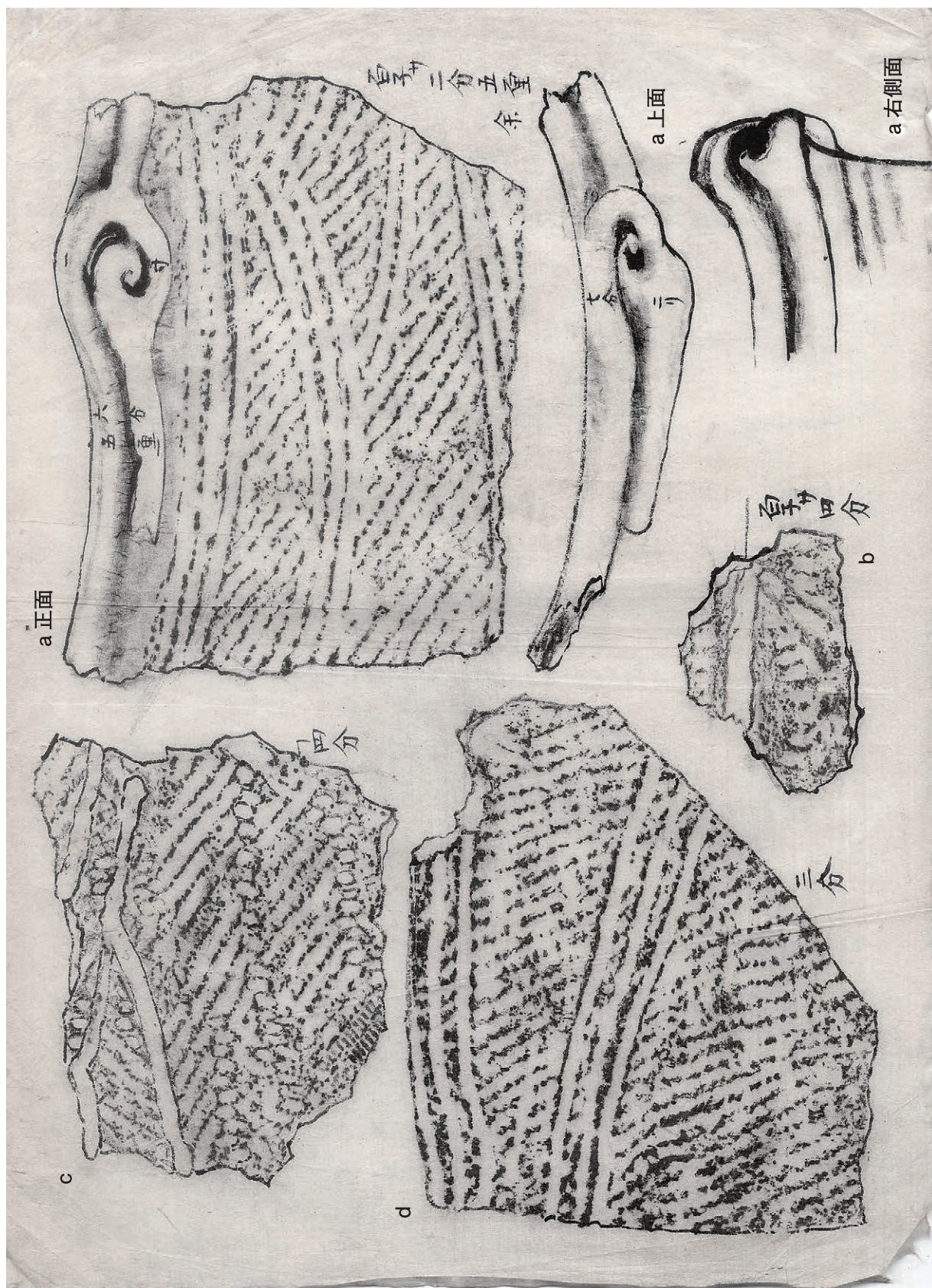
六月一日

佐賀仙之岡郷

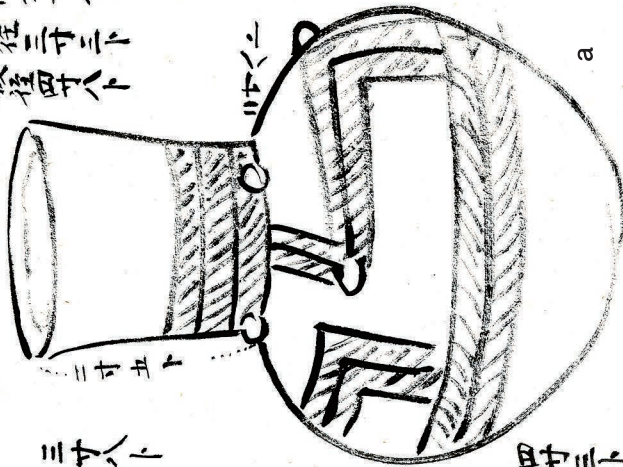


c

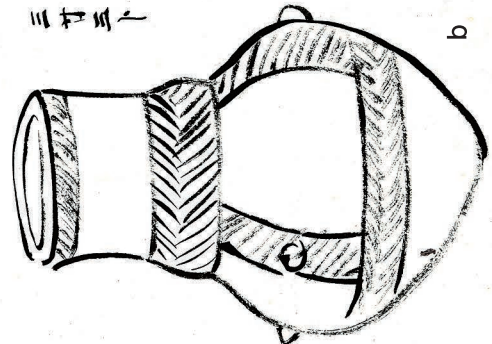
出てもぬき



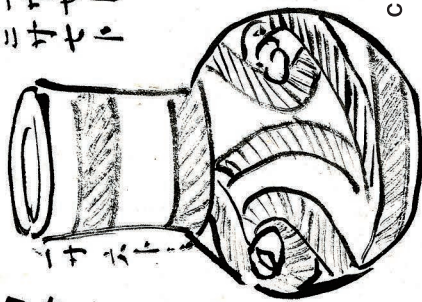
高六寸八ト
口徑三寸三ト
腹徑四寸八ト



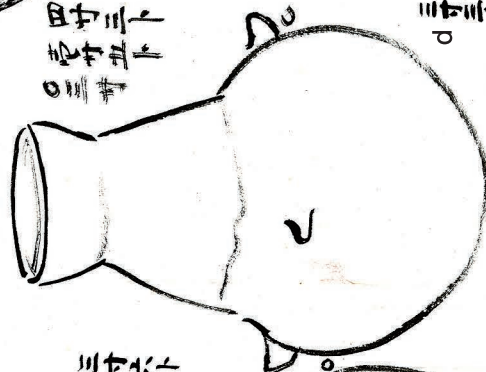
四寸六ト
二寸一ト
三寸三ト



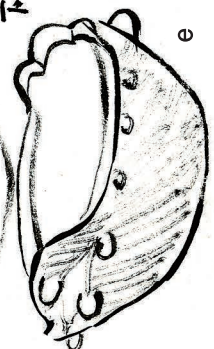
三寸八ト
一寸七ト
二寸七ト



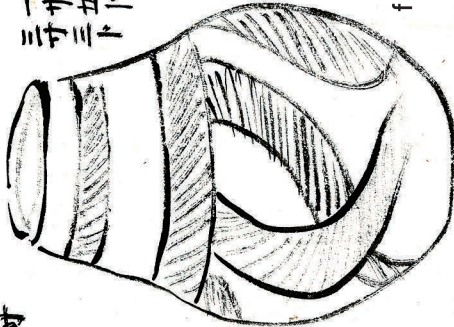
四寸三ト
二寸五ト
三寸三ト



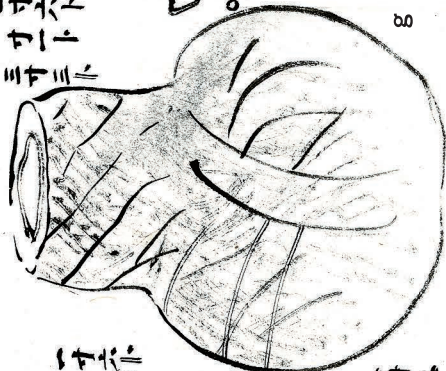
三寸九ト
三寸三ト



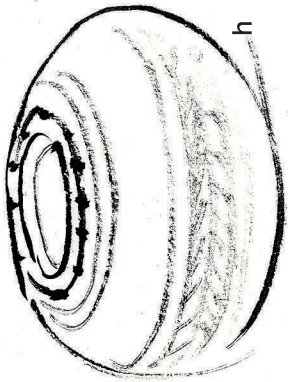
四寸
一寸五ト
三寸三ト



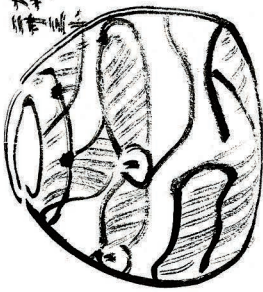
三寸六ト
二寸一ト
三寸三ト



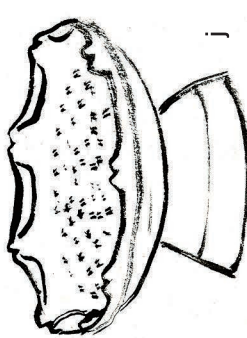
三寸
二寸三ト



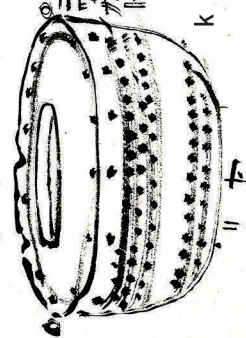
一十二寸五ト
一十二寸五ト
一十二寸五ト

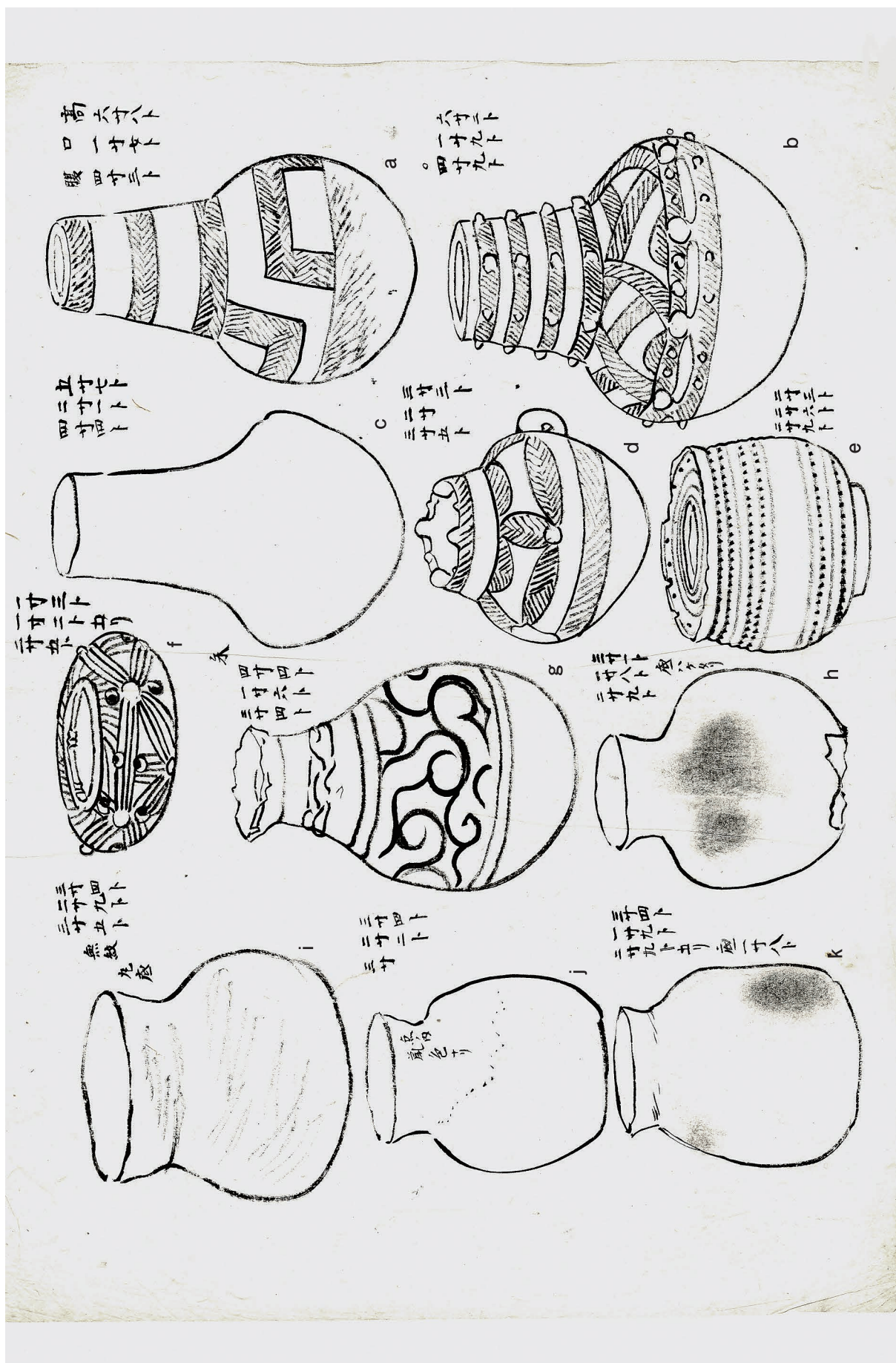


一十二寸五ト
一十二寸五ト
一十二寸五ト



一十二寸五ト
一十二寸五ト
一十二寸五ト

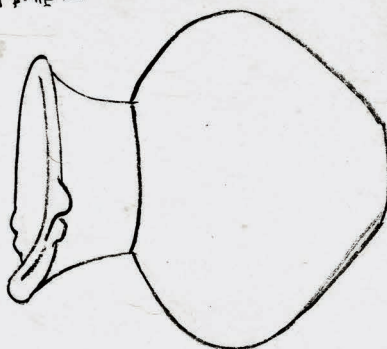




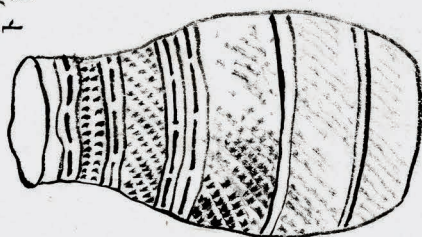
高五寸七下
口三寸五下
底三寸五下



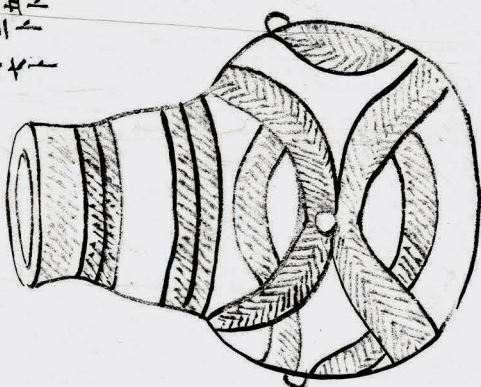
高未
口四寸九下
腹三寸五下



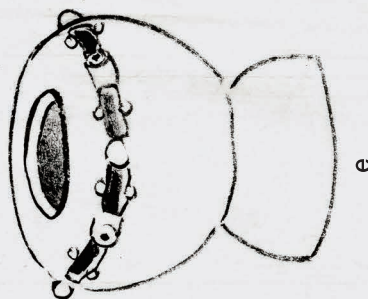
高四寸九下
口三寸九下
腹三寸二下



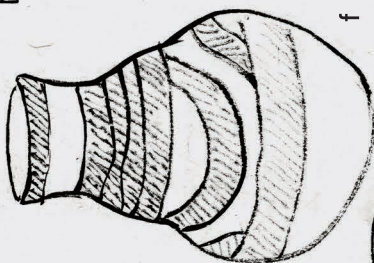
五寸五下
三寸二下
四寸七下



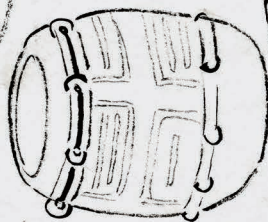
三寸六下
二寸二下
二寸五下



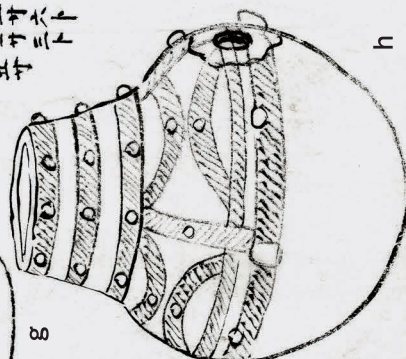
四寸七下
三寸一ト
三寸三ト



三寸二ト
三寸一ト
三寸八ト



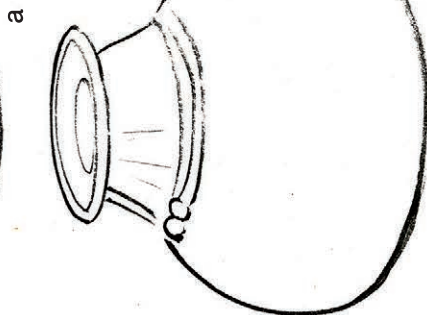
五寸六下
三寸三ト
腹五寸



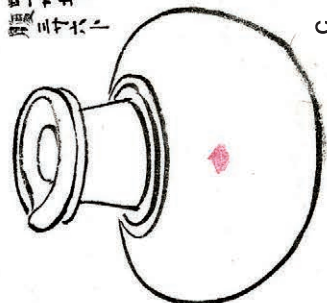
高黒
三寸七分
口徑二寸五分
腹四寸五分



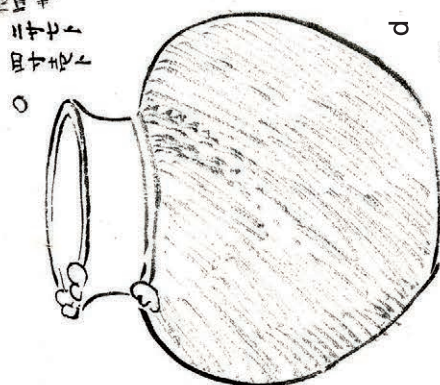
高朱
四寸五分
口徑二寸五分
腹五寸五分



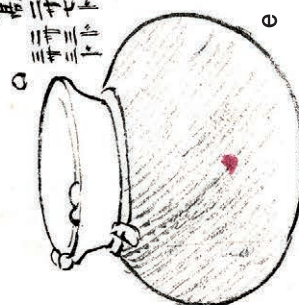
高朱
三寸三分
口徑二寸五分
腹三寸六分



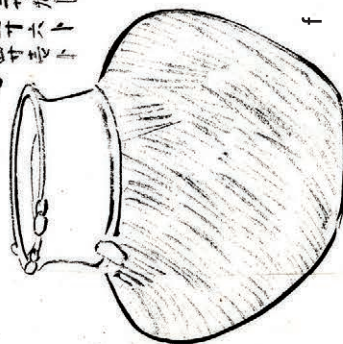
高四寸
三寸七分
口徑二寸五分



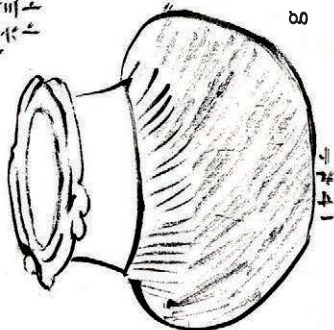
高三寸七分
三寸三分
口徑二寸五分



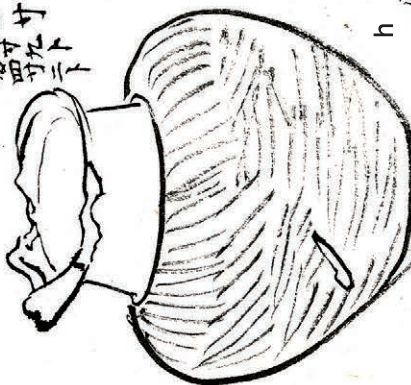
三寸九分
三寸六分
口徑二寸五分



三寸三分
二寸六分
口徑二寸五分



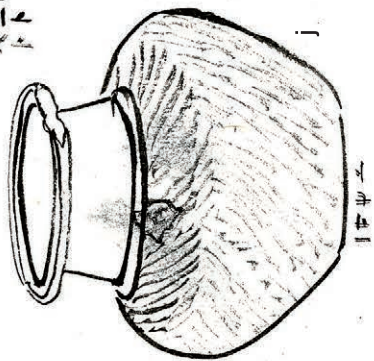
高四寸
三寸九分
口徑二寸五分



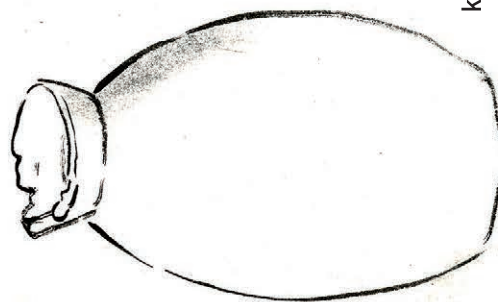
高四寸
三寸九分
口徑二寸五分

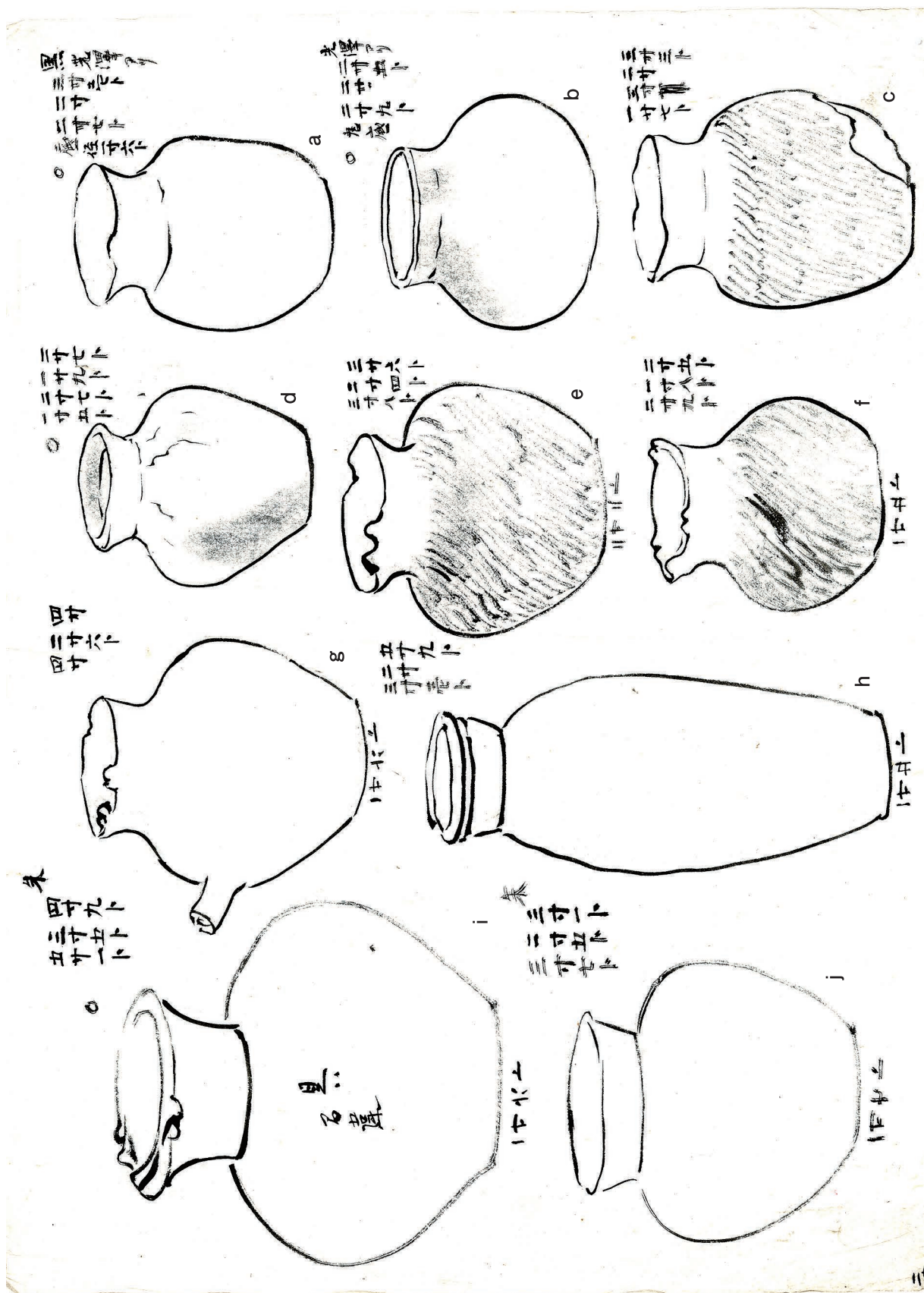


三寸四分
三寸二分
口徑二寸五分

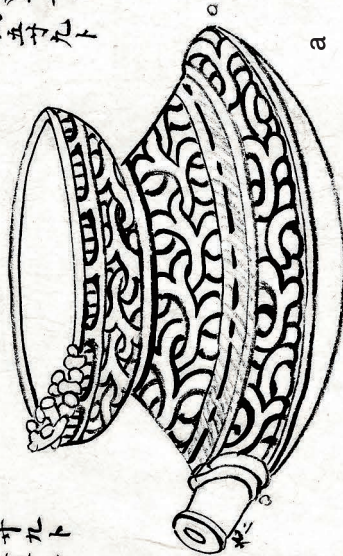


高四寸
三寸九分
口徑二寸五分



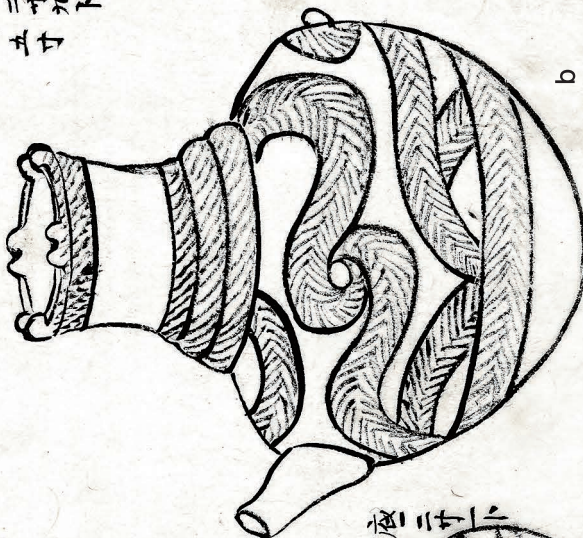


高四寸二ト
口四寸七ト
底五寸九ト



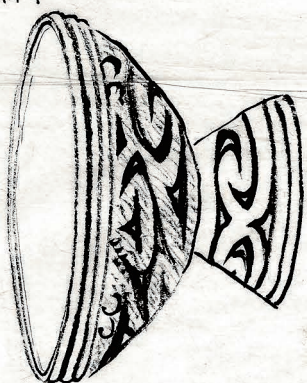
a

高六寸五ト
口二寸九ト
腹五寸



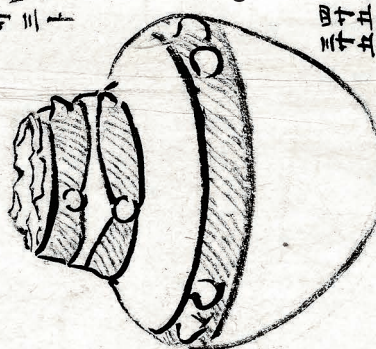
b

高二寸九ト
口四寸一ト
底三寸七ト



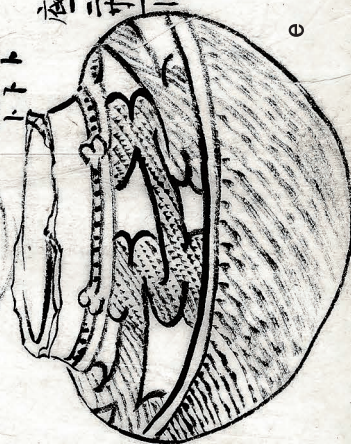
c

三寸五ト
一寸四ト
三寸三ト



d

底三寸二ト
三寸五ト
四寸五ト
三寸五ト



e

五寸三ト
三寸一ト
五寸二ト
底三寸七ト



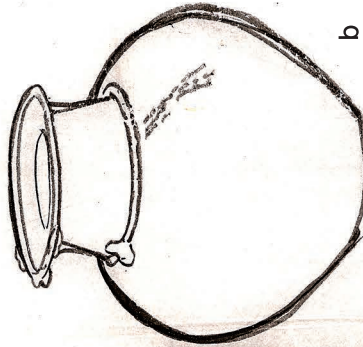
f

中津輕郡 舘野村 大字 土腰肉
字 猿澤 鉢場 云々



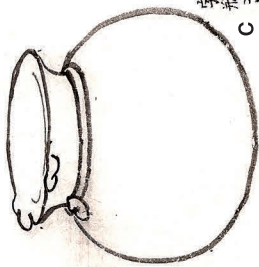
a

西津輕郡 鳴澤村 大字
字 津輕 建后 鉢場 云々



b

舘野村 大字 瓶 土腰肉
字 瓶 山 云々



c

十面澤
字 湯ノ森 鉢場 云々



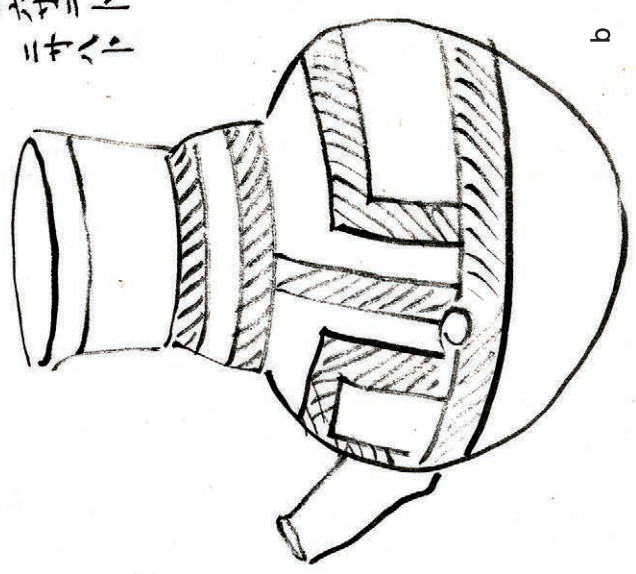
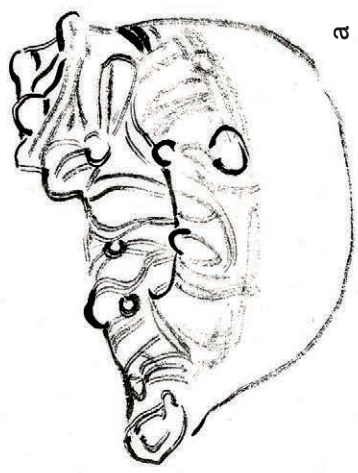
d

土腰肉

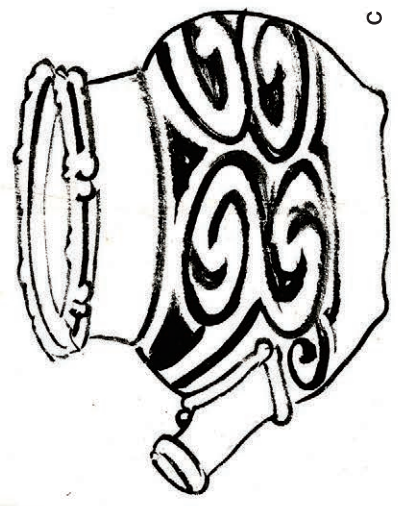


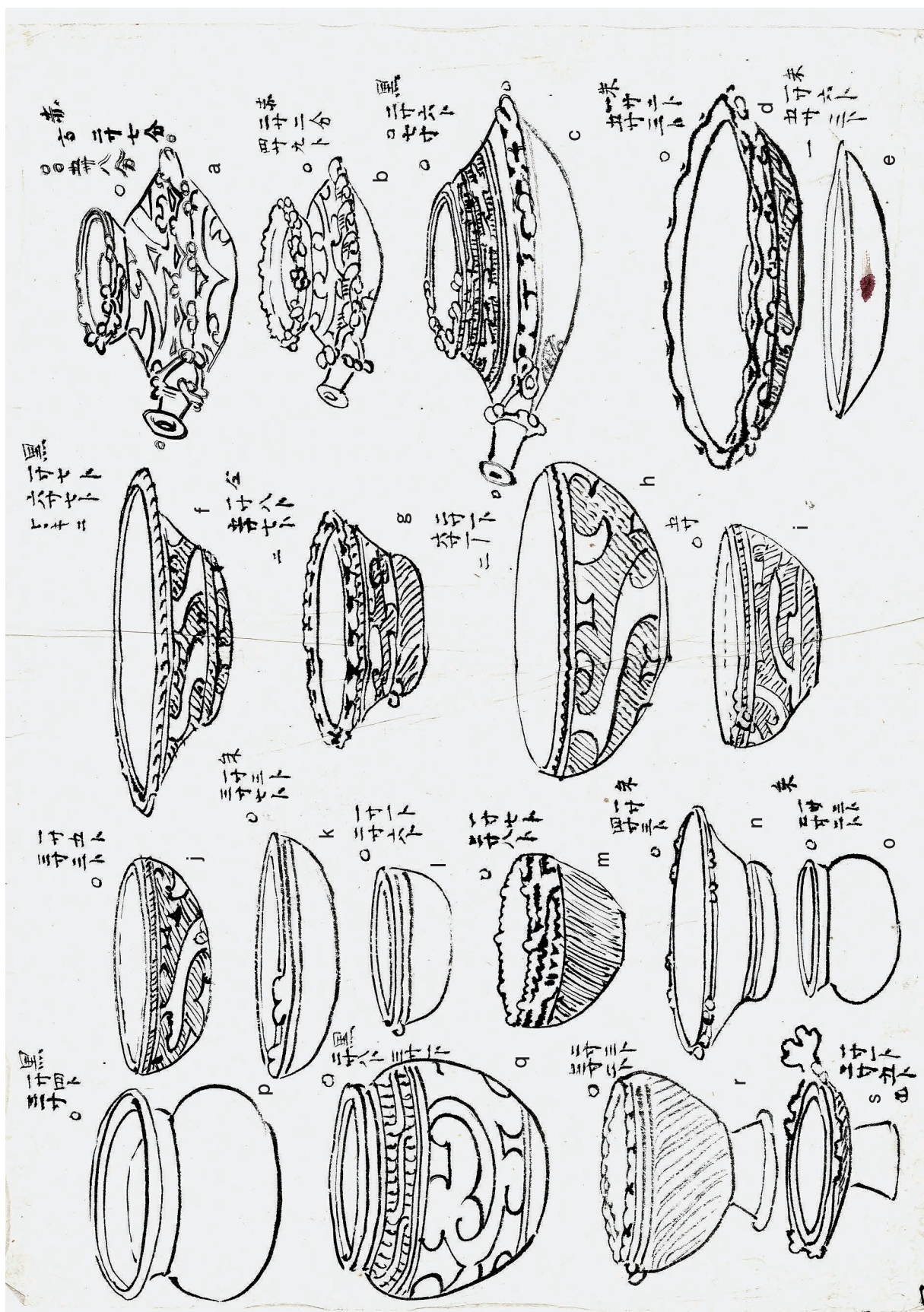
e

高六寸ト
口二寸ト

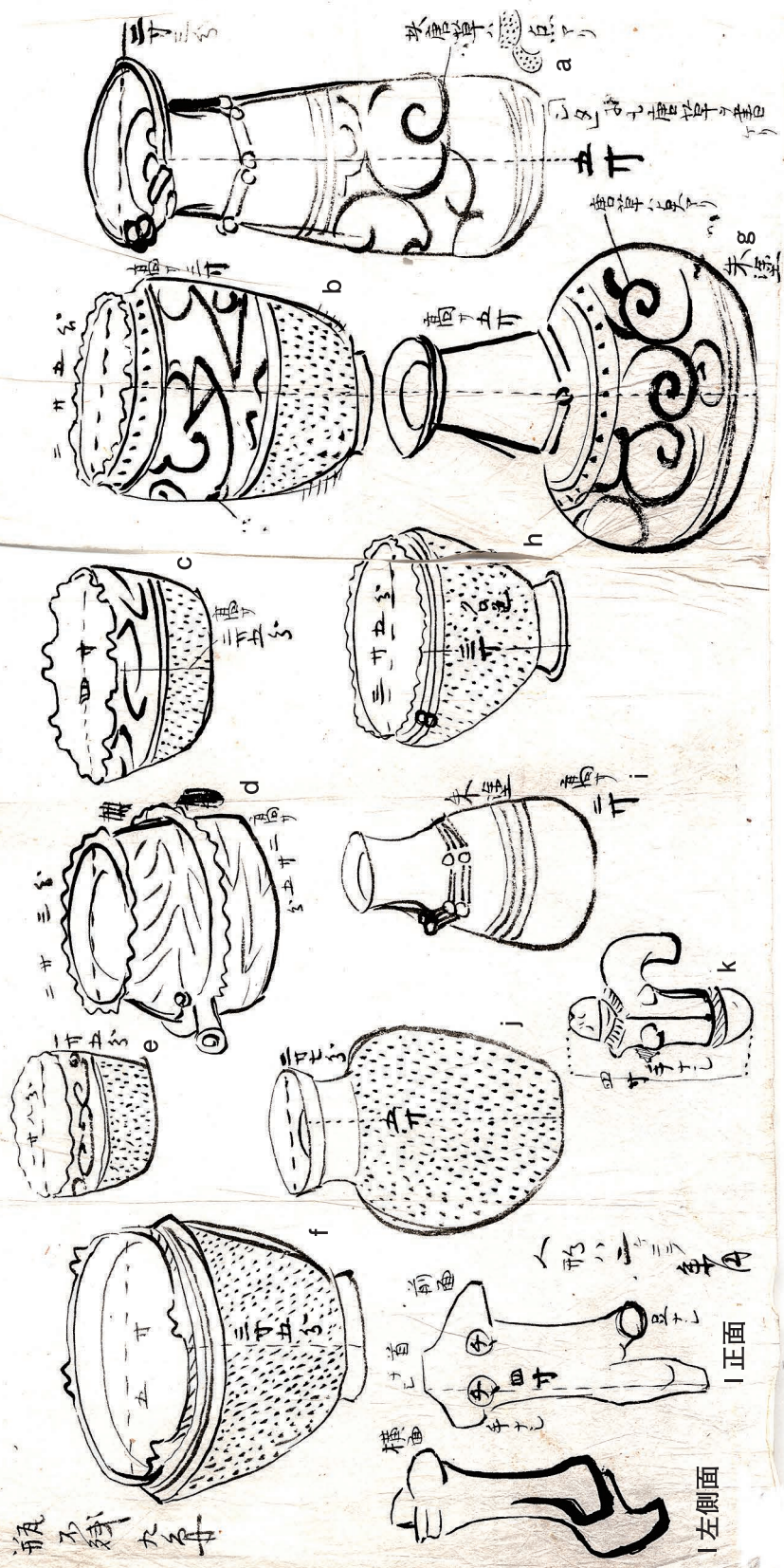


高三寸ト
口二寸ト





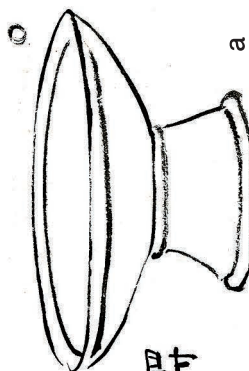
瓶 不 録 九 年



糸
三寸
四寸二

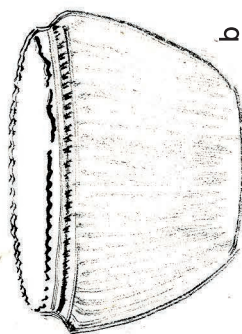
二寸
四寸二

三寸五
三寸三
三寸

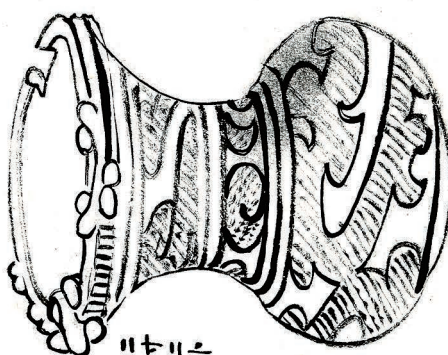


二寸五

四寸
四寸



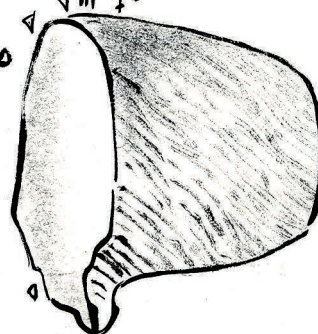
二寸



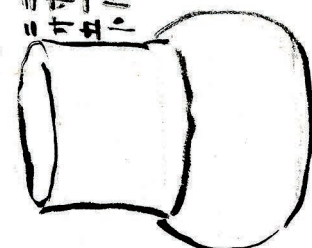
三寸



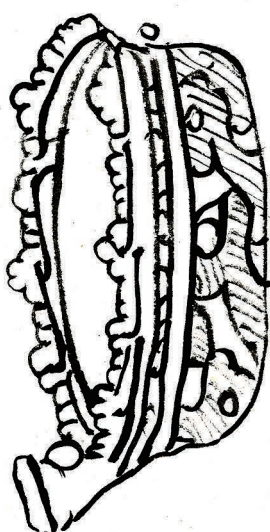
四寸二



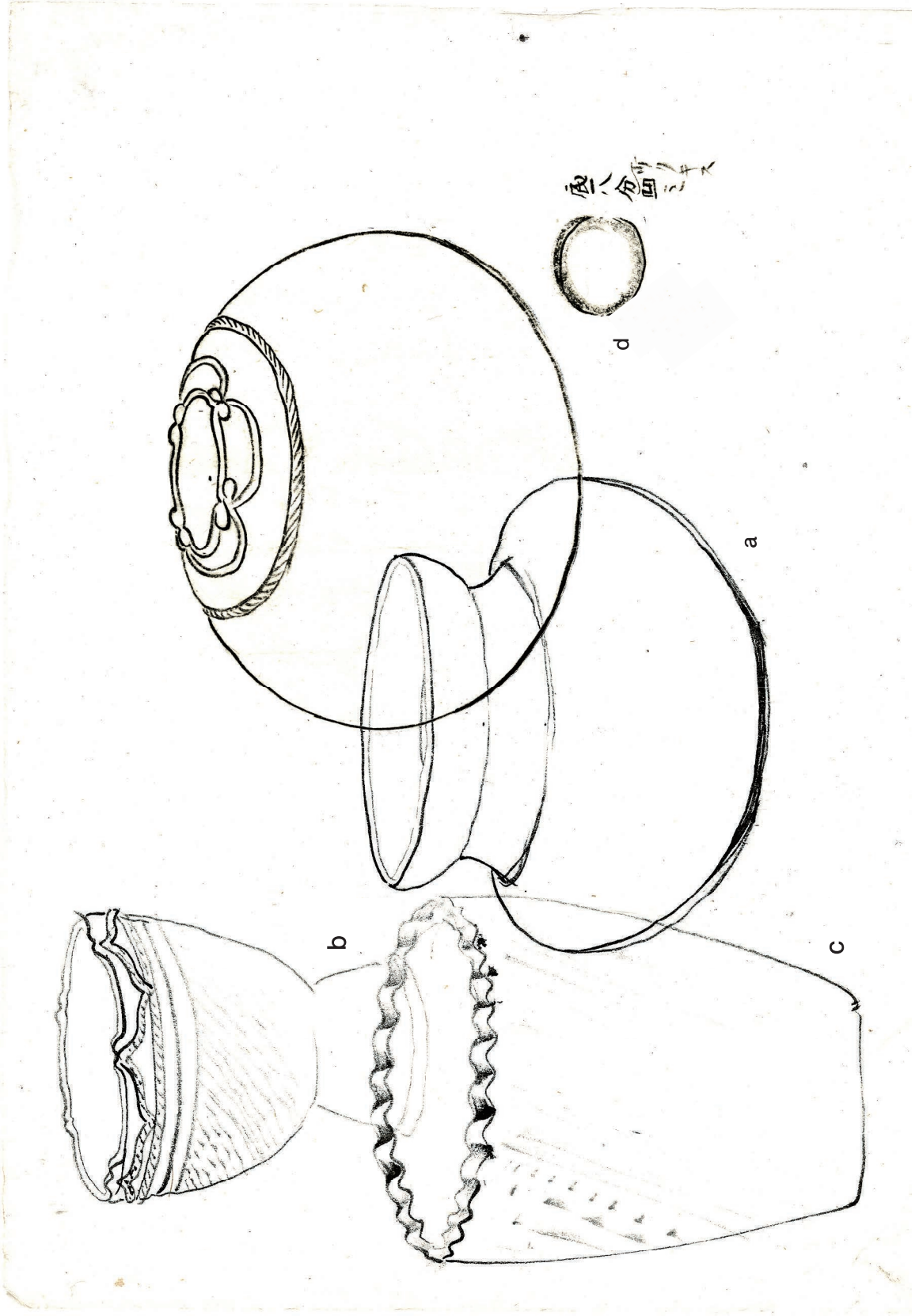
一寸五

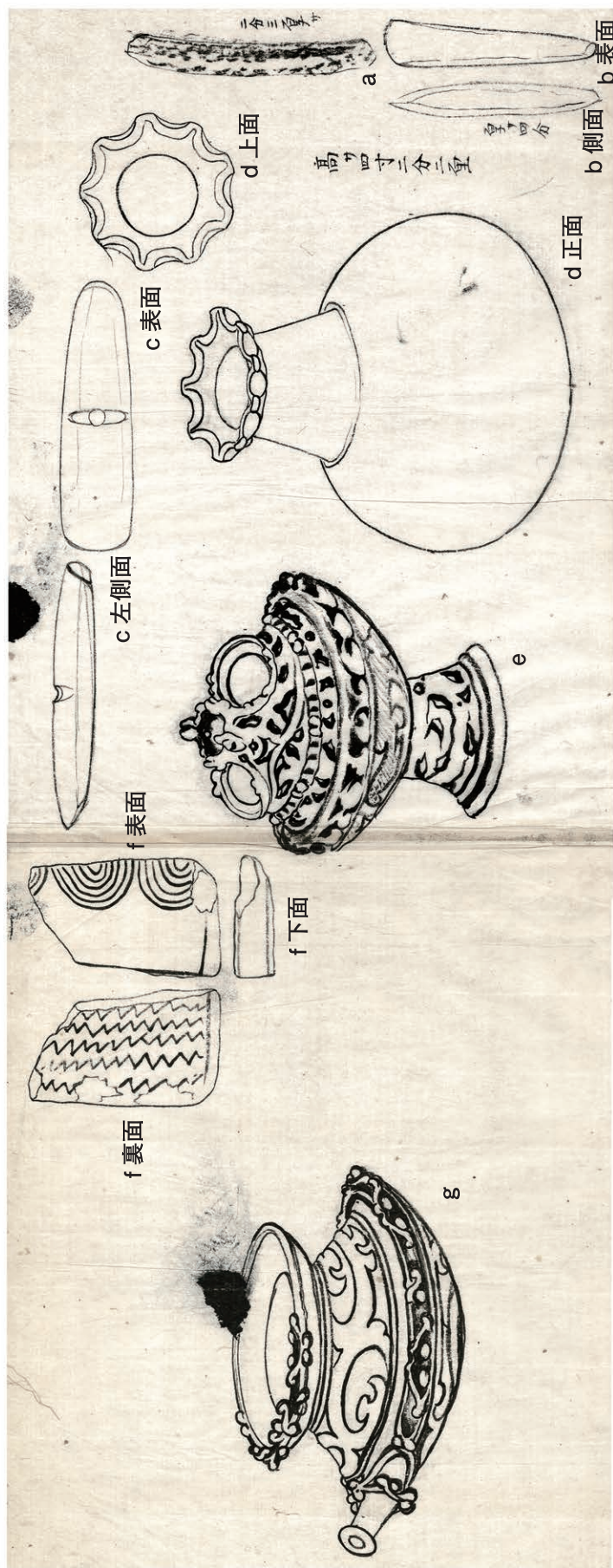


一寸五
四寸
四寸



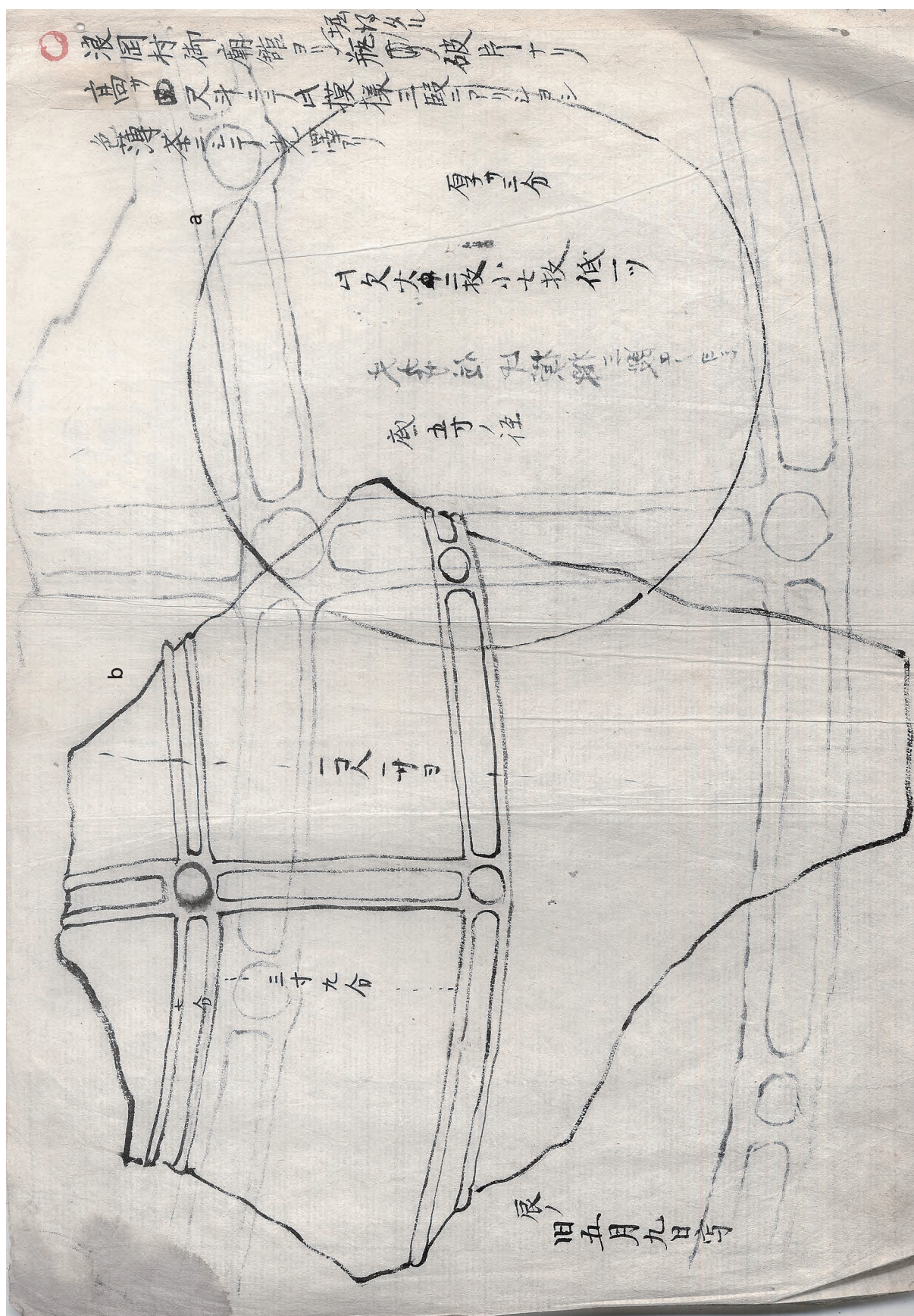
三寸





76





77A

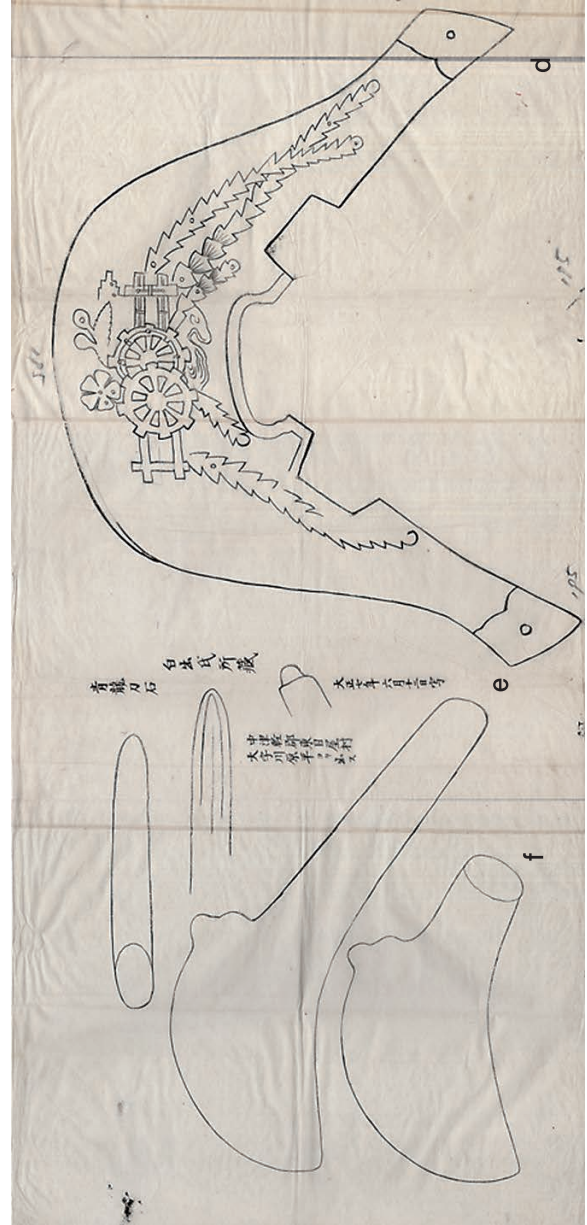


77B



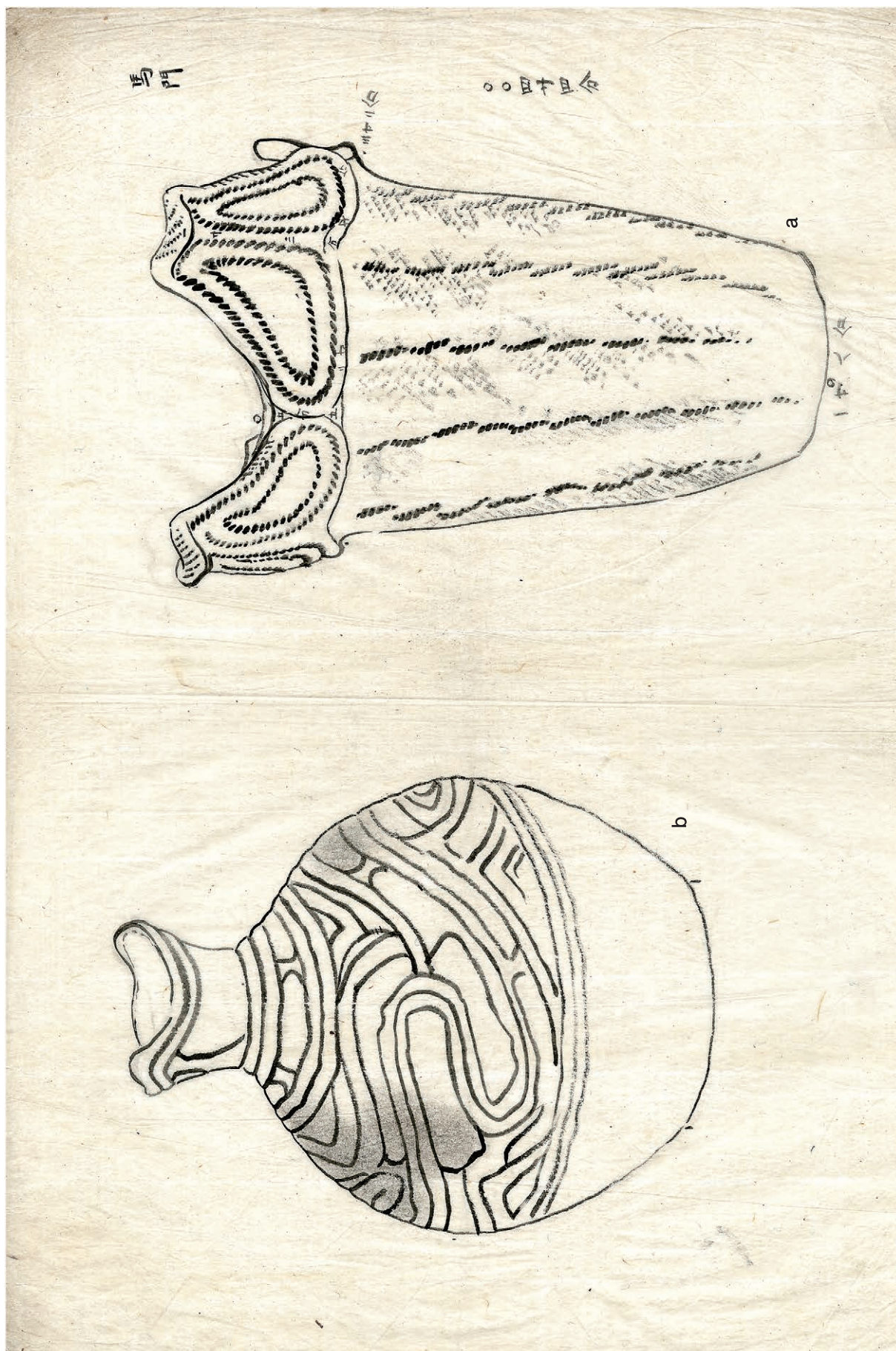
右 画譜

78



左 画譜

0 10cm



烟纹与竹纹

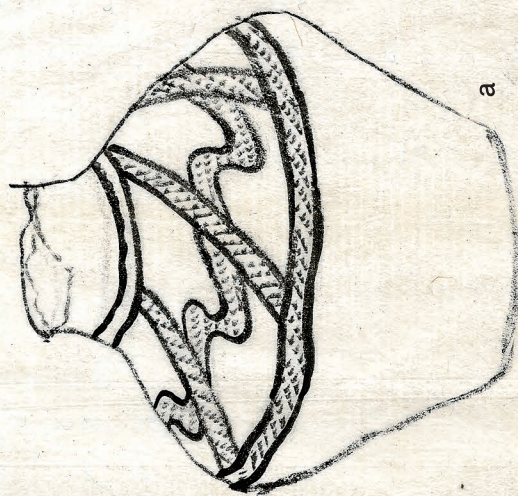


a

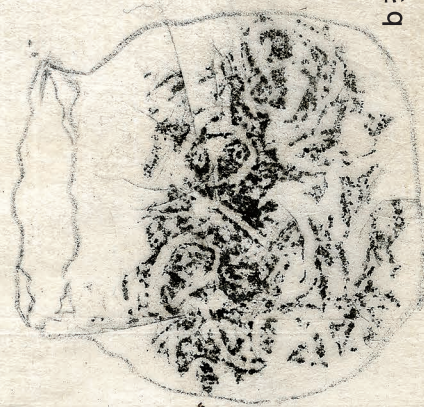


b

通卦村字外墨灰



a

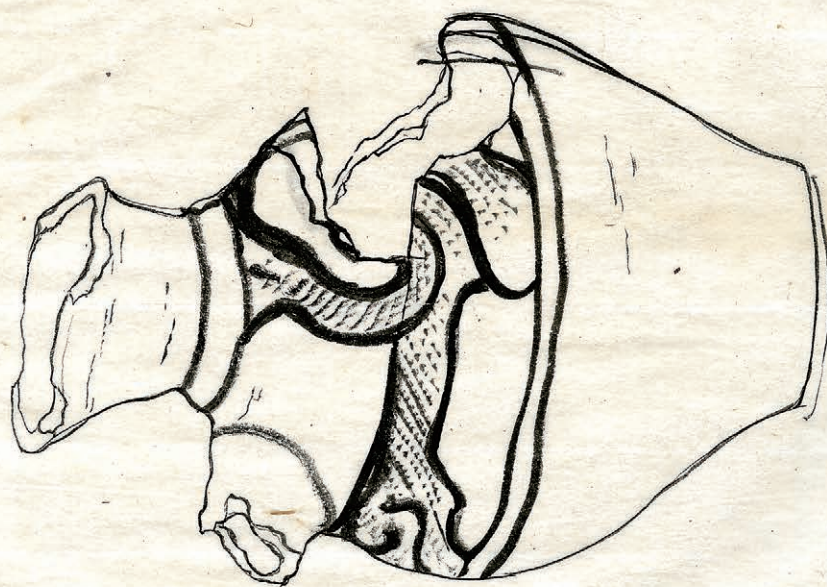


b 拓本

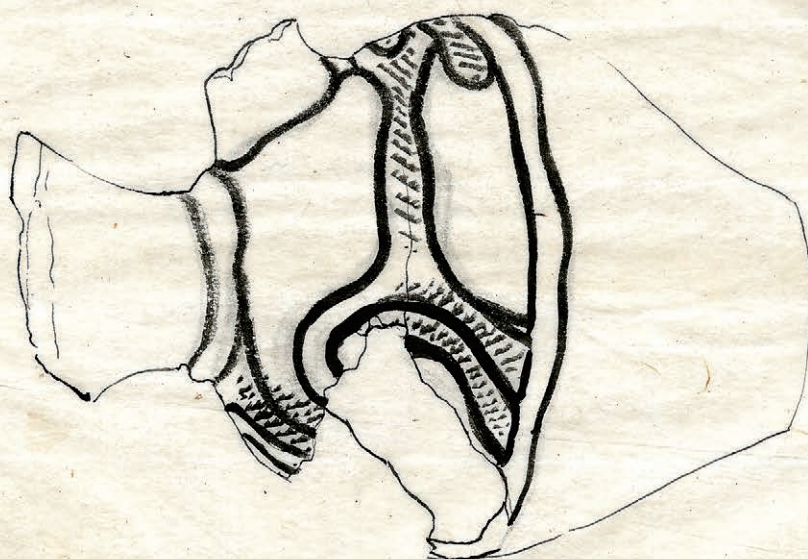


b





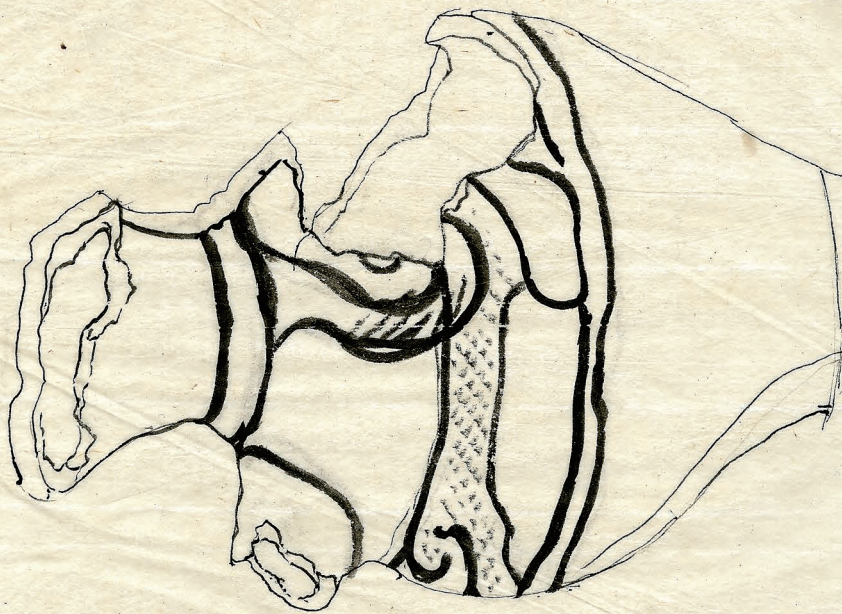
左側面



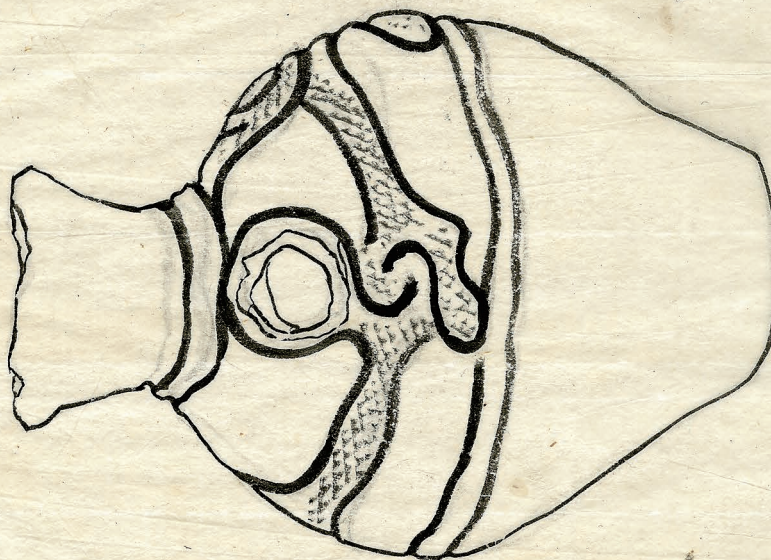
右側面

83A

商 卣 卣 卣



左側面

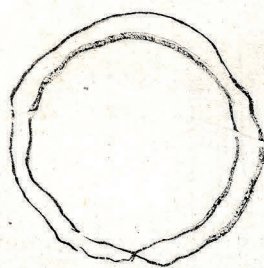
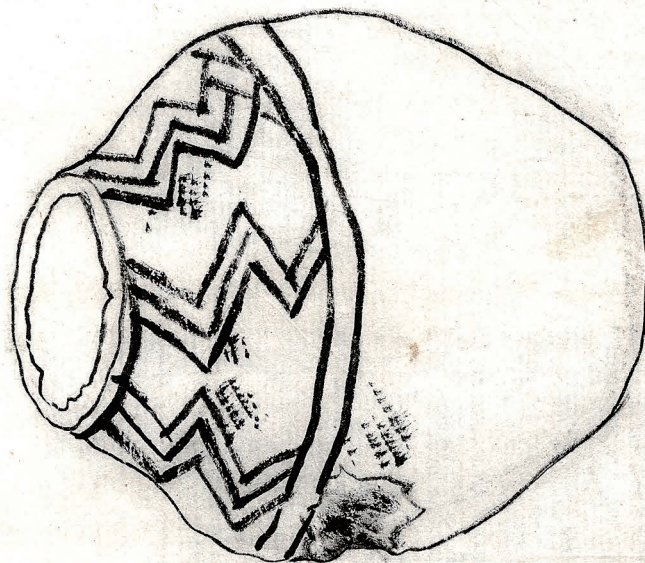


正面

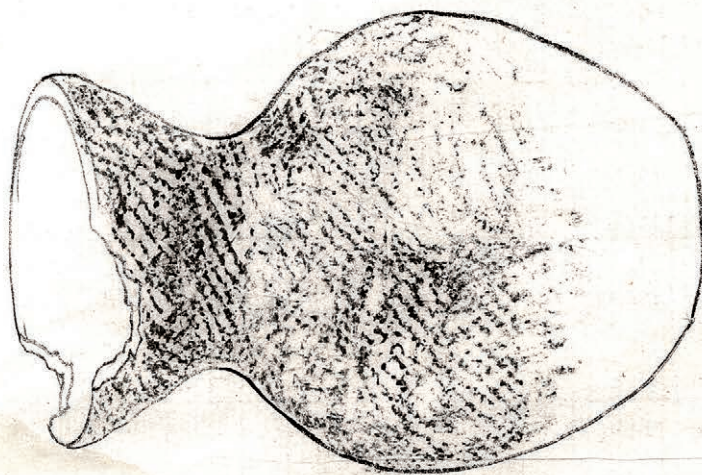
83B

高三寸四分
口徑一寸一分
厚一分五厘

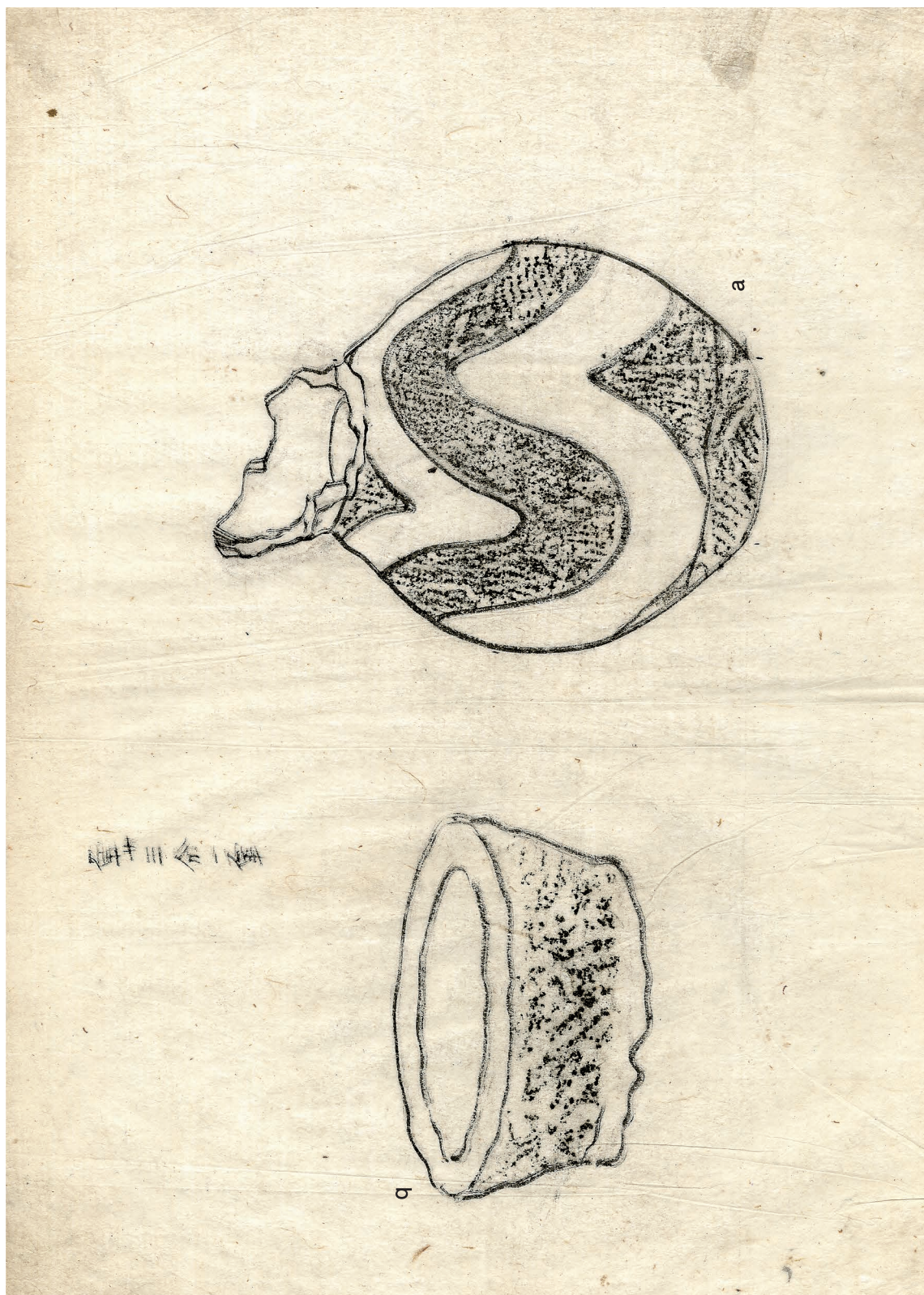
申
田十月四日寄

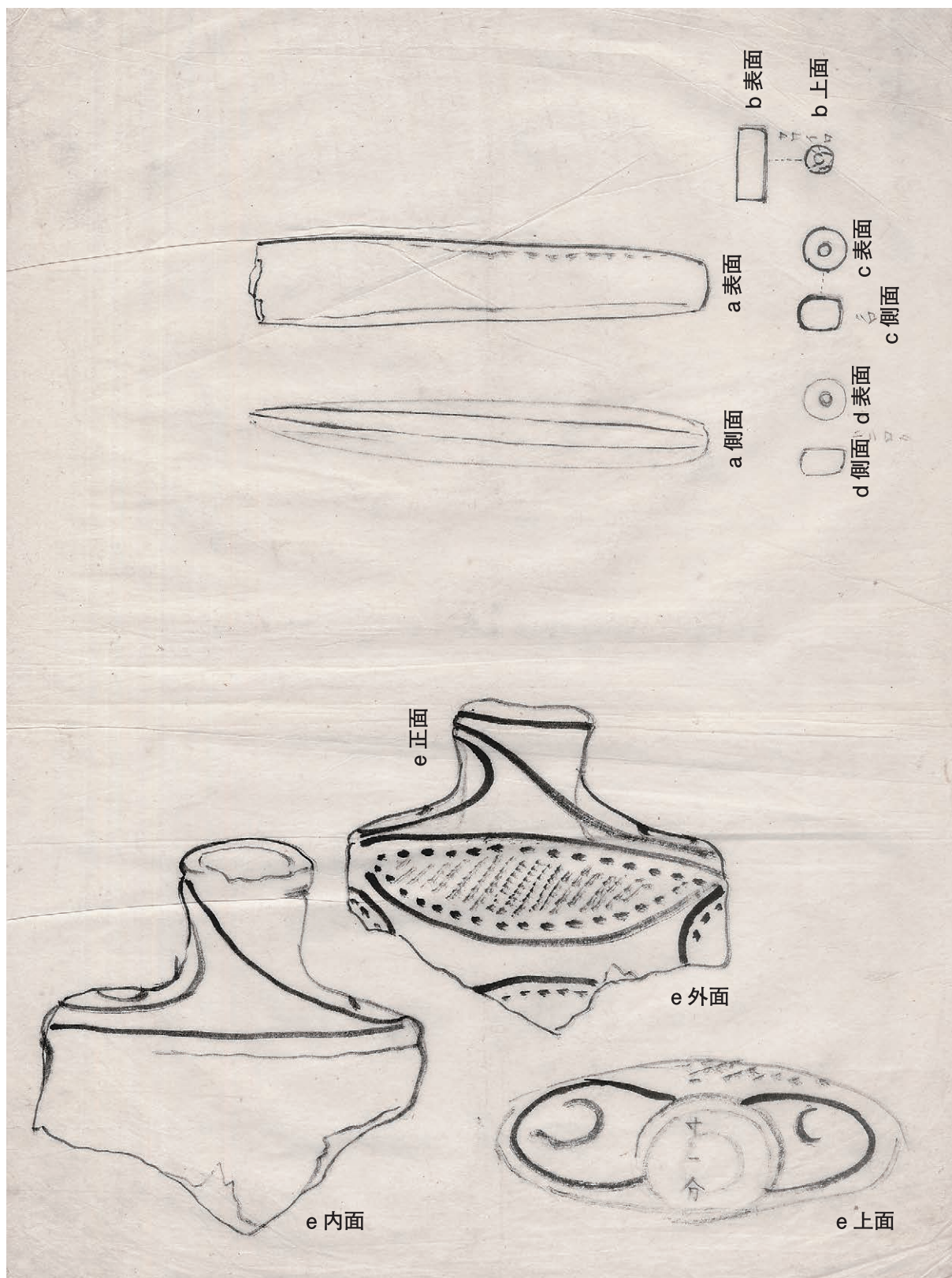


東建輕部油川村
中林氏所藏



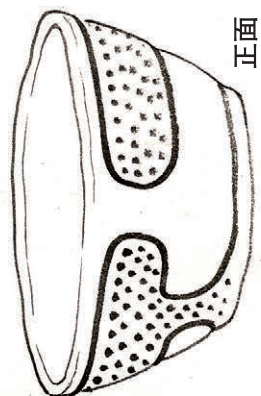
茶褐色ニ
黒斑アリ



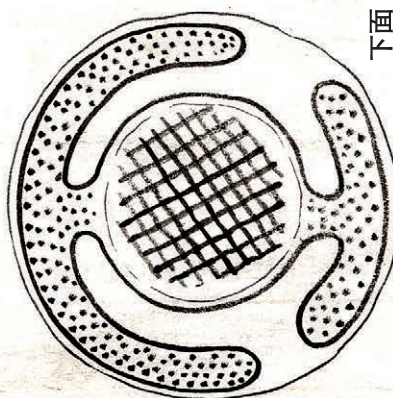


瀧氏之藏

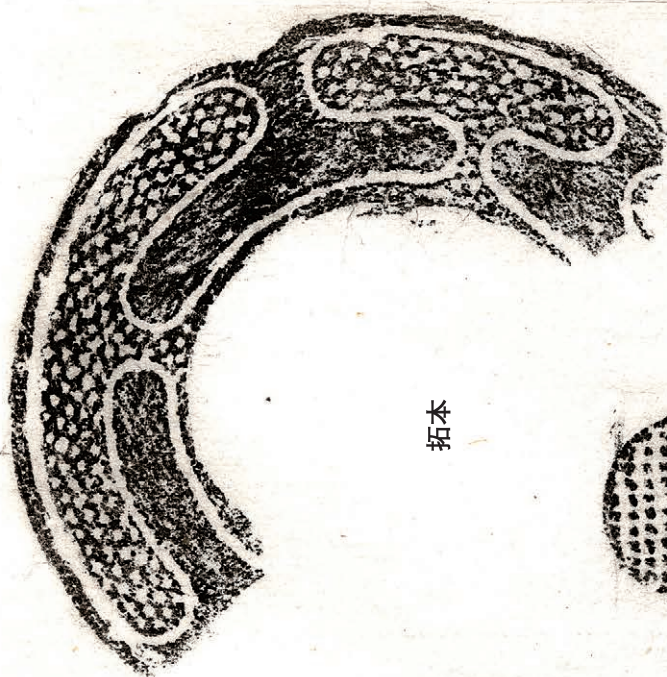
明治廿三年六月十五日



正面

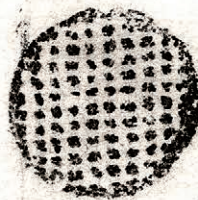


下面



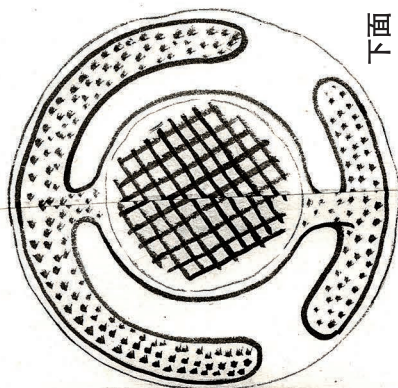
拓本

高サ一寸一分三厘
口径二寸六分
色ハ薄赭質堅
出所ハ

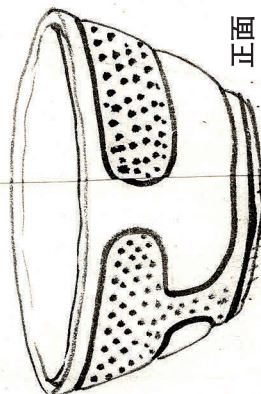


瀧氏之藏

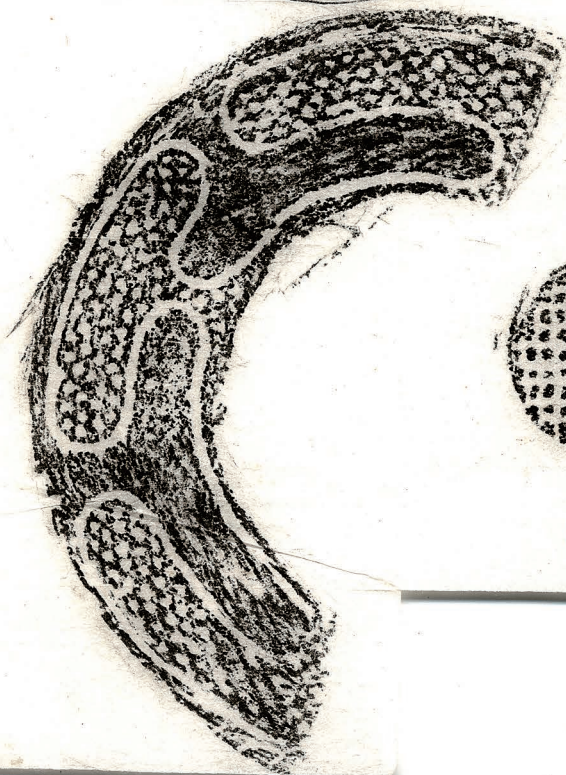
明治廿二年六月十五日



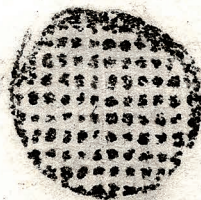
下面



正面



拓本



高サ一寸一分三重

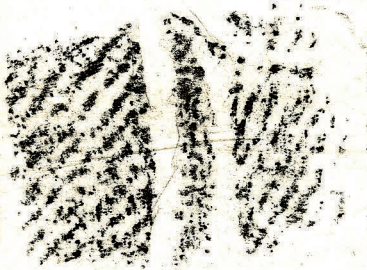
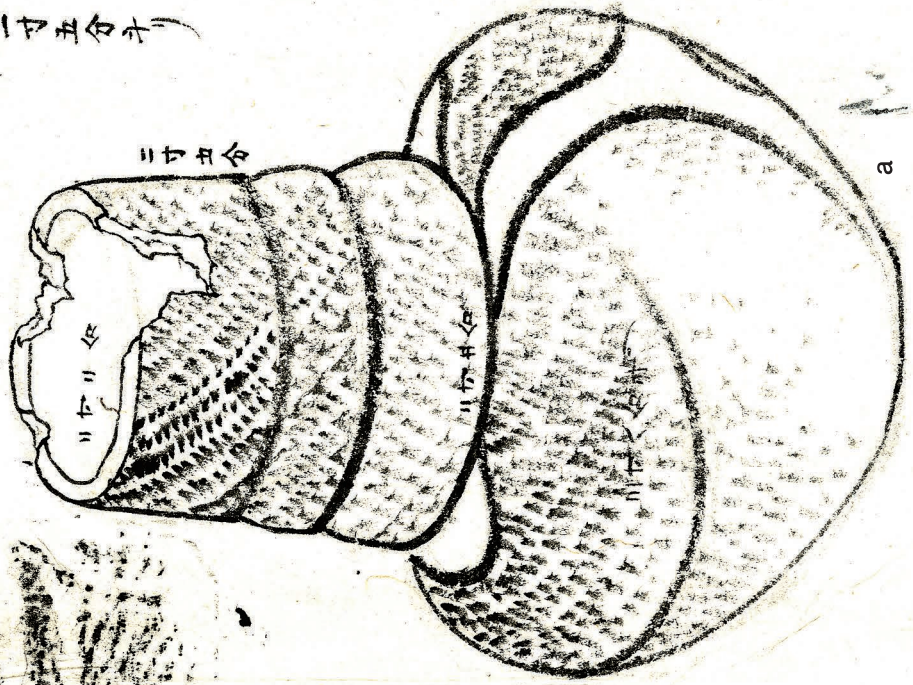
口径二寸六分

色ハ薄青ナリ

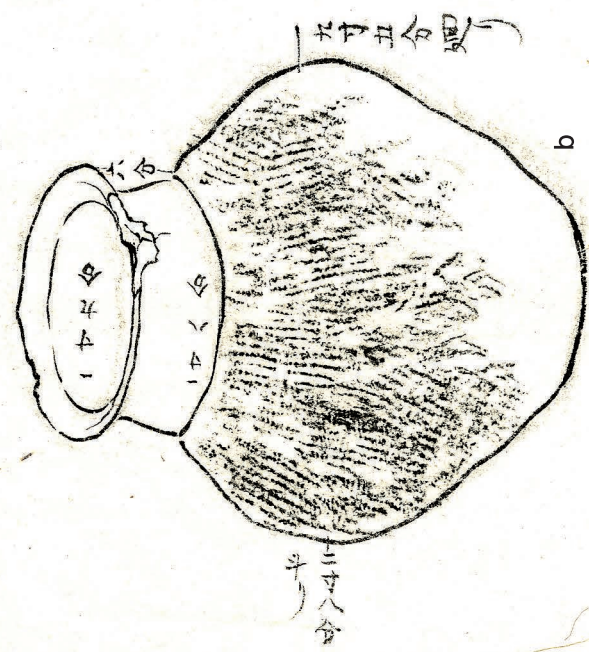
88B

圖、
田正月十二日

高五寸
底一寸五分半



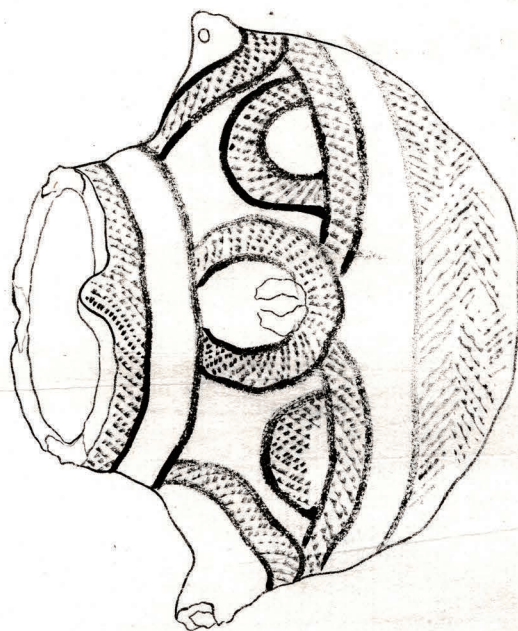
三寸
底一寸六分



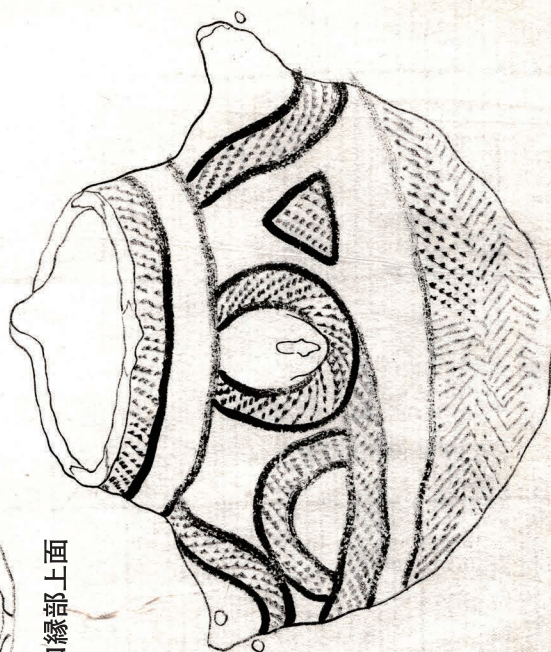
下澤氏之藏

龜ヶ岡壺之産

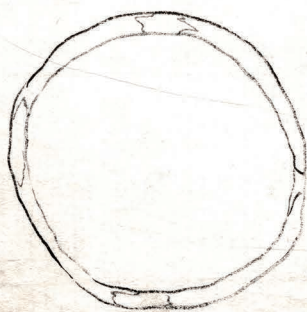
高二寸七分
 印三寸八分
 吹白土
 光沢あり



正面

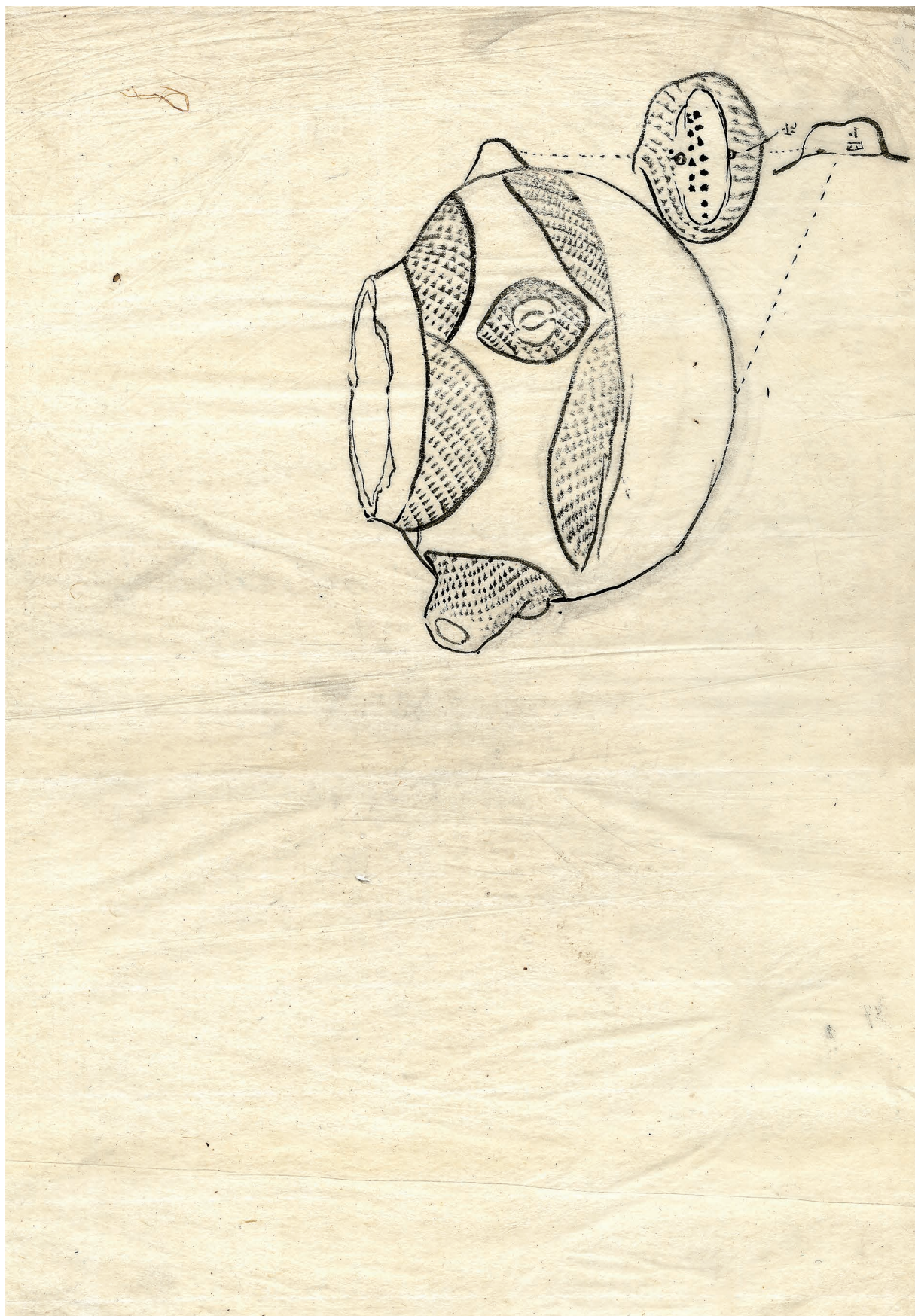


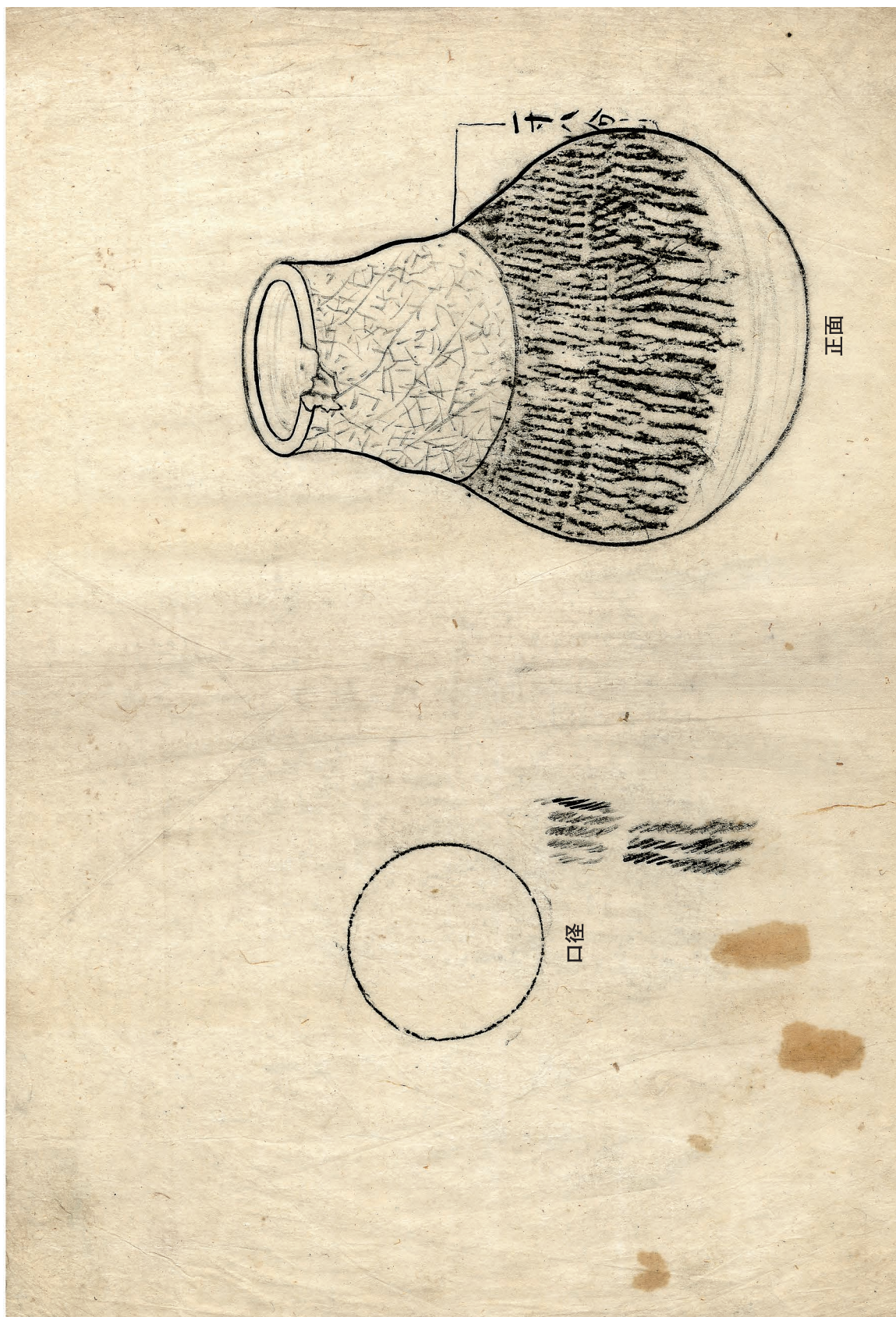
背面



口縁部上面

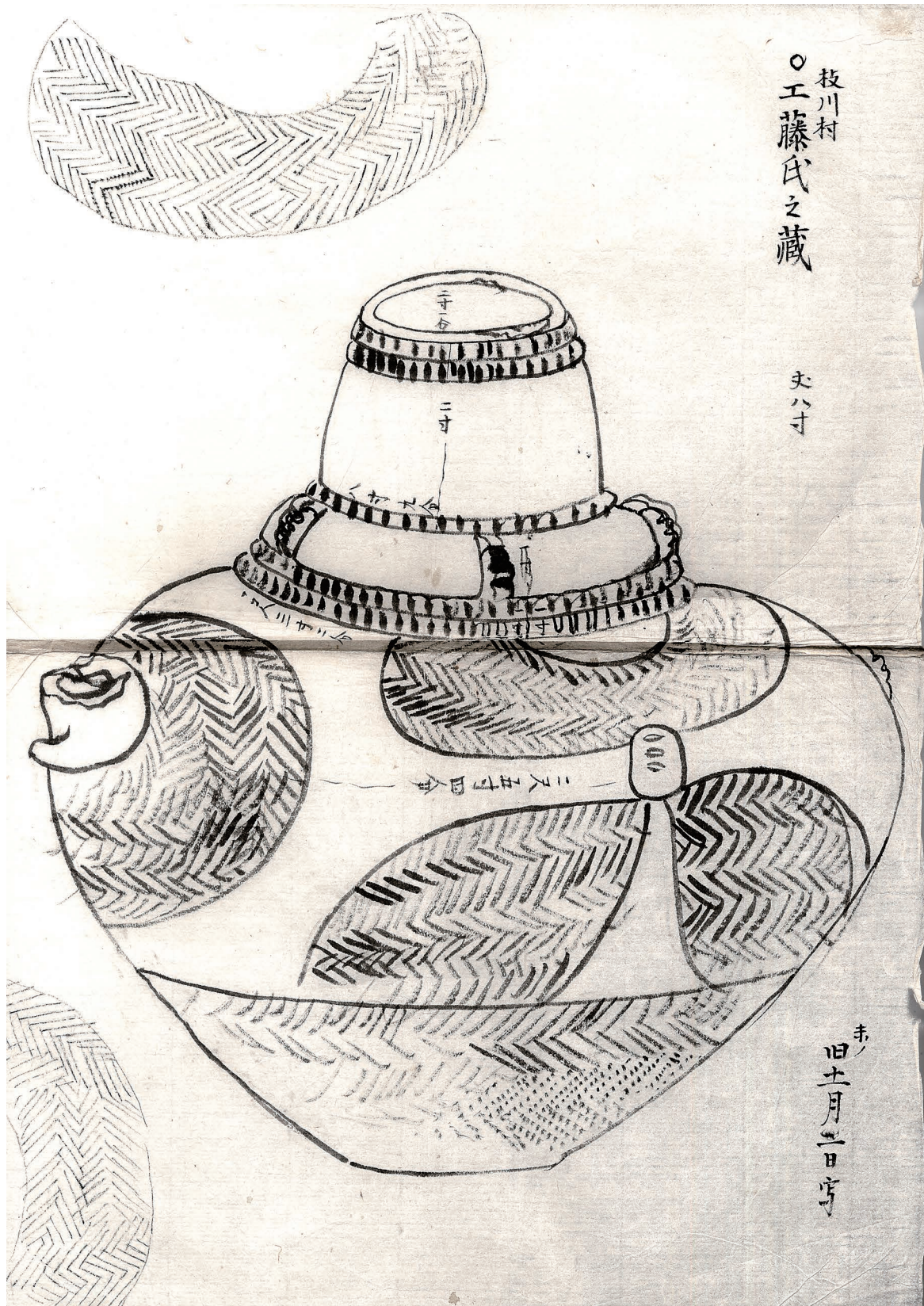
己、旧五月十九日号





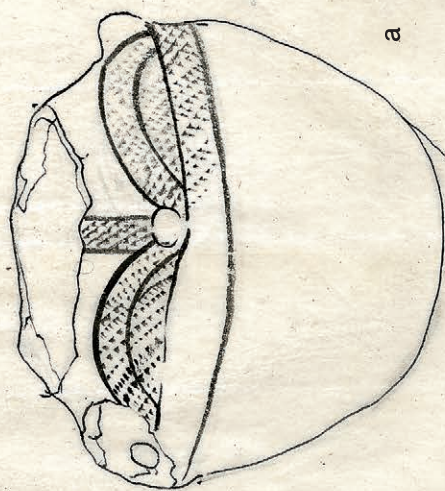
板川村
○工藤氏之藏

丈八寸

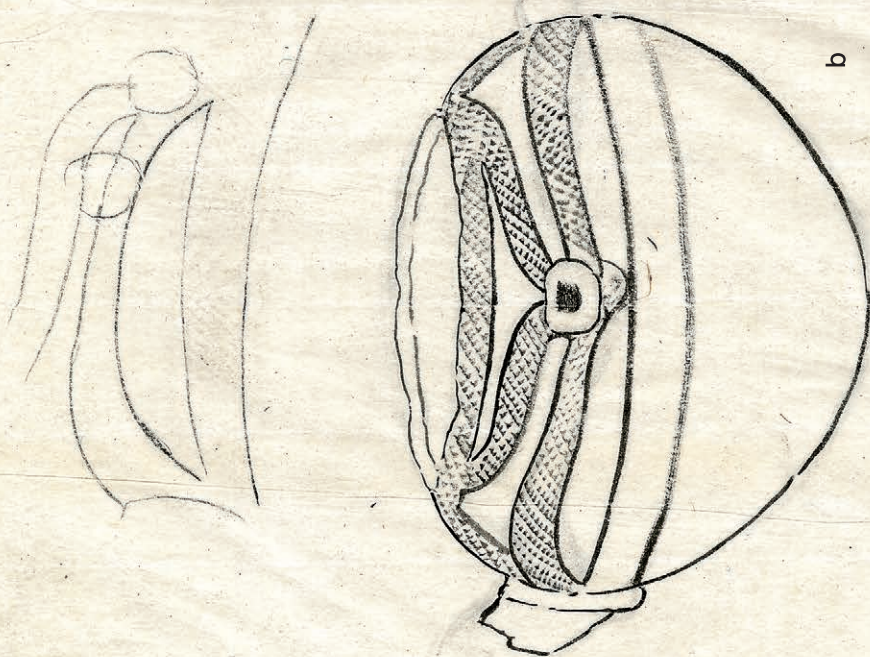


未
旧土月二日寫

高四寸六分
口径一寸九分



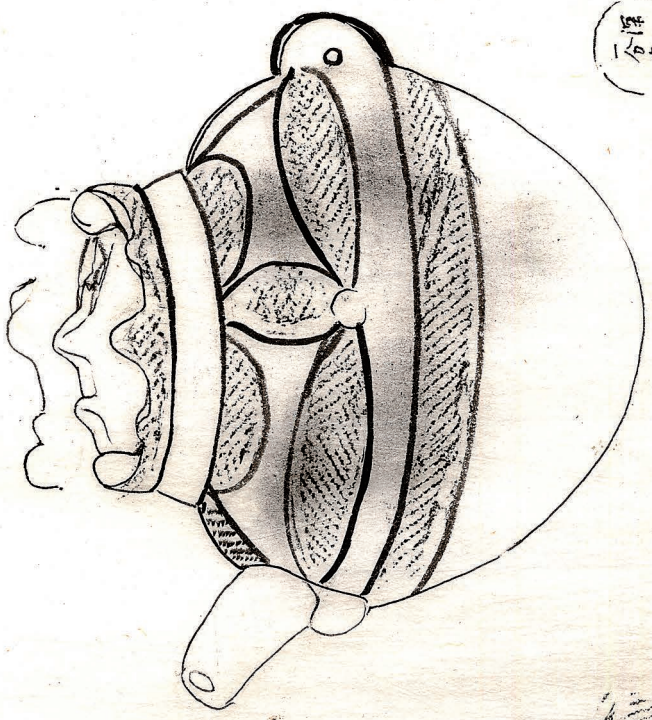
a



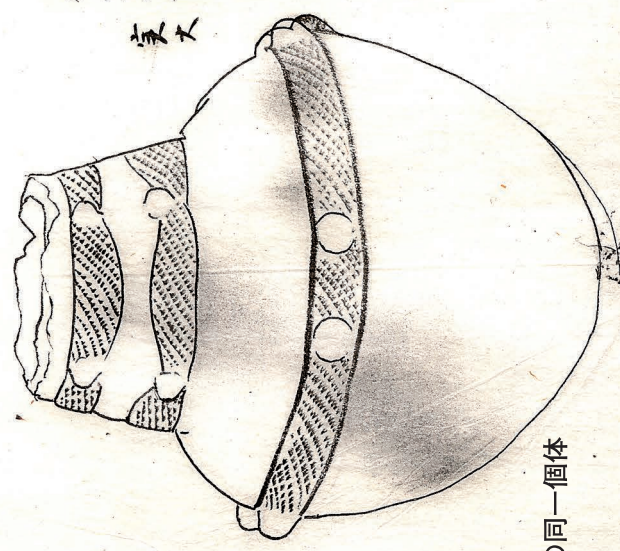
b

口径二寸

底
石
厚
五
分



高
三
寸
六
分
口
徑
一
寸
四
分
裏
文



68dの同一個体



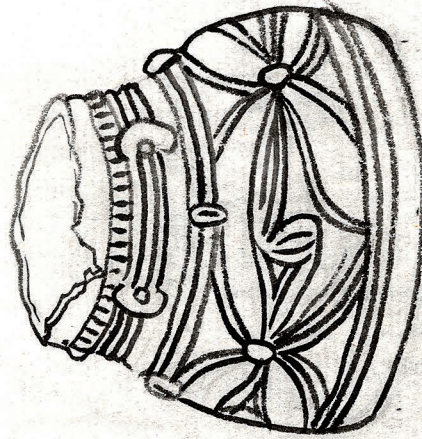
文様部拓本

高館

大平氏藏

須堅ツヒタ

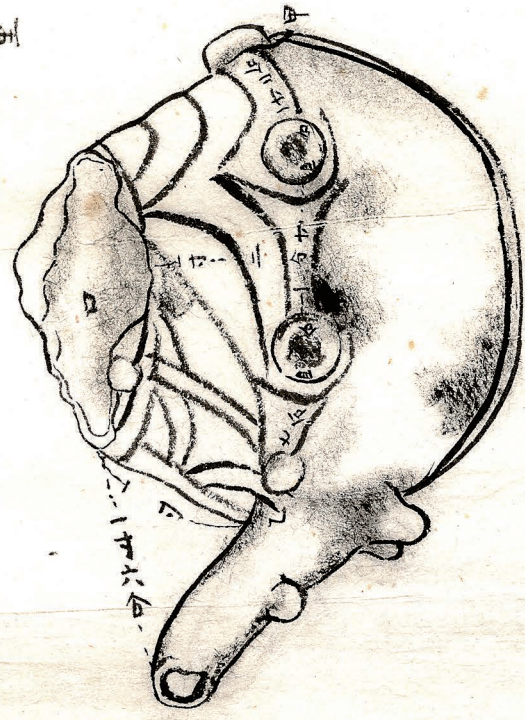
色黒シ



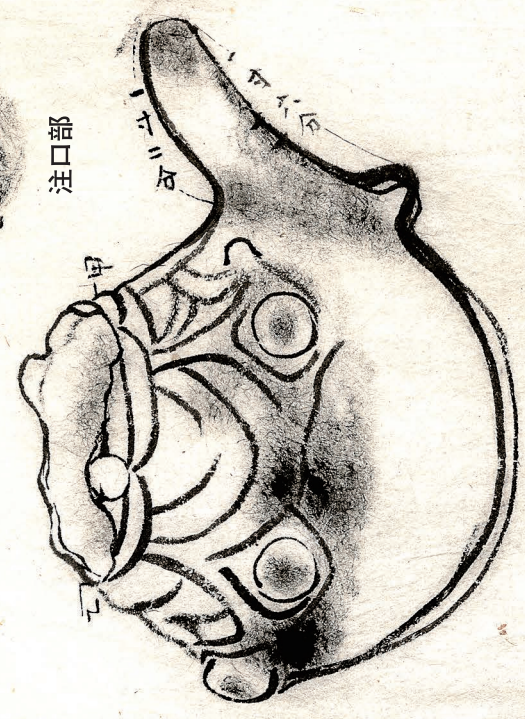
笹森氏之藏

十八年旧正月廿四日

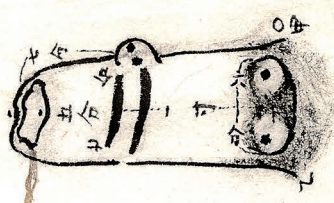
高_中二寸六分三釐
 甲乙三寸二分
 口徑壹寸九分
 色淡白ニシテ
 少ク光澤アリ



左側面



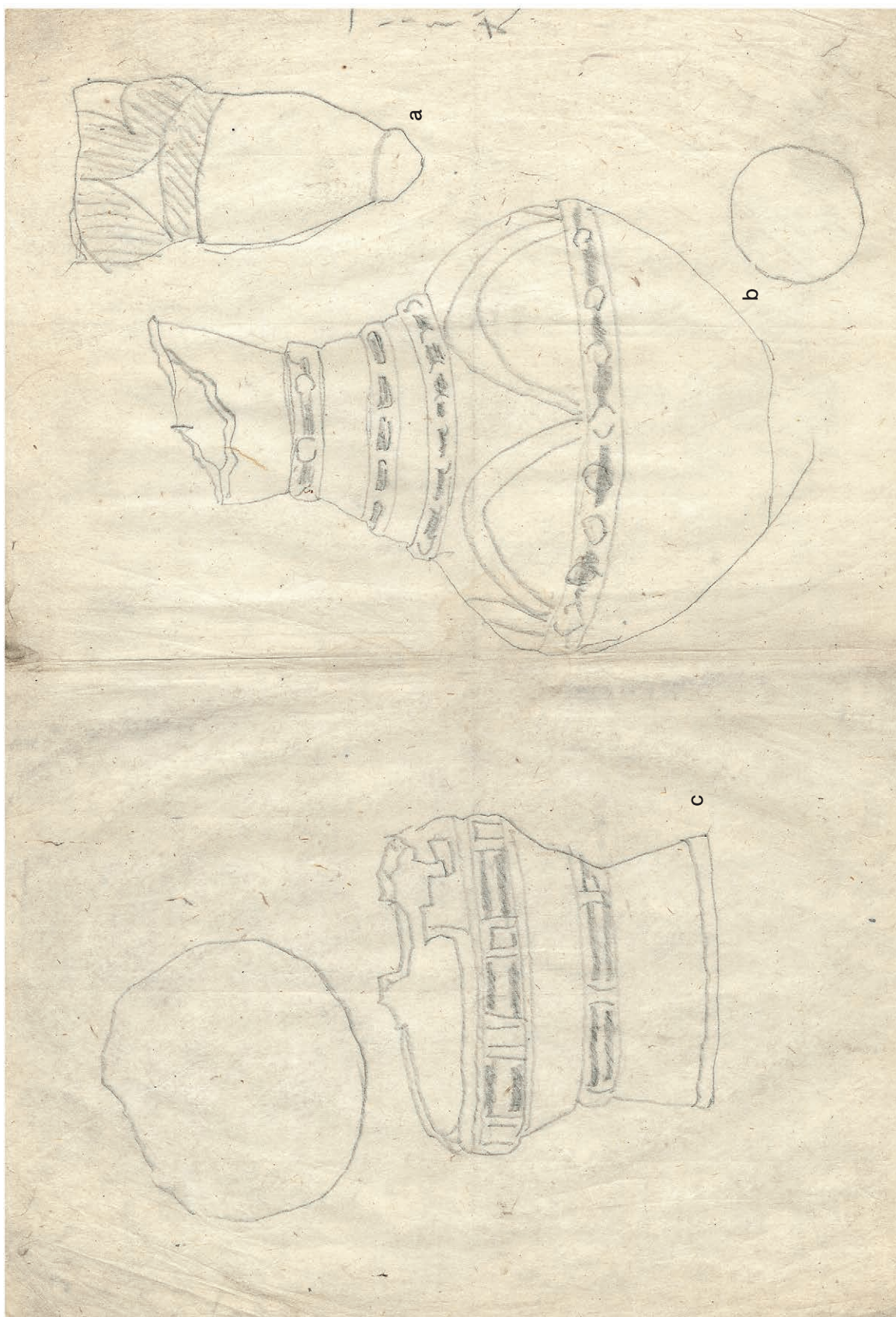
右側面



注口部

甲乙七分三釐

甲乙徑二寸

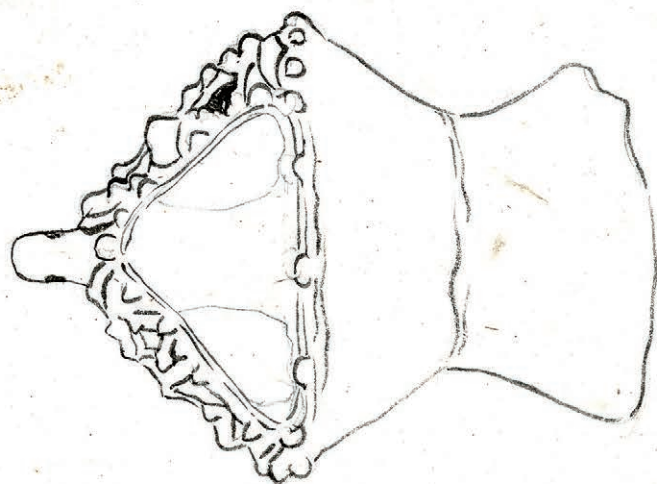


山形村太字袋

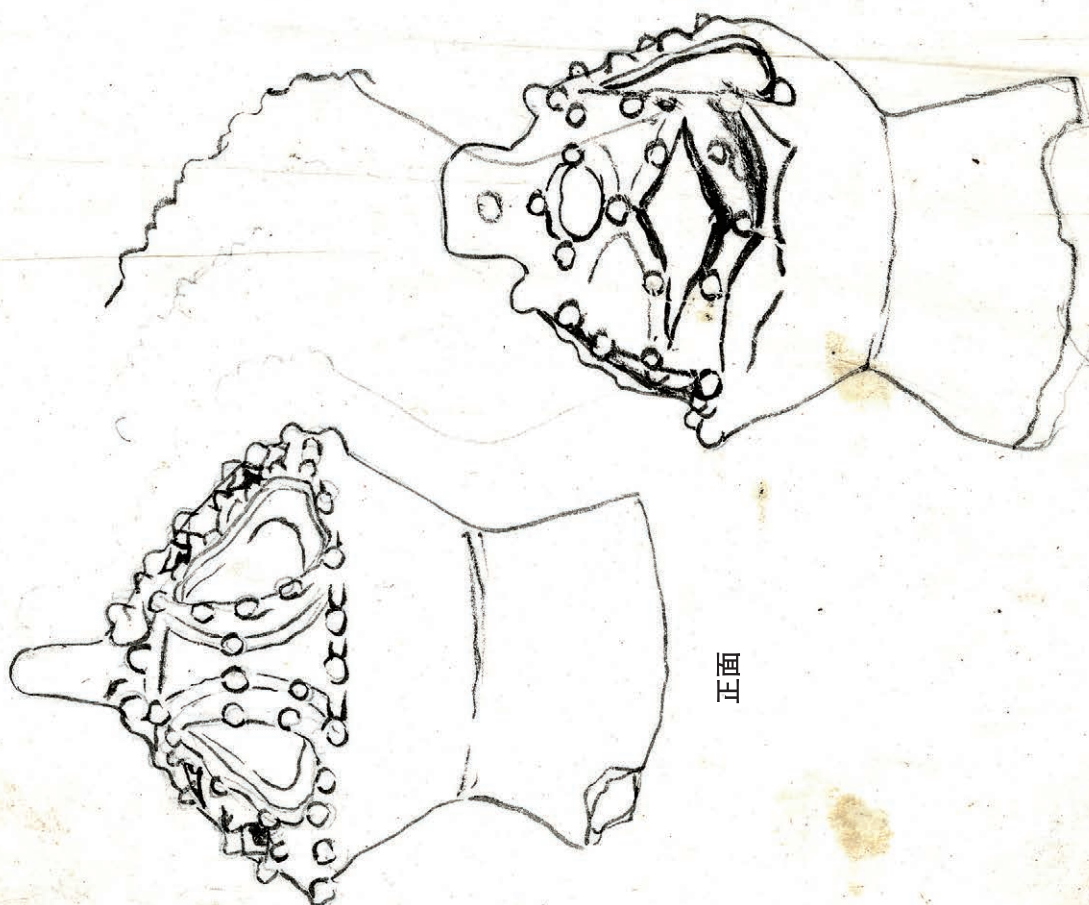
細口出

正山形村

熊澤氏藏

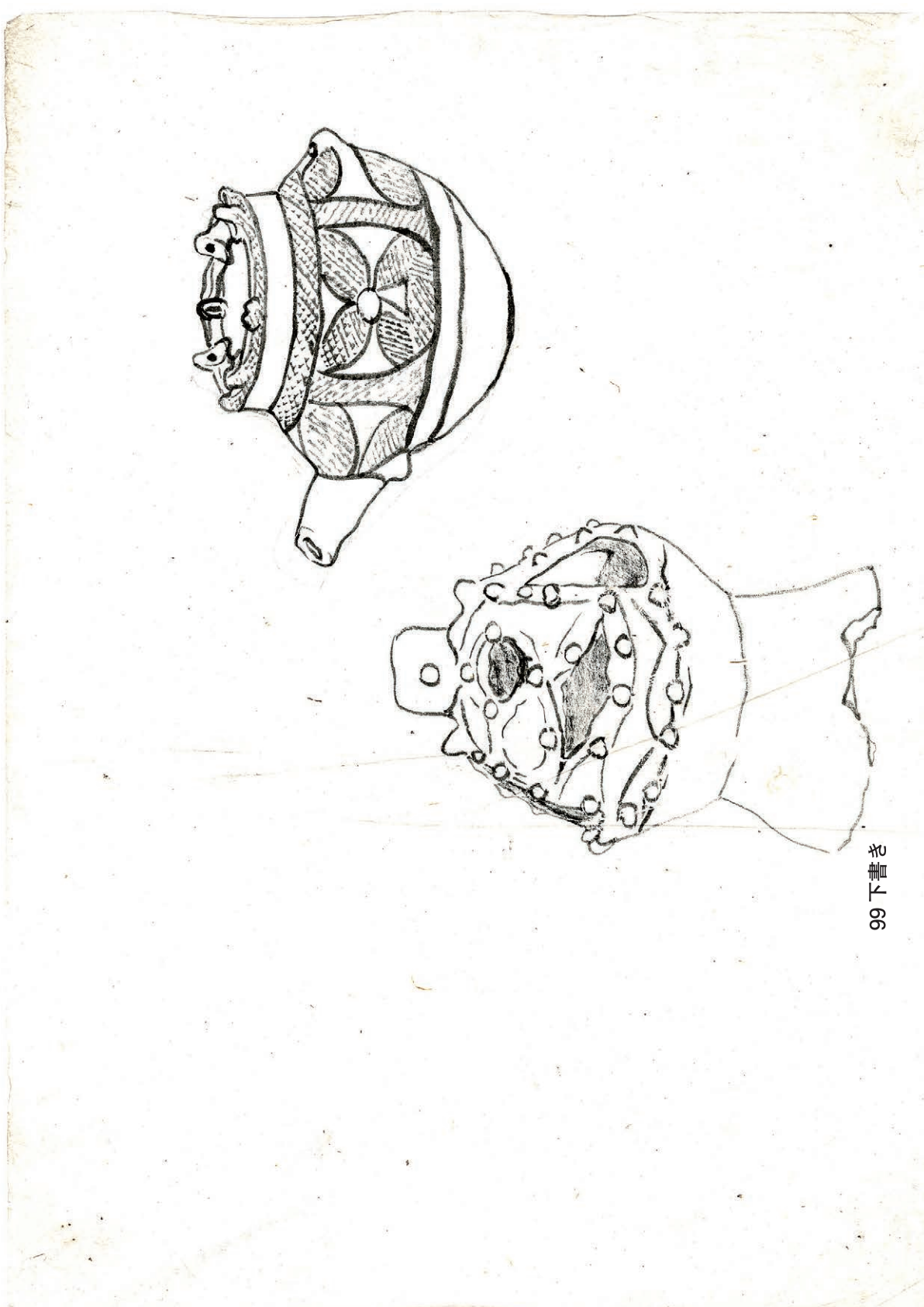


裏面



側面

正面



99 下書き

佐藤 蒨 考古画譜 I

2009年12月25日 発行

編集 関根達人

発行 弘前大学人文学部附属 亀ヶ岡文化研究センター
〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地
TEL 0172-39-3190

印刷 川口印刷工業株式会社 青森営業所
〒030-0811 青森県青森市青柳1丁目16-3 木村ビル2階
TEL 017-721-6520

